



夢の城

7

第Ⅲ部 メロランズ

第4章 サビーノ

リティアの物語 2

リティアの物語 3

“季節はもう知らぬ間に春になっておった”と老人はやがて、ポツリと話し始めた。

“あの猫が荒らした庭の花壇に植えてあったブルーベルの花も、いつのまにか咲き始めていた。ただあの猫が荒らしたところだけは、地面が剥き出しになったままで、花は咲かなかったがな。しかしわしは、リディアの悲しい気持だけはよく分かっていたつもりだ。リディアはあの猫を一番よく愛していたし、それが亡くなってからというもの、気の抜けたような生活をしていたのを、わしはじっと観察して来たからだ。――でも、春になる頃になって、リディアの閉ざされた心境も徐々に変化を見せるようになって来た。普段の、あの自然な子供らしさというものを、少しずつ取り戻して行ったのだ。彼女もやはり成長期にある子供で、老人みたいにならなくてもよくよしているというわけには行かなかったのだ。春になる頃になって、うっかりしまったままになっていた猫の写真数枚が、思いがけず戸棚から見つかった。それは既に知られていた貴重な猫の写真に比べて、ずっと写真写りのいいもので、リディアに見せると、彼女は喜んで、それを自分の部屋に飾った。ある日こっそりとわしが、二階の彼女の部屋に入り込むと、猫の写真は、彼女の部屋でも一番いい場所である、机の上に飾ってあった。全部で6枚ほどが額に収められて飾ってあったが、見れば見るほど、まるで生きていたときそのままのようで、可愛いものばかりだった。そして、わしもそのときになって、こんなに可愛い猫なら、リディアにあれほど愛されたのも当然のことだ、と初めて猫の可愛さに気づいたものだった。しかしそれはもう、ただ写真に収まっているだけの、地上では形のないものとなってしまっていたのだ...”

病室に腰掛けているぼくはふと、ベッドに横たえている老人から、窓の方に目を向けた。どんな猫かは知らないが、老人の口から語られた、白や褐色や黒の斑模様のそんな猫がママの子供時代にいたなんて、初めて知った話だったが、そんな遠い時代に、ママの心に深く影響を落とした猫がいたことを、ぼくは思わずにはいられなかった。それは小さな命には違いなかったが、しかしママにとっては、何よりもかけがえのないものに違いなかったのだ。ぼくの目には知らぬ間に、窓の外あの青空を背景に、野原を元気に飛び回っているその猫と、少女リディアとが互いにほたえ回っているそんな姿が目に見え始めるのだった...

“リディアはしかし、もう猫のことはほとんど口にしなくなった”と、やがて老人は言った。“そのことは大切に胸の中にしまい込んで、未来を生きて行こうとしているようだった。彼女は一つの試練を乗り越え、しっかりと人生を歩んで行こうとしているかのようだった。わしは、そんな彼女を持った父親であることを誇りに思い、また彼女のことをいとしくて仕方がなかった...”

春になって、リディアは再び普通の生活に戻った。最愛の猫がいなくなったからといって、歩みを止めるわけにはいかなかったのだ。そして猫が死んで初めて、リディアは気が付くのだった。

これまで余りにも猫に夢中になり過ぎたおかげで、周りのことが余り見えていなかったことを。――でも、村には、猫が死んだ後も、素晴らしい物事がいっぱい残っていた。何よりも素晴らしい自然が周りにはあり、学校には、ボンバル先生や、親しい友だちがいた。とりわけ、広い世界のことを教えてくれるボンバル先生の授業には興味をそそられた。それに、音楽だって好きだし、本当はピアノが弾きたかったのだが、家が貧しくて買うことができなかった為に、リディアは、以前に一度、その音色を聞いて一遍に好きになってしまったフルートを、ちゅうちょなく選ぶことにした。しかしその楽器は、村ではただ、ボンバル先生の執務室にしかなかった。ボンバル先生の愛用の楽器だったわけだが、リディアは願い出て、ときどきボンバル先生の手ほどきを受けたのだった。猫の刺繍を絶ってから、リディアの情熱はその楽器に注がれ、その腕もメキメキと上達して行った。しかも、勉強にも力が入り、ボンバル先生がときどき実施するテストでも、他の子供に比べて、頭抜けた成績を示すようになった。それは、ボンバル先生にとっても、ひとつの驚異という他はなかった。家が貧しくて、家に帰れば、さっそく家の仕事を手伝わされているはずのリディアに、どうしてそんな成績を上げるだけの余裕があるのか、先生には理解できなかった。

実際、リディア自身の成長の順調さとはうらはらに、リディアの家の方は以前に比べて余り芳しいとは言えなかった。その第一の原因は、なんと言っても、農業に不慣れなレオノールの素人仕事にあったが、それに輪をかけて、天災が、彼の仕事を行き詰まらせた。せっかく産まれた子牛も、飼料の不足から十分な乳牛に育つことができなかった。レオノールは、仕事の行き詰まりを決してリディアに口にしはしなかったが、父親の険しい顔の様子などから、リディアにはそれとなく分かっていた。

そしてついにある日、家の仕事はリディアひとりに任せて、村の伐採場へ出稼ぎに行くと言って、レオノールは、家から出て行った。その為にリディアは、学校を休みがちにならざるを得なかった。

レオノールは、家計が苦しくなったおり、リディアの登校と相前後して村の伐採場へ出掛けて行き、夕方遅く家に帰って来た。リディアはそのあいだ、残された家畜から、目を離すことができなかった。

リディアは一度、村の伐採場まではるばると、レオノールに弁当を届けに行ったことがあった。

その日はよく晴れた日で、リディアの歩いて行く長い沿道には、スマレやタンポポや、その他の可憐な花々が咲き乱れていた。村人たちはたいていもうリディアの知り合いであり、牛の世話をしている村人のひとりが、歩いて行くリディアに声を掛けた。

“やありディア、父さんは元気にしているかい？”

“ええ、お父さんに弁当を届けに行くの。父さんったら、弁当を忘れたものだから”

“そうかい、そう言や、お父さん、村の伐採場で働いているって話しだな”

“ええ、一週間ほど前からね”とリディアは答えた。

“――でも、あの辺りは危ないから気をつけてな”

“ええ大丈夫よ。これを届けたらすぐ帰るの”そう言うとリディアは、村人から別れて正面の、森林におおわれた山に向かって、真直ぐに歩みを始めた。

やがて、彼女がやって来た村の集材所では、大勢の男たちが、山積みされた木材のあちこちに群らがって、たばこをふかしたり、弁当を食べたりして、昼の休憩時間を楽しんでいた。彼女がやって来ても、最初、そこにいた男の誰もが、彼女が誰で、どういう目的でやって来たのかが分からなかった。

リディアはやって来るなり、最初に出会った男に、レオノールに会いたいことを告げた。

“おい、レオノール。お前の娘がやって来たぜ！”という叫び声が、この静かな山間いの場所に響き渡った。

すると間もなくして、休憩している男たちの間から、あのレオノールが姿を現したのだった。他の男たちと変わらないみすぼらしい作業服を着ていたが、その特徴のある体つきや、濃い口髭から見て、ひと目で、それがレオノールだということが分かった。

“リディアかい。どうしてお前、こんなところまでやって来たのだい？”と、レオノールは、リディアを見るなり言った。

“だってお父さん、弁当を忘れたんだもの”と、リディアは、上目使いにレオノールを見上げながら言った。“ハイ、これ”

レオノールは、リディアから弁当を受け取ると、感謝の気持ちを込めて言った。

“ごめん、ごめん。これを届けてくれたんだね。実は、きょうは昼飯抜きだとあきらめていたところだったんだよ。でも本当に遠いところ、よくやって来てくれた。道をよく間違えなかったもんだね”

“ええ、村の人に聞きもってやって来たの”と、リディアは、疲れた様子もなく答えた。

“それじゃまあ、こっちへ行ってお休み”

そう言ってレオノールは、男たちがジロジロと見守るなか、積材の空いたところへリディアを案内して、そこに坐らせた。

リディアは、木材の上に腰掛けると、初めてやって来たこの作業場を、興味深げに眺めた。

整然と、あるいは、無秩序に積み上げられた、まだ切り出したばかりの蓄材のところどころに男たちが群らがり、泥にまみれた集材用のトラクターが、材木のあいだに無造作に置かれてあった。リディアには、それらの男臭い世界が、自分を圧倒するような、何か大きな存在のように思われて来た。一言で言えば、リディアは、この乱暴な世界に興味を惹かれたのだ。

レオノールは、リディアに話しかけるのでもなく、黙々と食事を始めたが、そこへ、ライオンのような髭を生やした初めて見る男が、レオノールに近付いて来た。

“おいお前、こんなに可愛い娘がいたのか。わしにはひと言も言ってくれないで...”

男はリディアをジロジロ見るなり言った。

リディアは、警戒するような、敵意に満ちたまなざしで、その男を見た。

“何も尋ねなかったものだから...”と、レオノールは弁解した。“じゃ紹介するよ。これは、娘のリディア”それからレオノールはリディアの方に向いて、その男を紹介した。“リディア、この人はね、わたしを直接指導して下さっている、ライアンさんだ。年はわたしとほとんど変わらないんだが、何んでも相談にのってくれる、とってもいい人なんだよ...”

それで、リディアは形式的にその男と握手をせざるを得なかったが、子供の本能と言うべきか、ひと目見ただけで、どうしてもその男を好きになる気にはなれなかった。

男は、レオノールの横に坐ると、仕事上のことについて色々と話しかけた。その話しで分かったことは、レオノールはまだこの集材所で働いていて、危険な伐採作業には手をつけていないということだった。しかしもう間もなく、山奥の伐採所まで行って、その作業に携わることになるだろう...

やがて、昼休みの終わりを告げる笛の音で、男たちはめいめい立ち上がり、働く準備にかかった。レオノールも立ち上がり、リディアの頭を可愛げになでてやりながら、安全なところまで彼女を連れて行くと、優しく送り返してやるのだった。

しかしリディアは、すぐには帰らず、その場に立って、男たちの、とりわけ、レオノールの働く様を見送った。彼らは、トラクターによって運ばれて来る木材を、クレーンによって次々と、手際よく巻立てをして行った。その大仕掛けな、クレーンのワイヤーに吊り上げられて行く木材の姿が、リディアを圧倒した。また別のところでは、山積みされた木材が、やって来たトラックに積み込まれ、それは、さらにふもとの、あのリトイアの駅まで運ばれて行くのだった。

リディアは、レオノールが、ワイヤーにしっかりと木材を結びつける作業をしているのを見つめながら、嬉しいような、ほっとした気持になって、帰途につくのだった...

ある日の放課後、リディアは、週に一度のフルートのレッスンを、ボンバル先生の部屋で受けていた。よく空の晴れた、さわやかな日だった。窓の外の樹木や草の輝きが素晴らしく、光と影の織りなすその様は美しかった。半分あけ放された窓からは心地良い風が吹き込み、リディアを心身ともうっとりさせた。ボンバル先生はソファに深々と腰を降ろし、フルートを持って立つリディアを見つめていた。

“さあ、もう一度吹いてみなさい”と、先生は言った。

リディアは、吹口を唇に当てて、フルートを横に構えると、表情豊かに、力強く吹き始めた。それはバッハの曲だったが、吹いているうちに、この部屋の静けさや、窓の外の風景の美しさといまわって、うっとりするような、幸せな気持がいや増してくるのだった。

先生は、それでいいとばかり目を閉じて、リディアの演奏を、以前のように制止する様子もなかった。

そうしてわずかな時が流れたとき、ふっと窓に目をやると、驚いたことに、窓の外でリディアの演奏に目を向けている、同級生の男の子の顔が三つほどあるのに気が付いた。彼らは、物を言わないが、ニヤニヤした顔で、リディア自身を見つめている。だからと言ってリディアは演奏を止めるわけには行かなかった。しかしそのときだった、リディアの心の中に突然、窓に顔をくっつけてこちらを見つめているあの子のような、男の兄弟が欲しい、と思ったのは。どちらかと言えば、弟がいい。弟がいれば、自分のあの寂しい家もどんなにか潤うことだろう。

やがて、演奏が終わるや、三人の男の子たちは、ワーツと笑い声を立てながら、我先に窓から離れ、向う側に駆けて行った。

その音で、先生はハッと目を覚ました。そして、去って行く男の子には目もくれずに、リディアの方を見た。

“なかなかよかったよ、リディア”と先生は言った。“でも、週に一度しか、練習時間がないって、惜しいな”

“これでも、お父さんに無理を言って、やっとやらせてもらっているんです”と、リディアは答えた。

“そう言えば、君のお父さんは、もう家の仕事は殆どしていないそうだね”

“ええ、牛がかなり減りましたから”とリディアは答えた。“でも、何頭かはいるんです。その世話は全部わたしに任せきりですの”

“でも、女の君じゃ、少し荷が重すぎやしないか”と、ボンバル先生は言った。“こう言っちゃなんだが、君の家には男手がいるんじゃないかい。あの家を君ひとりに任せるなんて、ヒド過ぎるよ...”

“そう言ってもらうの、嬉しいわ”と、リディアは素直に答えた。“でも今のところはなんとかやっているんです。そりゃ確かに、足りないところはいくらでもありますけれど...”

先生は、もうそのことに関してはそれ以上何も言わず、ただにっこりするだけだった。

“リディア、きょうの演奏はなかなか素晴らしかったよ。自信を持っていい”と、先生はほめてくれた。“時々家は家で練習することもあるのかい？”

“ええ、仕事のあいまに少しばかり...”と、リディアは答えた。

その日はそれで帰ったが、実際リディアにとって、フルートを吹くのが一番楽しいときだった。

家の仕事はほとんど一人に任され、友達と遊ぶことのない孤独の時間が続いたが、それでも、ほんの少しばかり手が空いたときなど、リディアは自分の部屋に駆け込み、よくフルートを吹いた。二階の窓から自分の家の庭を見下ろし、風の吹くままにフルートを吹いた。フルートを吹いているあいだだけ、リディアを、現実の世界から引き放し、うっとりするような、夢見る世界に連れて行ってくれるのだった。

そしていつしか、一人の可愛い男の子が、この家に来るのを、リディアは空想するようになった。そして、ふと思うのだった。せっかくのわたしのこの演奏を、あの猫に聞かすことができなくて、残念だわ。リディアの心の片隅には、まだあの猫の思いが、色濃く陰を落としていたのも事実だった。

そしてリディアは、フルートを片手に家を駆け出し、自転車に乗って山が重なるようになっている谷あいの、きれいな小川が流れている、まだ来たこともない岸辺にまでやって来たことがあった。

そこで、周りには誰も人がいないのを確認すると、リディアは思いの丈を込めて、フルートを吹いた。一つは寂しいからであり、一つは悲しいからであり、もう一つは、夢見るような生活をしたかったからでもあった。しかし、その夢が何んであるか、リディアには分からなかった。

眼下を蛇行する小川は、力強く流れ、風もさわやかと言うよりは、少し強い日だった。リディアは、山や森に囲まれたこの穏やかな田舎の風景とは対照的に、自分の心が少し激し過ぎるのを感じた。

どうしてそんなに激し過ぎるのか、自分は一体何を求めているのか、そうしたことを感じながらも、そのことについて考えたくはなかった。考えれば自分の心を苦しめるのが分かっていたから、リディアは、何もかも忘れようと、ひたすらフルートを吹き続けた。フルートを吹き続けながら、頭に立ち昇る想念のひとつひとつを――こうしてはいられない、というような衝動や、悲しい猫の死を痛む気持や、夢見るような館や、あの家の美しい庭の思い出や、泣きながら去って行ったリディアの親密だった女の子の思い出などのひとつひとつを、リディアは消し去ろうとした。それらの衝動や、抑制された感情を、今ここで一気に解き放つのではなく、むしろ抑制してこそ、心の平安や、日常生活の平衡を保つことが出来るのを、リディアは知っていた。しかし、そうしようにも、リディアには出来なかった。リディアは、フルートに夢中になりながらも、それら、ひとつひとつの思い出を蘇らせ、それらの持つ意味を問い、未来をどう生きて行こうかと考えている自分の姿を見出すのだった...

リディアが、誰にも語れない心の秘密や、孤独の喜び、といったものを知ったのは、その頃だった。死んだ猫の記憶は、それを思い出すたびに、心が痛むのを感じた。そしてまた、孤独の喜びは、秘密の喜びでもあった。それは、自分しか知らない何かを発見し、それを大切に胸の中にしまい込みながら家路を急ぐ、あの気持にも似ていた。幼いリディアには、身の周りに、感動すべき物事が、いくつでもあった。しかしそれらの喜びを持ち帰っても、今や語るべき人が誰もいないのが、幼いリディアには悲しかった。レオノールは日増しに帰って来るのが遅くなった。酒を飲んだり、トランプでの賭博を始めたのだ。

それから数ヶ月が流れた夏のある日、レオノールは突然一通の手紙を受け取りリディアには何

も告げず、あわただしく家を出て行ったきり、数日間家を留守にした。

リディアは再びひとりになって、あの猫と一緒にいた日のことを思い出したが、幸いなことにそれほど寂しいとは思わなかった。というのも、春になって、――それは4月20日のことだったが――、偶然、今度は、真白な猫が、リディアの家に住み込むようになったからだった。今度の猫は、体つきは、前の猫よりもほっそりしていて、年齢もずっと若々しかった。歯もきっちり揃っていて、その猫と信頼関係を打ち立てるのに、前の猫と同じ程の期間を要したが、しかし結局のところ、前の猫のように家猫ではなく、本性は野良猫に近い、ということがリディアにも分かった。最初の頃、初めて家の中に閉じ込めたときの猫の驚きよう、必死のあがきようは、今もリディアの記憶に残っていたが、段々と家の中に入ることに慣れて来ても、それは結局のところ、えさをもらう為で、本当は外で暮らすのが好きだ、ということがリディアにも分かって来た。だから、その猫とリディアの関係は、前の猫ほどの親密なものではなく、えさと、ときどき寂しさを紛らせる為の遊びだけの関係だ、ということが分かった。それで、その猫では、とても、前の猫の代役を勤めることはできなかったので、その猫を愛撫しながらも、亡くなった猫を思うときの寂しさをいやすことはできなかった。それでも、全くの穴埋めは出来ないにせよ、その猫がいてくれたおかげで、いくらか気を紛らせることはできたのだった。

そして、レオノールのいないひとりぼっちのときも、リディアは、その猫がいてくれたおかげで、いないときに想像されるような寂しさを味わわずに済んだのだった。

この白猫については、前の猫ほどのエピソードはなく、今のところ、前の猫と同じように避妊の手術を受けたことと、あの片目の白いボス猫と仲むつまじくしている光景をリディアは目にし、あるいは、あのボス猫の子供ではないかと思われたことの二点に、とどめておくことにしよう。

それはさておき、10日程経った7月3日の午後、リディアがいつものように牛の世話をしていると、突然外で物音がしたので、あわててリディアは外へ飛び出した。

すると、晴れた庭のまん中に、レオノールと、見たこともない少年が――それも、リディアが期待したのとは正反対の、年上で、きょとんとした、余り賢そうでない顔つきの少年が立っているのを、リディアは目にした。

“レオン君だ。お前の牛の世話の代わりにしてくれる為にやって来てくれた。一度会ったことがあるだろう”と、レオノールは、さっそくリディアに紹介した。

そう言えば、リディアは思い出した。一度、ドーク夫人を見舞いに行ったときにいた男の子のことを。しかし、印象が薄くて、すぐには思い出すことができなかったのだ。

“可哀そうに、レオン君は、お父さんも亡くして、ひとりぼっちになってしまったのだ。それで、わしが引き取ることにした。これは、亡くなる前のお父さんとも直接話し合った結果だ。これからは一緒に暮らすことになるからね、仲良くしてあげておくれ”

レオノールがそう言うと、レオンと言われた男の子は、引っ込みがちに、

“ぼく、レオンです。よろしく”と、リディアにあいさつした。

突然降って沸いた出来事に、リディアはとまどうばかりだったが、しかし、心の中では言いようのない嬉しさを感じながら、

“わたしこそよろしく。リディアです”と言って、その少年に手をさし出した。

少年もすぐリディアに手をさし出し、リディアの手と握手をしたが、そのとたん、リディアはハッとなって、もう一度自分の手を見た。リディアはうっかりして、牛の飼料をこねていた汚れた手をさし出していたのだ。

“あっ御免なさい、汚れた手を出してしまって”と、リディアはあわてて謝った。

すると少年は、汚された自分の手を見て顔をしかめたが、それに対しては何も答えなかった。

リディアは、そんなぎこちない年上の少年の態度をほほえましく思って、つい笑顔を見せてしまった。すると少年も、それにつられて、にっこりするのだった。

“さあ、これで二人は友だちだ”と、レオノールは二人の様子を見ながら言った。“というより兄妹だ。これからは、同じ屋根の下で暮らすんだからね。さあ、それじゃレオン、荷物を持って。君の部屋へ案内しよう...”

そう言って、レオノールは、少年を連れて、家の方へと向かった。

リディアは、その場に立って、少年の後ろ姿を見守った。

ついに家族が一人増えたのだ。しかも、リディアが期待していたような男の子、兄さんだった。リディアは、なんとも言えぬ嬉しい気持が込み上げて来て、そのまま牛舎に向かった。そして牛の世話を続けるリディアの心は、今にも羽根が生えて、空を飛んで行きそうだった...

しばらくして、体をきれいにして、家に戻ると、二階の自分の部屋の辺りで、レオノールが何か言っている声が聞こえて来た。それで静かに階段を上がって行くと、自分の部屋の向かいの部屋のドアが開いていて、その前にレオノールが立っていた。

リディアがやって来ると、室内では、レオンが荷物の整理をしている最中だった。レオンは、リディアの物音に気づき振り向いたが、そのとたん、二人の目が合った。

長いあいだ空き部屋だったこの部屋に、亡くなったオルガおぼさんのベッドが運び込まれていた。レオンは今後、そのベッドで寝ることになるのだ。レオンはまだ勝手が分からないような表情をしながら、丹念に荷物の整理をしていた。

やがて、レオノールは、リディアをその場に残したまま、ほっと息をつくようにして、下へと引き上げて行った。

リディアは、しばらくドアのところに立ったまま、何を言い出すべきか迷っていた。でもこうして二人きりになった以上、何かしゃべらないわけには行かないのだ。

“お父さん、亡くなったの？”と、やがてリディアは、それとなく言った。

“そうだよ”と、少年は、荷物を整理しながら、ぶっきらぼうに答えた。

“でも、悲しくはないの？”と、リディアはまた尋ねた。

“いつまでも悲しんでなんかられないよ”と、少年はまたそっけなく答えた。“それに、お父さんのときはなぜか、そんなに悲しくはなかった。死ぬのが分かっていたからかも知れないしね。ぼくが本当に悲しんだのは、お母さんのときだ。あのときは本当に悲しくて、死んでしまいそうだった...”

“死んでしまいそう？”と、リディアは尋ねた。

“つまり、死んでしまいたいぐらい悲しかったってこと。君にはないのかい？ そんなに悲しんだことは”

そう言ってレオンは、整理の手を休めて、リディアを見た。

“わたしだってあるわ。余り口には出さないけれど、最近では猫が死んだときで、その前は、オルガおばさん。そのもっと前には、わたしのお父さんとお母さん...”

“ふ～ん、随分あるんだね”と、レオンは言った。“――でも最後の猫だけは、ぼくの両親と同じにしてもらわれちゃ困るな。そんなのと同じだと、とても思えないもの”

“なぜよ”と、リディアは反論した。“猫だって同じよ。同じ生活をしていれば、その死は、人間と変わらないわ。悲しい気持だって、人間のときとおんなじよ”

“そんなものかね”と、レオンはあえて、反論はしなかった。“――でもこれで、君とぼくとは、お互い、境遇がよく似ている、ということが分かったわけだ。初めて見たとき何も辛いことなど知らない子かと思ったけど、そうでなくてよかったよ。ぼくなんてこれまで、ほとんどいいことなんて、なかったものね”

“でも、学校は行ってたんでしょ？”と、リディアは尋ねた。

“いや、学校なんてほとんど行かなかった。家が貧しくて、小さいときから家の手伝いさ。そのまま学校を卒業してしまって、それからもずっと仕事のしづめさ。でも、勉強はそんなに好きじゃないし、ぼくって、生まれつきそんな運命なんだ。おかげで字が読めなくって。君は読めるんだろう。ぼくと違って、賢いような顔をしているからね”

“ええ、読めるわ”と、リディアは答えた。

“だったら、字だけを教えておくれよ。他のことはいいからさ”と、レオンは言った。“ときどき困るんだよ、字が読めなくて。ろくすっぽ学校に行かなくって、今ではそのことだけ後悔しているんだ。ねえ、いいだろう。それだけのことだからさ”

“ええ、いいわ”と、リディアはにっこりしながら答えた。

それからリディアは、レオンが必死に荷造りのひもといているのを見て、

“ねえ、他に何か、手伝うことはない？”と、声を掛けた。

“うん、今のところはないさ。ありがとう”と、レオンは答えた。“あっそうだ、何か飲物はない？ のどがカラカラでね”

“お易い御用よ。水でいい？”と、リディアは言い、レオンがうなづくと、元気よく階下へ、水をとりに駆けて行った。

やがてリディアが戻って来ると、レオンは、さきほどの荷物の中身を、ベッドの上に散らかし

ている最中だった。

それは、レオンの身の周りの品々の他に、見たこともないような代物もあった。

レオンは、リディアの持って来たコップの水を受け取ると、うまそうに、一息に呑み干した。

そのあいだ、リディアは、物珍しそうに、レオンの持って来た品々を見つめているのだった。

“それ、何？ 変わっているわね”と、リディアは、ベッドの上にころがっている、毛の生えた、見慣れない品物を見て言った。

“ああ、これかい？”と、レオンは、その気味の悪い品物を、ぞんざいに手に取って言った。“これは、幸運を呼ぶ兎の足さ。どこかの国の昔からの言い伝えでね、兎の足を持っていれば、幸運を呼ぶんだってさ。これは、ママからもらった、大切なママの形見さ。ママも、小さいときから誰かからもらったと言っていたけど、欲しけりや、君にやるよ”

“でも、そんなの、悪いわ”と、リディアは言った。

最初、兎の足と聞いて気味悪く感じたが、幸運を呼ぶと聞くと、リディアは、少し欲しいような気もして来たのだ。

“でも、それは、あんたの為にとって、あんたのママがくれたんでしょ？”

“そんなこと、気にしない”と、少年は、いともあっさりと答えた。“これを持ってたおかげで君に会えたんだしね。もうぼくにはすっかり、幸運がしみついているんだ。大事な人にあげるんなら、それはかまわないってママは言っていたから。これ、君にあげるよ。これは、ぼくからのプレゼントさ。とっておきなよ”

そう言って、少年は、リディアに、そのうさぎの足をさし出した。

リディアは、少し気味悪そうに、恐る恐るそれを受け取った。

“確かにこれ、うさぎの足ね”と、手に取って、つくづくそれを見回しながら、リディアは言った。“この為に犠牲になった兎が、少し可哀そうな気がするわ”

“なあに、みんなの幸せの為に犠牲になるのだったら、死んだうさぎも、きっと喜んでくれると思うよ”レオンは、ためらうことなく、さっと言ってのけた。

“そうかもね”と、リディアは、なおもそれを見つめながら言った。

それから、少年の方に向き直ると、

“ありがとう、レオン”と言った。“あんたから大事なものをもらったのに、わたしからあげるものって、何もないわ。何かあげるものって、ないかしら？”

“いいんだよ、君の役に立ちさえすりゃ”と、レオンは言った。“でももしお返しがあったら言うんなら、ひとつだけ、かまわないかな。実は、ここへ、キスしてもらいたいんだ”

そう言って、レオンは、自分の額を指さした。

リディアは思わずにっこりした。

“いいわ。お易い御用よ”

そう言って、そっとリディアは、レオンの額にキスをした。

それは、素晴らしく天気の良い日だった。窓からは、真白な雲が二つ、ブルーの空を背景に、互いに移動し、からみ合っている光景が、新参者の少年のいる、この部屋に立っているリディアの目に飛び込んで来た。窓の外の木の葉が、小刻みに、風に震えていた。

“あんたって、兄弟はいなかったの？”しばらくしてから、リディアは、それとなく尋ねてみた。
“いや、いることはいたよ”と、少年は、少し暗い顔をして答えた。“兄貴がひとりと、弟がね——でも、弟は、ママが死んでからあんまり泣くんで、親戚の人が引き取って行ったよ。その日以来、弟とは会ってはいないよ。ぼくよか、四つつほど年下だったけどね。それから、残されたぼくと兄貴とは、別々に引き取られて行ったわけさ。どちらも、二人を引き取るには無理があったらしいからね...”

“ふ～ん、じゃあ、兄弟バラバラってわけね”と、リディアは、少し気の毒に思いながら言った。“兄さんや弟さんとは、会いたいとは思わない？”

“そりゃ思うさ”と、少年は、きつとなって言った。“——でもそれは、許されない相談だろう。それに、今回は君に会えたんだもの”

リディアは、その言葉で、少しほっとしたように笑った。

“君の方はどうなんだい？”しばらくしてから、逆に、少年が聞き返した。

“わたし？”と、リディアは驚いたように言った。

“あっそうか。君はここの人で、ひとりだけだったんだね”と、少年はすぐ気が付いたのか、言い直すように言った。

“でも、本当は違うのよ”それに対しては、リディアは、申し開くように言った。“実はわたしも、あんたとおんなじで、この家にやって来ただけよ。その前は、ロアズマというところの大きなおうちに住んでたわ。——でも両親が死んでしまって、それで...”

“えーっ！　じゃあの人、君のお父さんじゃないのかい？”と、少年は驚いたように声を荒げた。

“静かに”と、リディアはビックリして、注意した。“あんまり大きな声を立てないで。お父さんが気を悪くするから。実はね、わたし、お父さんって呼んでいるけど、本当のお父さんじゃないの。本当のお父さんは、あんたとおんなじで死んでしまったわ。——でも今じゃあの人、お父さんの代わりだと思ってる。それから、わたしは、あんたと違って兄弟がいなかったから、正真正銘のひとりぼっちよ”

“そうかい。よく分かったよ”と、少年は答えた。“じゃ、これからもよろしく”

“ええ、わたしこそよろしく”

そう言って、お互い、少し微笑みながら、手を差し出し、固い握手をかわした。

このようにして、リディアとレオンとの第一日は始まった。それは、リディアにとって、新しい人生の始まりだった。

レオンは荷物をひと通り片づけると、その日からさっそく、乳しぼりや、チーズ造りの勉強を始めた。しかし、家でも同様の作業をしていたせいで、呑み込みも速く、ある面では、リディア以上にうまくこなすのだった。

異臭が鼻をつく、薄明るい牛小屋で、少年と二人きりになって、牛のことを色々と教えるのがリディアには楽しかった。少年はひとつひとつ、リディアの言うことをよく聞きながら覚えて行った。

少年が来てくれたおかげで、リディアはもうほとんど、そちらの方を少年に任せることが出来、食事の準備と、そしてちょっぴり、自分の趣味や勉強の為に、時間をさくことが出来そうだった。

最初の日の夕食時には、珍しく三人が、同じテーブルに着く光景が見られた。テーブルの上には、リディアが、オルガ伯母さんから習った、とっておきの暖かい、羊肉の料理が並んでいた。

“どうだい？ ここへ来た感想は”と、レオノールが、テーブルの両側に、向き合うように並んでいる、レオンとリディアとを交互に見つめながら言った。

“仕事の内容も今までの延長みたいだし、なんとかやって行けそうです”と、レオンはリディアを見つめながら答えた。

“リディア、ちゃんと教えてくれたのかい？”と、今度は、リディアの方に向き直ってレオノールは言った。

“ええ、でも殆ど教えることなんてなかったわ”と、リディアは答えた。“レオンは、乳しぼりなんか、わたしよりうまいのよ”

“こら、リディア”と、レオノールは注意した。“レオンって、呼び捨てにししないで、ちゃんと兄さんと呼びなさい。レオンは、お前より年上だし、これからは兄さんなんだからね”

“ええ、でもなんだか...”と言いかけて口を止めたのも、まだ会ったばかりだし、兄さんなんて言うのも、リディアは照れくさかったからだ。しかし、

“分かりました。そう言うように努力します”と答えた。

そう言って、レオンを見ると、レオンは、クスクスと笑っていた。

その二人の様子を見て、レオノールも安心したようだった。

“どうやらお前たちもうまく行っているようだな”と、レオノールは言った。“レオンも最初は寂しいだろうが、徐々にここの生活に慣れて行くといい。分からないことがあれば、なんでもこのリディアに聞きなさい。いいね”

レオノールがそう言うと、レオンは、ためらいがちに、

“はい、そうします”と答えた。

レオンが来た日の最初の夜がやって来た。

リディアは後片付けを終えて、ようやく7時過ぎに二階の自分の部屋に戻って行くとき、ふと、隣の部屋にいるはずのレオンのことが気になった。

どうしても話したい、という押さえ切れない衝動にかられて、リディアはつい、部屋のドアをノックした。

“いいよ、あいているから”という声の中からした。

リディアがそっとドアをあけると、レオンが半ズボンの姿でベッドの上に足を投げ出し、こちらを向いた恰好で、長々とベッドに横たえていた。

“一体、何んの用だい？”と、レオンは、体を横にしたまま尋ねた。

“いえなに、ただあんたと話しがしたかっただけよ”と、リディアは答えた。

それから少し言葉に窮し、きまり悪そうに、リディアは周りを見回した。きちんと片付けられた、素っ気ない部屋を見ても、特に何も思い浮かばず、ただ、レオンが本を読むのでもなく、何もせずに寝そべっていたのが気になった。

“そこで何をしていたの？”と、リディアはやがて、それとなく聞いた。

“考えていたのさ”と、レオンは答えた。“どうしてこんな家にやって来ちまったんだろうかってね。誰だって、生活が変われば、考えるものさ。それに、つい最近、ぼくのお父さんが死んだんだしね。あれ以来、本当にあわただしかった...”

“それで、今までのこと、振り返っていたのね”と、リディアは答えた。分かるわ、わたしだってそうだったもの。――でも、寂しさも初めのうちよ。そのうち、だんだんと慣れて来るわ”

“でもね、今は”と、レオンは言った。“今は、来たばかりなんだ。どうしても、こっちのことよりは、前の家のことを考えてしまうよ。忙しくて、休む暇もなかったけど、お母さんもお父さんもいて、弟も兄貴もいた。それなりに幸せだった。それなのにさ、みんなどこへ行っちまったんだろう。今は、ぼくひとりさ。そりゃ苦しかったけど、あんなにいい生活はなかったんだ。どうしてもあのときのことを思い出してしまうよ...”

あらぬ方向を見つめながら、そう、うつろに言うレオンの頬には一筋の涙が光っていた。

リディアは、それに対しては、言うべき言葉が見つからなかった。自分だって、かつては、そうだったからだ。リディアも、レオンを慰めるどころか、自分も、自分の不幸な境遇のことを思い出して、一緒になって泣いてしまいたいぐらいの気持だった。

しかし、やがてレオンは、めそめそするのをやめた。

“あっそうだ、君のさっきの料理、なかなかのものだったよ”と、レオンは話題を変えて言った。“君って、なかなか料理がうまいんだね”

“オルガおばさんから習ったからよ”と、リディアは答えた。“オルガおばさんって、ここに元いたおばさんのことよ。もう、亡くなってから、かれこれ三年になるわ。料理とレース編みが上手で、両方ともおばさんから習ったの”

“へえ～。君は編物もできるの？”と、レオンは驚いたように言った。

“そう、少しだけだけど...”と、リディアは答えた。“そうだわ。わたしの部屋に来たら、レース編みがたくさんあるわ。たいていは猫のデザインだけど... 気に入ったのがあれば、あんたにあげるわ”

“そうかい。じゃ少しだけ、見せてもらおうかな”

二人はそう言って、今度は、リディアの部屋に向かった。

レオンは、女の子の部屋に入るのは初めてで、少しためらいがちになった。

しかしリディアは、レオンの手を引いて、元気よく中へ導いた。

“君の部屋も、きれいに片づいているんだね”と、レオンは、リディアの身ぎれいな部屋の様子を見て、第一声を発した。“それにたくさんの本。君って、なかなかの読書家なんだね。この本だけは、ぼくの部屋にないものだ。それから、これは何んなの？”

そう言って、レオンは、部屋の片隅に置いてあったフルートを指さした。

“これは楽器で、フルートというの。知らない？”と、リディアは言った。

“知らないね”と、レオンは、感心したように言うのだった。“見たこともないね”

“ならいいわ。弾いて聞かせましょうか”と、リディアは得意気に言った。

“ええ、お願いするよ”と、レオンが言ったので、

リディアは、適当な曲を思い出して、吹き始めた。

リディアが吹くあいだ、レオンは、その場に立ったまま、聞きほれるように、リディアのフルートの音色に耳を傾けていた。

その甘く、優しい曲が終わると、レオンは、あらん限りの喜びを表して拍手をした。

“なかなかのものだよ”と、レオンは言った。“君って、才能があるんだね。なんでもできるんだから”

“でも、まだまだそんなにうまくは弾けないの”と、リディアは正直に言った。“ピアノだったら、もう少しうまく弾けたかも知れないのにね。――でも、うちも、そんなに裕福じゃないから、ピアノは置けないのよ。へたなフルート聞かせて、御免なさいね”

“いや、なかなかのものさ”と、レオンは言った。“それに、ピアノも弾けるんだって？ ぼくなんか、夢のまた夢みたいな話しだね。家でよく練習しているの？”

“それがね...”と言って、リディアは少し顔を曇らせた。“父さんがあまり聞きたがらないの。音楽って、あまり好きじゃないみたい。だから、家で練習していたら、うるさいって、よく怒られるのよ。だから、練習するときはたいてい学校だよ”

“ふ～ん、そうか”と、レオンは、少し考えるように言った。“それで、君の言っていたレース編みって、どこにあるの？”

“そうそう、それだったわね”そう言って、リディアは、思い出したように、戸棚の中を捜し始めた。そして、自分のつくったものの全部を取り出すと、それをかかえて、ベッドの上に並べた

“へえ～、随分とあるんだね”と、レオンは、感心したように言った。

そして、熱心に、一つ一つ手に取ってみては、その膚ざわりやデザインを観察しているようだった。

“それにしても、全部猫なんだね”と、レオンは言った。“どうして、猫ばかりなの？”

予期していた質問ただけに、思わずリディアは苦笑した。

“だって、猫が好きだったからよ”と、リディアは答えた。

そう答えるリディアには、もう、あの猫のことを思い出して悲しくなるほど、センチメンタルな気持にはならなかった。

“じゃ、これをひとつもらおうよ。いい？”

そう言って少年がつかんだのは、レースの枕カバーだった。

“いいわ、あげるわ”と、リディアは答えた。

“他にも欲しいものがあったら言ってね”そう言いながら、リディアは、残りのレースを棚にしまい込んだ。

レオンはさっそくそれを持って、自分の枕に取りつけ始めた。思いの外きっちりと、それはレオンの枕に収まったのだった。

それからしばらくすると、

“ああそうだ、夜周りに行かないかい？”と、レオンは言った。“前の家ではいつも回っていたんだ。牛が病気になっているかも知れないしね。気になるんだよ”

“ええいいわ”とリディアも答えた。

やがて二人は家を後にした。レオノールは、居間でひとり、パイプをくゆらせて、何か本を読んでいた。最近の夜は、いつも友だちの家なのに、とリディアは思った。きょうはレオンが来たので、特別な姿を見せたいらしい。二人が階段を降りて来て、居間を通って行くとき、

“どこへ行くんだ？”と、レオノールは声を掛けたが、

“牛を見に行くだけよ”と、リディアは答えた。

外に出ると、空にはたくさんの星が輝いている他、上弦の月が美しかった。

リディアが思わず空を見上げると、一筋の流れ星がさっと空を過った。

“あっ、流れ星よ！”と、リディアは思わず声をたてた。

“どこ？”そう言って、レオンが声を掛けたときには、もうその姿は見えなかった。

しかしそのときに、二人とも、満天の無数の星に気を留めた。お互いの姿は、かすかに月に照らされて、シルエットのようにしか見えなかったが、この寂しい夜の、神秘性を感じるには、それで十分だった。リディアはその瞬間、どうして二人は、ここで出会うようになったのだろう、と考えた。それは単なる偶然なのか、それとも何か意味のある引き合わせなのだろうか。いずれにせよ、レオンがここにいることが、何か不思議な気がしてならなかった。

“さあ、それじゃ、行きましょ”と、リディアは言った。

二人が牛小舎に来て明かりをつけると、ほのかなランプの光に照らされて、牛が、それぞれの場所にいる姿が目に入って来た。大きな尻を通路側に向け、昼間と違って、のんびりと眠っている姿が一種異様さを感じさせた。レオンは、真剣なまなざしで、一頭一頭についてランプを掲げ、異常はないか、チェックをして行くのだった。リディアは、そこだけが明るく照らされた牛舎内の光景を目にして、昼間では感じられないような興奮を感じるのだった。

“異常はないようだね”と、レオンは言った。“――でも、奥から二頭目のあの牛は、余りえさをやらない方がいいよ。もう、乳の出が悪くなっているようだからね”

“そんなこと、分かるの？”と、リディアは感心したように言った。

“乳の張り具合とか、体の締まり具合なんかで分かるのさ”と、レオンは、何気なしに言った。“乳の出ない牛にえさをたくさんやるのは無駄なことだからね”

“へえ～、さすがね、レオン”と、リディアは、今まで知らなかった発見に驚くのだった。

“きょうはそんなところかな。さあ行こう...”

レオンは、得意気にランプを牛から離すと、牛舎から出て行こうとした。

“でも、この小舎も、改良できそうなところがたくさんありそうだ”と、レオンは出しなに言うのだった。“だいたい子牛はどこで育てるの？ もっと寒さに強い、暖かい部屋がいるんだがな。今は夏だからいいけど、冬になりゃ、ここは寒そうだからね...”

“お父さんったら、牛にかけては素人なのよ”と、リディアは、いまいましそうに言った。“でも、あんたが来てくれたおかげで、なんとかなりそうだわ”

リディアには、牛となると目を輝かせる、そんなレオンの姿がたのもしくてならなかった...

翌朝リディアが目覚めると、窓の外はもう明るくなっていた。快い小鳥たちのさえずりが、枕元にも聞こえて来た。リディアはすぐ下に降りて行こうとしたが、すぐあのレオンのことが気になった。そうだ、昨日からあのレオンが来ているんだわ、とリディアは思った。それから廊下に出ると、レオンの部屋のドアがなぜか開け放されたままになっていた。リディアが中を覗くと、レオンの部屋の中は、からっぽだった。レオノールがまだ眠っているのは、レオノールの部屋から聞こえて来るいびきの音で分かった。

家を出、朝日が樹木の長い影を落としている中庭を通過して、リディアは牛舎に向かった。外の空気はヒンヤリして、膚寒いぐらいだったが、すがすがしかった。牛舎に来ると、既にレオンがいて、朝の作業にかかっていた。牛糞を掃除し、えさを与えていた。

“リディアかい？”と、リディアがやって来ると、振り向いてレオンが言った。

“早いわね”と、リディアは戸口のところに立って、そんなレオンの姿を見て言った。

“いや、これで普通だよ”とレオンは素気なく答えた。“じゃ、朝の乳搾りをしようか。うまいよ、こいつは”

リディアも、レオンと一緒にあって、乳搾りを手伝うことにした。でも、レオンの方が勢いよく乳が出た他、リディアの搾り方を見て、小言を言いに来た。

“そんなんじゃダメだよ。もっとこういう風に”と、レオンは、手で動作をしてリディアに教えた。“今まで習わなかったのかい？”

“そうじゃないけど、うまく行かないのよ”と、リディアは答えた。

“でもこうでなくちゃ”とレオンは言った。“そうでないと、牛の乳を傷めるよ”

レオンの通りの手つきをすると、なるほど乳がよく出た。

レオンと並んで乳を搾りながら、ふと、窓から外を見ると、軒下では、あの白い猫がのんびりと居眠りを楽しんでた。半年ほど前なら、あの斑模様の猫が眠っていた場所だ。リディアは、今までよく孤独に耐えて来たが、レオンが来てくれてよかったと思った。

リディアが一頭を搾り終わると、レオンはこう言ってくれた。

“食事の用意があるんだろう？ 後は、ぼくに任しときなよ”

“ありがとう、レオン”

リディアは、牛乳の入ったバケツをそこに置いたまま、牛舎を出ることにした。

キッチンに入ってリディアは、朝日のさし込む窓から緑色の庭を眺めながら、なにかほのぼのしたものを心に感じていた。レオンが来たことが、こんなにも心を変えてしまうとは、リディアも気が付かなかったのだ。

その朝、搾りたての牛乳を食卓に出すと、みんなおいしいと言って飲んでくれた。

しかし、レオノールは、すぐ仕事だと言って、もう七時前には家を出て行った。

リディアもそろそろ学校へ行く時間だったが、あまり学校へ行ったことのないレオンをひとり置いて学校へ行くのは、何か悪いような気がした。

そのことを察してかレオンは、

“家のことはぼくがやるから、何も心配しないで学校へ行っといいでよ、リディア”と言ってくれた

。

リディアは、レオンに手を振りつつ、学校へと向かった。

学校が終わっての帰り道、こんなに浮き浮きした気持ちになったのは久しぶりだった。

“何かあったの？ リディア。きょうは変よ”と、友だちが、そんなリディアの様子を見てヒヤかしたが、リディアはその理由について答えなかった。

帰って来るとレオンが、さっさと干し草を刈っていた。その手つきは慣れたものだった。

“わたしも刈るわ”とリディアは言って、さっそく靴を自分の部屋にほおり投げて出て来た。以前はレオノールによく手伝わされたが、今はレオンと一緒にだった。

リディアは汗だくになって、レオンと一緒に、鎌で干し草を刈った。刈った草を集めて整頓し、また刈った。そういう作業を何度もくり返しているうちに、どっと疲れが出て来て、休む他はないようになった。

リディアは、腕で額の汗をぬぐいながら、山の斜面の地べたに、両足を投げ出して坐り込んだ。するとそのときに初めて気が付いた。きょうはなんと晴れて、気持ちのいい日なんだろう！

レオンもくたびれたせいか、鎌を置いて、リディアのそばに立つと、そんなリディアをじっと見降ろした。

“レオン、冷たいコーヒがあるわ。飲まない？”

そう言ってリディアは、水筒のコーヒを勧めた。

レオンもほっとしたように、コーヒを受け取ると、一気に飲み干した。

“こいつはうまいや”と、レオンは唇をぬぐいながら言った。

“ねえ、レオン、ここへ坐らない？ ちょっと休憩しましょうよ”

そう合図をすると、レオンも一緒になって、リディアと坐った。

“ねえ、疲れたでしょ？ わたしが来る前からずっとですものね”と、リディアは言った。

“いや、これぐらいのこと”とレオンは答えた。

“でも感心ねえ、兄さんって、よく働くのねえ...”と、リディアは、ここで初めて、兄さん、という言葉を使った。

その言葉で、レオンはちらっと、リディアの方を見た。

“ぼく、働くの好きだから”と、レオンは答えた。それから、しばらくして、レオンは続けた。“一でも、勉強は嫌いだ。算数がどうだの、理科がどうだの。ぼくにとっちゃ牛の数が数えられりゃいいんだし、うまくチーズが造られりゃそれでいいんだ。一でもあのチーズは、なかなか難しいね”

“そう？”とリディアは言った。“でも、勉強も面白いわ。ここにいただけじゃ絶対に知り得ないことも分かって来るもの。例えば、昔のギリシャには想像もつかないような、変わった建物が存在したのよ。それは、幾本もの石の柱で支えられた神殿で、それはそれは壮大で立派なものだったのよ。正面の屋根の下のペディメントと言われる壁の部分には、ぜいたくなぐらいの彫刻がなされているの。当時の神々や、戦いの図や馬などよ。屋根の四方の隅や、頂点のところには、立派な彫刻がほどこされた屋根飾りがついているし、ペディメントのすぐ下の部分の、エンタブラチュアと呼ばれるところにも、動物や人などのレリーフのほどこされたメトープが交互に並べられているの。外部から見える柱の部分の下の方にも、美事なレリーフのほどこされた神殿もあったという話しよ。そういう神殿って、考えてみただけでも素晴らしいとは思わない？ ただ残念なことに、その中でも最大と言われていたイオニア式の神殿の大部分は失われてしまって、今は痕跡をとどめるだけらしいの。惜しいわね。できるものなら、それが建っていた時代に戻って、それがどんなものだったのか、この目で確かめてみたいものだわ”

“昔の人は、その神殿で何をしていたんだい”と、レオンはそれとなく尋ねた。

“詳しくは知らないけれど、そこで神事や、祭り事が行われていたんでしょよ。それは、敵かなものだったに違いないわ”と、リディアは答えた。

“君って、なかなか詳しいんだねえ...”と、レオンは感心したように言った。“確かにそんな時代があったかも知れないけれど、でも、こう言っちゃなんだけど、今のぼくの生活と、ほとんどなんの関係のないものだよ。この村に、君の言ったような神殿があるわけじゃないんだしね”

“でも、エフェソスのアルテミス大神殿はね”と、リディアは言った。“アレキサンダー大王が生まれたちょうどその夜、火事で消失したという話しょ。アレキサンダー大王は、その後、その神殿を再建させ、それは、世界の七不思議の一つになったの。すごいわねえ、そんな時代が昔にあったなんて...”

リディアはうっとりするように語りかけるのだったが、レオンにほとんど反応はなかった。

“それにしても、君って、よくしゃべる子だってことが分かったよ”と、レオンは言った。

“あらっ、わたしって、そんなにおしゃべりじゃないわ”と、リディアは反発した。

“でも、何も知らないぼくにだね、建築の話しについて、延々と話しかけるんだもの”と、レオンは言った。“そんなに建物のことが好きなのなら、建築家になったら？”

“そうじゃないわよ。ただ先生から、そんな話を聞かせてもらっただけよ”と、リディアは言った。

それから二人は、草むらに坐ったまま、遠く、ぽっかりと浮かぶ真白な雲や、ふもとの我が家や、村の山々の様子を、ぼんやりと眺めるのだった。

リディアが反発したとは言え、リディアの呑み込みの速さや、早口でとうとうと述べる能弁さは、もうその頃から芽生えていた。そしていずれは、彼女の知識の豊富さや、その弁舌の確かさが、人々を驚嘆させ、ある場合には、魅了させることになるだろう。しかしまだこのときには、リディアは自分の頭の回転の良さを、どういうわけか認めたくはなかったのだ。

“...でもさ”と、しばらくしてからレオンは言った。“君のように本が読めて、色んなことが知れる芸当って、ぼくにはマネできないな”

レオンは、リディアのことを、ちょっぴり羨ましそうに言うのだった。

“ぼくももう少し、勉強していればよかった...”

リディアはその瞬間、自分があまりにも得意気にしゃべったのがまずかったのだと気づいたが、とりすまして答えた。

“だから兄さんも、字を勉強したいって言ってたでしょ。じゃ、今からさっそく勉強しましょうよ”

“なに簡単よ”とリディアは言った。“字ならホラ、どこにでも書くことができるわ”

そう言ってリディアは、草むらの空いた地面に、Aの文字を書いた。

“これがAで、それから...”続いてリディアはBを書いた。

“これがB”

“A、B...”と、レオンは真剣な眼差しで、リディアの書く地面の文字を見つめるのだった。

“そうよ。その調子”と、今度はレオンがなぞらえながら文字を書くのを見て、リディアは言った

。

“でもダメだ”と、レオンは、途中で放棄した。“リディアみたいにスラスラ読めるまでは、道のりが余りにも遠すぎるよ。こんな歩みじゃ、とっておつかない”

“あきらめちゃダメよ、兄さん”と、リディアは、そんなレオンを優しく励ました。

“毎日少しづつでも賢くなればそれでいいじゃないの。余り急がないことよ。ホラッ、きょうは知らなかった文字が分かったでしょ。それだけでも進歩じゃない”

“分かった。勉強するよ”と、レオンは思い直したように言うのだった。“じゃ、リディア。毎日少しづつでもいいから教えてくれよな。ぼくは字が知りたいんだ。そりゃ、お前みたいに賢くなくても、村の標識や、看板や、そんな程度が読めるぐらいでいいんだ。少しばかり、煩わすけど助けておくれよな。リディア”

“何を言ってんのよ、兄さん”と、リディアはにっこりして答えた。“そんなの、お易い御用よ”

リディアはそう言ってレオンの腕を取り、その肩に近い部分に、頬をすり寄せた。

レオンは、そんなリディアに対して、成すすべもなく、ただ黙って、じっとしているのだった

。

“さあ、もう十分休んだし、再開しようか”そう言って、やがてレオンは立ち上がった。

二人は再び鎌を取り、草を刈り出すのだった...

その次の日も、その次の日も、二人は草を刈り続けた。レオノールは以前の習慣に戻り、仕事に出掛けたまま、夜は遅くにしか帰って来なかったのも、家ではほとんど二人だけの生活が続いた。

リディアは、美しい空の下で、汗を流しながら、レオンと二人だけで草を刈るのが楽しかった

。

そのうちに、学校も夏休みとなり、リディアは、思う存分、レオンと一緒に生活を過ごすことができた。

その年の夏は、レオンが来てくれたおかげで、寂しい思いをすることがなかった。

レオノールの帰りがいつも遅いので、ある日、レオンはそのことについてリディアに尋ねたことがあった。

“どうして父さん、いつも帰って来るのが遅いんだい？”

“友だちと飲んだり、賭事をしたりしてるから遅いだよ”と、リディアは平然と答えた。

“ふ～ん。そりゃよくないね”と、レオンは一応言ってみたものの、そのことには余り関心がないらしく、そのことについてはもうそれ以上触れようとはしなかった。

だから、レオノールが家にいる日曜日を除いては、この家にはレオンと自分と二人だけが住んでいるのだ、というような気がリディアにはして来た。

レオンは、レオノールがいなくても、実によく働いた。

夏のある日、キラキラと光る小川の水面を見つめているとき、レオンが後ろからやって来た。

“何をしているんだい？”と、レオンは尋ねた。

“いえ、ただぼんやりと水面を眺めているだけよ”とリディアは答えた。“太陽が反射してきれいでしょ”

“太陽か”そう言って、レオンは、手でひさしをつくりながら、空を見上げた。

空には、ほとんど雲がないほど晴れ渡っていた。小川は、ゴツゴツした岩膚の山と山とが交錯する谷間から流れて来ていた。時には急流をつくり、ところどころその流れの速さを変えながら、絶え間なく流れていた。リディアのいるその場所は、木陰の比較的流れの穏やかな場所だった。

“よくここへ来るのかい？”と、レオンはまた尋ねた。

“そうよ、わたしのお気に入りの場所”と、リディアは、水面に映っている自分の顔を覗き見ながら答えた。“ここにいるとね、心が休まるの。ホラ、レオン、あんたもそこに映っているわ。面白いわね”

“ホントだ”そう言って、レオンも、一緒になって水面を見つめた。

二人の姿は、水面で、伸びたり縮んだりしながら、揺ら揺らと揺れていた。

“兄さんって、将来のことは心配しないの？”不意にリディアが尋ねた。

“将来って？”と、レオンは、驚いたように言った。“じゃ、リディアは、何か心配でもしているのか”

“分からない”と、リディアは答えた。“わたしたちの未来がどんなことになるのか、そんなこと分からないわね。――ただちょっと聞いてみただけよ。そんな遠い先のことよりも、今がいいわ。ね、こんな風にずっと続いて行けばいいわね”

“そりゃそうだけど...”と、レオンはとまどうように答えた。“先のことなんて、誰にも分からないさ”

“兄さんって、やって来た家にわたしがいてよかった？”リディアはまた尋ねた。

“そりゃそうさ”と、レオンは、今度は声を大にして答えた。“君みたいに、きれいで、頭のいい女の子がいたもんな。正直、ビックリしたよ...”

それに対しては、リディアは何も言わず、ただ微笑んでいるだけだった。

“君って、得体の知れない子だねえ”と、やがて、レオンが言った。“毎日、その頭の中で何を考えているのか、ぼくにはさっぱり分からないよ。君って、不思議な感じがする”

“そお？”と言って、リディアは振り向いた。そして、微笑みながら言うのだった。“わたしって、普通よ。何も、特別なことって、考えちゃいないわ。あんたや、お父さんのことや、学校のことや、そんなことよ。ねっ、あんたとちっとも変わらないでしょ。それとも、どこか変わったところがあるみたいに見えるの？”

“う～ん、なんと言ったらいいか、ときどき君がすごく怖いって思えるときがあるんだ”と、レオンは、口ごもらせながら答えた。

“わたしが怖いですって！”と、リディアは驚いたように言った。“そんな風に見えるの？ わたしが怖いって”

“言い方がまずかったかも知れないけど、他に適当な言葉が見つからないからねえ...”とレオンは言った。“つまり、君の奥が知れないってということさ”

“わたしの奥って？”と、リディアは聞き返した。

“つまりね”と、レオンは言うのだった。“君を見ていると、とても普通の子じゃないような気がして来る。村の子なら、他にもいっぱいいるじゃないか。でもその子らとは君は違って、どこかちぐはぐな感じなんだ。そりゃ確かに生活ぶりは、みんなと変わっちゃいない。でもそのうち君は、みんなと違う人生を歩むようになるんじゃないかと、そんな気がして来るんだ。――さっき君はぼくに、将来のことを尋ねたね。ぼくはなんとも思っちゃいないけど、君は不安なんだろ。言えよ、本当のところ将来についてどう考えているのか”

“将来って、そんなの考えていないわ”とリディアは答えた。“でもただね、漠然とした夢のようなものはあるのよ。わたしもこうして、川の流れを見ているのは好きよ。でもつつい、ここだけが世界じゃないって考えてしまうの。世界って他にもいっぱいあるでしょ。だから、わたしの知らないところにも行ってみたいの。だから、その為にも、うんと勉強して、うんといろんなことを知らなくっちゃならないわ。わたしって、欲深いのかしら。この村が嫌いじゃないんだけど、この村にだけいたくはないのよ。本当に、羽が生えて、自由に空を飛べればいいわね。そして、自分の行きたいところに行ける...”

“君の行きたいところって、どこなんだよ”と、レオンは尋ねた。

“いろんなところよ。ひと口には言えないわ”と、リディアは答えた。“あの山の向うだっていいし、わたしの知らない街にも行ってみたいわ。ともかく、いろんなところよ。そんなところへ行って、いろんな人と出会い、いろんな経験を積むの。そういうことって、楽しいとは思わない？”

“ふ～ん、君って、面白いことを考えるんだね”と、レオンは感心したように言うのだった。“ぼくはここだけで十分さ。そんなにあちこち行きたいなんて思わない。どこへ行ったって同じことさ。ここだけでも十分楽しめるものね。それに、ここだけでもいっぱいやることがあるんだもの。そんな、他へ行こうなんて思いつきもしないよ。――でも君が面白いことを考えているって、やっと分かったよ”

“ねえ、兄さん”と、リディアは、しばらくしてから言った。“あの木の葉のすき間から日光が洩れている光景って、素敵だとは思わない？”

そう言ってリディアは、今度は、草むらに、体をあお向けに倒すのだった。

“ねえ、こんな風にぼんやりと空や雲や木の葉や日光などを見つめているの。こうしているときが一番幸せよ。だって何も考え事をしなくていいでしょ。あの白い雲って、何かの形に見えて来ない？”

“何んだって？”そう言って、レオンも、リディアと並ぶように、仰向けになった。

“ねえ、いいでしょ。こんなときがあるなんて...”

“そうだね。日光が木の葉のあいだで揺れて、まぶしいよ”

“兄さんはあんまり、こんな風に寝ころがったりはしないの？”

リディアは、レオンの方を向き、ふと尋ねてみた。

“いや、よくやったさ。前の家では”と、レオンは答えた。“でもたいてい一人で、君のような女の子と一緒にやるなんて、思いもよらなかった”

リディアは、その言葉を聞いてにっこりした。

“わたしだってよ”と、リディアは言った。“兄さんのような男の人と、こんな風にするなんて、初めてよ”

それから再び、リディアは、青空の方に目を向けた。

大きな、トチの木の葉の間からのぞまれる空の色はなんと青いのだろう！それが風に揺れて、まるで黄金のように、キラキラと光を反射するのだった。青い空には、真白な綿雲が、ゆったりと移動していた。風がさわやかで、ふと、草むらの方に目をやると、白や薄いピンク色をした小さな蝶々が数匹、束になったり離れたりしながら、ヒラヒラと飛んでいた。草むらからは、青い可憐な花が、ニョキッと姿を見せている...

“さあ、もういいわ”リディアはしばらくしてから体を起こした。“イギリスでは、自然の中を駆け巡りながら作曲した人がいたらしいけれど、わたしにも、何か、音楽が聞こえて来るみたいよ。一でも、いつまでもこうしてはられないわね。また、ゆっくりしていると、父さんがうるさいから。ねえ兄さん、そろそろ行きましょうか”

そう言ってレオンを見ると、レオンは、完全に眠りこけてしまっているみたいだった。

“えっ、何か言った？”そう言って、レオンは目を開けた。

“そろそろ行きましょうかって”と、リディアは、レオンを見下ろしながら言った。

“せっかくい気持だったのにな”と、レオンは残念そうに言った。

“でも、いくらでもこんな日があるわよ”と、慰めるように、リディアはレオンに言った。“気に入ったら、また来ましょ”

それから、二人は、手を取り合って、立ち上がった。

帰る途中、二人は、草むらを駆け上がった。空は、一層高く、青く、田舎の風景は一段と広く、雄大に感じられた。自分たちのいた小川もふもとの方に見え、それが、あの山の谷間からずっと流れ下っている様子も、すっかり見渡すことができた。

“素晴らしいわ、いつ見ても”とリディアは、感動に震えながら言うのだった。“あの山も、向うの山も、どこまでも続いているのね。――でも、この夏も、もうすぐ終わりね。そのうち、秋が来る...”

“リディアにとって、いい夏だったかい？”と、レオンが尋ねた。

“そりゃ、兄さんが来てくれたんだもの”と、リディアは振り向き、微笑みながら答えた。

“ぼくだって”と、レオンも言った。“リディアに会えたおかげで、これまでの中で一番いい夏となった。父さんが亡くなって悲しかったけど、君はそれ以上に、幸せをもたらしてくれたんだよ。君を見ているだけで、なぜか、ぼくは楽しくなって来るんだ...”

リディアは微笑むだけで、それに対しては、何も答えなかった。でもやがて、ただひと言、“嬉しいわ、兄さん。そう言ってくれて”とリディアは言った。

“さあ、それじゃ行きましょ”

すると、今度はレオンがリディアの手を引いて、力強く、野を駆け下って行くのだった。

月日が経ち、いつのまにか秋の季節となった。

レオンは変わることなく、家畜の世話とチーズ造りに専念し、リディアは再び学校に行った。家のことはこの二人に任せきりで、レオノールは一日中家をあけたまま、仕事に行っているのか、賭博をしているのか分からないといった日々が続いた。しかし、レオノールが帰るのが遅くなったり、ときには帰らない日があったり、また、帰ったにせよ、酒の臭いをプンプンさせ、べろんべろんに酔っ払った状態になっていたりしても、二人は別に驚きはしなかった。もうそんなことには、慣れっこになっていたのだった。

秋の午後、その日は本当に天気の良い日だったが、仕事の、ほんの短い合間をぬってのレオンの文字のレッスンの時間に当たっていた。二人は、レオンの部屋にいて、リディアが字を教えていた。二人の教材にと、リディアが選んだのは、最近、こっそりと読んでいて感動した、「林檎の樹」だった。リディアは、どういうわけか、ミーガンの哀れさにひかれたのだった。レオンは、もうかなり字が読めるようになっていた。リディアの熱意もあって、自分がまさか、そこまで勉強熱心になるなんて、思いもよらないことだった。

小さな室内はきちんと整理されていて、秋の力強い日ざしが、白壁におおわれた室内に入り込んでいた。樹木の輝きは、いっそう美しかった。二人は、窓辺の机に向かい、主にレオンが本を読み、リディアがそばで、間違いを指摘した。

“ええーつと”と、レオンは朗読を始めた。“とそのとき、ふと彼は窓辺に現れたミーガンを見た。アシャーストは、...の陰から”

“イチイよ”と、リディアはすぐ補った。“知ってるでしょ。イチイの樹よ”

“イチイの陰から少し体を動かしてそっとささやいた”と、レオンは続けた。“「ミーガン」...彼女はすっと姿を現したが、すぐまた現れて下方へぐっと体をさし伸べてよこした。下方に伸ばした彼女の青白い腕も顔もじっと動かなかった。彼は椅子を動かして静かにその上に乗った。そして腕をのばしてやっと届くことができた。...彼はやっと少女の顔や、唇の間に光る歯や、額にほつれかかった髪の毛を見ることができた”

“おおむね、いいわ”と、リディアはそこでストップをかけた。“でも、最後のところの前は、ミーガンは手に表戸の大きな鍵を持っていたので、彼は、燃えるような手にヒヤリと冷たい鍵を持った彼女の手をしっかりと握った、でしょ。飛ばし読みはダメよ”

“でも、そのところ、なかなか読むのが難しいんだもの”と、レオンは、弁解がましく言った。“それに、この小説、ちっとも面白くないよ。何を読んでいるのか、さっぱり分からないんだもの”

“ヒロインのミーガンと、アシャーストとの一夏の恋物語よ”と、リディアは言った。“そういう目で見れば、結構面白く読めるわ”

そのときだった、家の外で男の呼ぶ声がした。

“フローバさん、レオノール・フローバさんの家はここかね”

その声で、リディアはあわてて、窓から顔を出した。しかし、ヘルメットをかぶった男の後ろ姿が窓の下の方に見えたが、彼らは別の方向を見て立っていたので、家の正面に窓のある自分の部屋の方がよく見えると考えて、すぐリディアは自分の部屋にとって返した。

そして、窓をあけ、彼らを見下ろした。今度は彼らの姿がよく見えた。レオノールほどの年頃の男が二人で、いずれも黄色いヘルメットを着用し、作業服らしい服を着ていた。

“なんです？ おじさん”と、リディアは、二階の部屋の窓から返事をした。

“ああ、君か”と、男のうちの一人が、下から見上げて言った。“いつぞや、お父さんを尋ねに来たあの子だね。お父さんは、今、いるかい？”

“いえ、いないわ”と、リディアは、男たちを見下ろしながら言った。“今、仕事に行ってますけど...”

“ところが、うちの仕事には来ていないんだよ。この三日ほど”と、彼は言った。“重要な会議があるんでね、すぐ来てもらいたいんだ。居場所は分からないかね”

リディアは、その言葉でハッとなった。ここしばらくは、割ときっちり出掛けていたのに、実際は、仕事に行っていなかったのだ。とするなら――

“じゃきつと友だちの家ですわ”と、リディアは答えた。“そこで多分、トランプか何かをしているんです”

“そう、その友だちの家とやらは分かるかね”と、彼は言った。

“ええ、行ったことはないんですけど、話しには聞いてますから。だいたい...”とリディアは答

えた。

“じゃ、案内してくれないか”と、男は言うのだった。“車で来ているから、これに乗ってくれるかい？”

リディアは、自信がなかったので、気乗りがしなかったが、仕方なく承知することにした。

リディアが振り向くと、そこにレオンが、きょとんとした表情で立っていた。

“悪いけど兄さん、きょうのレッスンはここまでよ”と、リディアは、申し訳なさそうに言った。“ちょっとわたし、お父さんを捜しに行ってくる”

“ああいよいよ”と、レオンも承知してくれた。“気を付けてな”

リディアはその足で、二階から階段を駆け降り、ヘルメット姿の男たちの待っている玄関前に飛び出した。

“じゃ、これに乗りなさい”と、彼は、自分たちの乗って来た車に、彼女を案内した。

車は、やがてサビーノの村を離れて、なだらかな山並の続く、緑一色におおわれた田舎道を走るようになった。濃い緑色の樹木が、山の表面をおおい、ところどころ荒れ野が顔を出している。空には、うっすらと雲がかかっているところもあったが、ほとんど真青に近い青だった。そんな風景の中を車が走っているうち、やがて、向うの、小高い山の斜面に、隣り村が姿を現して来た。山の斜面から頂にかけて、ぎっしりと、思い思いの方向に窓を向けた家々が建っている。その周囲を除くと、もう家は、ちらほらしか見えないのだった。リディアはかつて一度、レオノールに連れられて、この古びた村を通ったことがあった。そして、そのとき、この村はずれのあの家が友人の家だとレオノールが言ったのを、かすかに記憶していた。

車はやがて、その村のふもとの道を通り過ぎると、雄大な自然のふところの中を走るようになった。と間もなく、森に囲まれた中に、煙突のついた一軒の家が見えて来た。

“確か、あの家だったと思います”と、リディアは、車の中から指さした。

リディアの予感は、もう間違いなかった。家の大事な車が、その家の軒下に横付けされていたからだ。

車が止まると、ヘルメットの男が二人、すぐその家に向かった。彼等は、中に入る前に窓から内部を確認した。リディアも気になって、男の後を追ったが、彼らが見つめている窓の中を見て、二度ビックリした。

なんとレオノールが、他の男たちと混じって、たばこをふかせながら、トランプをしている真最中だったのだ。男の数は、レオノールも含めて、五人ぐらいだったろうか。彼らはトランプに夢中で、窓の外のリディアたちの姿に気づく気配もなかった。

ヘルメットの男二人は、レオノールを確認すると、そのまま入口に向かった。

呼鈴のせいか、主人が、続いて、レオノールが玄関に姿を現した。レオノールは、ヘルメットの男と、少し離れたところに立っているリディアの姿を見て、ギクツとした表情をした。

“おい、レオノール、こんなところにいたのか”と、男は言った。“娘さんも、お前のことを心配しているぞ。仕事をおっぼり出して、トランプに興じているとは、余り感心しないな”

“やあ、悪かった”と、レオノールは、罰が悪そうに言った。“ところで、何んの用だい？”

“あんたも知っての通り、会社が身売りされるかどうかの大事なところなんだ”と、男は言った。“だから今は是非とも、あんたの力を借りたいんだ。この前は、よく働いてくれただろう。あの調子で、今回も頑張っって欲しいんだ...”

“何？ そうか”と、レオノールの顔は色めき立った。“ついに来たのか。じゃ、すぐ行く”

そう言って、レオノールは家の中に消えた。しばらくすると、レオノールは、相当あわてたらしく、上着のそでも十分に通さない状態で家の中から出て来た。

“それで今、社長はどこにいるんだ？”と、レオノールは言った。

“それが... 雲隠れして、どうも、リトイアの自宅にこもっているらしいんだ”と、男は答えた。

“じゃ、すぐ行かなくっちゃ”

そう言ってレオノールは車に乗り込んだ。

続いて、ヘルメットの男たちと、それからリディアが、レオノールと並んで坐った。レオノールは、そのとき初めてリディアの存在に気づいたようだった。

“やありディア。お前も一緒だったのか”と、レオノールはさりげなく言った。

“ええ、道案内を頼まれたものだから”とリディアは答えたが、胸の中では、父親にだまされた思いでむかむかしていた。“お父さんったら仕事に行くように見せながら、こんなところで遊んでいたなんて...”

“すまん、すまん”と、レオノールは、そんなリディアに対して、初めて謝った。

それから、二人は、押し黙ったようになり、会話をかわすことはなかった。

リディアたちを乗せた車は、再び、サビーノのリディアの家の前を通ることになったので、リディアだけそこで降ろしてもらうことにした。レオノールは、当局との交渉の為、仲間たちとさらにリトイアまで行かなければならなかった。

“父さんはね、大事な用事でリトイアへ行くが、今夜は帰れなくなるかも知れない。そればかりか、二、三日は留守になるかも知れないけど、家の方はよろしくね。じゃ、頼んだよ”

レオノールはそう言って、リディアをひとり残し、車に乗って去って行った。

リディアは、家の前にひとり残って、気の抜けるような気がした。

“あんなの、ヒドいわ”と、リディアは思った。“前々から夜カードをやっているのは知ってたけど、昼間からトランプなんて、仕事に行くって言うておきながら、真赤な嘘だったのね。仕事はどうなっているの？ それに給料は？ 最近、家に入れてくれない理由が分かったわ。全部、トランプにつき込んでいるのよ。もしレオンがいなきゃ、わたしの家はどうなるの？ 全くヒドい話しよ。父さんなんて、もう知らない...”

リディアは、がっかりした表情で、秋の日の当たる我が家へと歩いて行った。

家に向かうと、チーズ小舎から、汚れた前掛けをつけたレオンが、心配そうな顔つきで出て来た。

“父さんはどうしてた？”と、レオンは尋ねた。

“父さんったらヒドイの。昼間からトランプをしてたのよ”と、リディアは、いまいましそうに言った。

それに対して、レオンの態度は、冷やかだった。

“へえ〜”と、レオンは、きょとんとした顔つきで言った。“それで、帰って来ないの？”

“社長さんと大事な話しがあるって、出掛けて行ったわ”と、リディアは答えた。“今日は、帰れないかも知れないって。二、三日留守にするかも知れないから、家のことはよろしくって”

“そうか... じゃぼく、しなきゃならないことがあるから...”

そう言って、レオンは小舎に戻った。

リディアは、そんなレオンを見ていまいまししく思った。

“全くレオンったら、お人好しなんだから。だから父さんは、わたしたちに甘えてしまうんだわ”

その夜は、レオンとリディアの二人だけの夜となったが、もう慣れていたので別に何事もなかった。

リディアは、レオノールがいないのをいいことに、久し振りに家の中でフルートを吹くことにした。

暗い月夜の中を、フルートの快い音色が流れて行くようだった。その音色に誘われて、レオンが姿を現した。

“いい夜だね”と、彼は言った。

リディアは、ちらっと彼に一瞥くれただけで、フルートを吹き続けた。

それは、父のいない、解放された、久し振りの、快い夜だった。

リディアには分からなかったが、その頃レオノールは、会社との徹夜の交渉で忙しかった。林業の不振による、人員削減に伴う、会社の身売りを、なんとかしてでも阻止しようという交渉だった。社長の行方は依然つかめなかったが、営業部長を交渉の場にひきづり出し、交渉を始めたが、彼の固い意志を突き崩すことは、なかなか容易なことではなかった。そんな風にして、交渉は、いたずらに日を重ねて行った。

五日目の午後になって、リディアが、レオンの作業を手伝っているとき、向うから、晴れ晴れした表情で、レオノールが帰って来た。

“父さんだ！”とレオンが、窓越しに言ったので、リディアも驚いてその方を見た。

確かに、久し振りに見るレオノールだった。肩に小さな袋をかかえて、こちらへやって来る。

リディアはあわてて小舎から飛び出した。

“やあ、リディア”と、彼は、大きく両手を開いて、リディアを迎えた。“会社はやめたよ。これでさっぱりした”と、彼は晴れ晴れした表情で言い、リディアを抱きかかえた。

リディアは、抱かれながら、レオノールの方を見て言った。

“でも、それじゃ、仕事の方はどうなるの？”

“なんとかなるさ”と、レオノールはなおも陽気に言った。“あんな、ケチで冷淡な会社に未練はない。なあに心配はいらない。仕事なんて、他にもあるんだからな”

それからレオノールは、リディアを降ろすと、リディアの手を握って、家の方に向かった。

“例の仲間がな”と、彼はそれとなく言った。“お前のことを可愛いと褒めていたぞ。父さんにとって、お前は自慢の種だよ”

リディアは、父親も自慢されるような父さんになって欲しいと思ったが、いずれにせよ、レオノールが帰って来てくれたことが嬉しかった。

しかもこの日のレオノールは、これまでとは打って変わったように陽気だった。

“なあリディア”と、彼は部屋に入るなり言った。“この五日間寂しかったろう。すまなかった。いろいろとややこしいことがあってな。それで、というわけでもないが、どうだ、今度の日曜日にも、ピクニックに行ってみないか。季節もちょうどいい頃だし、お前とピクニックに行くのは、本当に久し振りだからな”

“ええいいわ”と、それとなくリディアは答えたものの、内心では本当に嬉しかった。

それから数日間、リディアは学校に行っても、父親との約束のことが気になって、あまり勉強に身が入らなかった。そんな、ぼうっとしているリディアの様子を、ボンバル先生が、心配してくれたほどだった。気分でも悪いのかい？との質問に対して、

“いえ、なんでもないのよ、先生”と、リディアは答えた。

それほどリディアには、次の日曜日が、待ちどおしくて仕方がなかった。

そしてついに、その日が来た。

その日は、あいにくの天気で、雲が空をおおっていて、むしろ風の強い日だったが、それでも、空のところどころに晴れ間も見える、まあまあの天気だった。それでもリディアは、朝から陽気に、みんなの弁当をこしらえた。

ピクニックと言っても、おんぼろ車に乗って、家の近くの山野に行って、昼飯を食べるだけのことだったが、かつてめったにそんなことをしたことはなく、リディアの心は踊った。レオンと、あるいはあの猫とは来たことがあっても、レオノールと来るのは、初めての経験だったのだ。

朝の九時頃には、もうみんなは出発した。そして、十分も走らないうちに、目的地の山裾にやって来た。車をそこで降りて、後は徒歩で、そのゆるやかな山の斜面を登るだけだった。

歩き始める頃には、幾分、雲の切れ目から空が覗くようにもなり、日光が、幾筋かの光の束となって、大地に降り注いだ。それは、この秋を色どる紅葉とあいまって、幻想的な美しささえ、見せてくれた。それは全く、絵に描いても不思議ではないような光景だった。

風が強く、それは、リディアの髪の毛やスカートを震わせると同時に、樹木から落葉をふりい落とさせた。

リディアたちは、山の稜線を歩きながら、ところどころ青空の覗く、分厚い雲を見上げ、遠くの、幾層にも重なる山の斜面や、自然の雄大さを観察した。

秋にしては、この日は、いつもより寒い日だった。幸い、セータを着て来たので、身にしみるほどの寒さは感じなかった。むしろ、歩くに連れ汗をかき、山頂にやっとたどり着いた頃には、タオルで汗を拭くほどだった。もう時は、正午近くになっていた。

三人は、疲れ果てたようにどっと地べたにへたり込んだ。

レオノールは、山頂に茂る檜の木に背中をもたせかけ、心地良さそうに、目を雲の方に向けた。リディアも、レオノールのすぐ脇の、木の根っ子に坐り込んだ。

“気持がいいなあ、汗を流すって”と、レオノールが言った。

その目はまるで、現在を見つめているのではなく、レオノールの長い歴史の中の、輝かしい過去の一瞬を見つめているように、リディアには思われた。父さんの過去って、どんなだったろうと、リディアはそのとき思った。

“なあ、こんなにいいものなら、何度も来ればよかった”と、レオノールはまた言った。“今まで生活や仕事に追われていたが、やっと解放された気分だな”

“お父さんったら、仕事をなくして、生き返ったみたい”と、リディアは、皮肉っぽく言った。

“全くリディアの言う通りだ”と、レオノールは言った。“父さんは、仕事を失って、人間性を取り戻したんだ。これからはまた、ゼロから出発だからね。本当に、初心に戻るような、サバサバした気持ちさ。なあ、少し寒いけど、本当にいい気持だ...”

そう言っているうちにも、落葉が、ハラハラと上から落ちて来た。風がそれらを舞い上げ、遠くへ運んで行くのだった。

“さあそれじゃ、熱いコーヒでも沸かそうか”

そう言って、レオノールは、適当に石を組み、火をつけて、コーヒを沸かし始めた。

やがて、煮立ったコーヒは、とっても暖かくて、うまかった。

“おいしいわ”と、リディアは嬉しそうに言った。

そしてレオンの方に振り向くと、レオンも、表情を変えることなく、コーヒーを飲んでいた。

“この村が、こんなに美しくて、感動的に見えるのは、久し振りだな”と、レオノールは言った。“本当にいい村だ。父さんもやっと、ここに根を降ろしたような気がするよ...”

その表情は、本当に満足深げだった。

そのとき、さっと、左手の方の雲が裂けて、日光がさし始めた。それは、ふもとの草むらに、樹木や、山の影を造り、緑したたる自然のふところにくっきりと浮かび上がった陰影が、目を見張るほど美しかった。

“自然って、こういう美しさを見せてくれるんだ。日頃は気づかないけれどね”と、レオノールは、感動のまなざしをしながら言った。“世の中には素晴らしいものもある。だから、生きていて、いいものなんだよ。リディア、こんなに感動的な大地って、見たことがあるかい？”

リディアも、ふもとに見える自然の美しさには、目を見張るものがあった。

しかし、それも一瞬で、空の雲は再び日光を消し、大地を、なんの感動もない、陰気な灰色にぬり変えてしまうのだった。

光と大地とが織り成す素晴らしい天然ショーが終わったと思うや、レオノールは、景気づけに

“どうだ、隠れんぼをしないか”と、二人に声を掛けた。

周りを見渡すに、木の陰や岩陰など、隠れるところはいくらでもあった。ある者が鬼になり、みんなが隠れた後、見つけ出して、体のどこかにタッチさえすれば、鬼を交替するというルールだった。

二人が面白そうにそのゲームに乗ると、まずレオノールが鬼になってくれた。

レオンとリディアは、レオノールが目を隠して数える間、あわてて隠れに走って行った。めいめい別々の場所に逃げ込んだが、リディアのそれは、岩陰に木の茂っている、ちょうど都合のいいところだった。

数を数えた後、いよいよレオノールは、二人を捜し始めた。

“どこにいるのだ、リディア？ レオン？”と、レオノールは、声を立てながら捜し歩いた。

その声は段々とリディアのいるところに近付いて来る。そして、レオンのいるところからは離れて行く。レオノールが近付くにつれ、リディアは、逃げるべきかどうしようかと迷った。だが、その場を離れればすぐレオノールに見つかってしまう。しかし、草陰から見ていて余り近付いて来たようなので、リディアはつい怖くなって走りだした。

“こら待て。リディア！”レオノールは、そんなリディアを、すぐ追いかけた。

リディアは、笑いながら、キャッキョと声をたてて、草むらを逃げた。

レオノールも、笑顔で、そんなリディアを追いかけた。

リディアの足よりも、レオノールのそれの方がはるかに速く、間もなくレオノールは、リディアのすぐ後ろにまで迫って来た。リディアはとうとう、もうこれまでと観念したように、その場にうずくまったが、するとレオノールは、背後から、そんなリディアを抱え込むように、抱きついたのであった。

“リディア、もう逃がさないぞ。もうこれまでだ”

そう言って、レオノールは、力の限り、幼いリディアを抱いた。

抱かれながら、息をハアハア切らせるリディアは、どういうわけか、全身がみなぎるように楽しかった。

父親に抱かれて、こんなに楽しい思いをしたのは、久し振りだった。

リディアは笑いながら、そんな父親の手をふりほどこうとした。草むらに倒れ、ころげ、必死になってはずそうとしたが、レオノールの腕は強くて、決してほどけることはなかった。

“可愛いリディア、つかまえたぞ。もう決して放すものか”とレオノールは言うのだった。

それは親子の愛と言うよりも、恋人に対する愛のように、リディアには思われた。

そのうち、

“苦しいわ。放して！”と、リディアは声をたてねばならなかった。

それほど、レオノールの抱く力は強かったのだ。

ハアハアと二人とも息を切らせながら、ついにレオノールの手がふりほどけたときには、二人ともころげるように、草むらに倒れ込んだ。気が付くと、全身草だらけだった。

“父さんったら、やり過ぎよ”と、リディアは少し不満気に言った。“あんなにまで強く抱くなんて、苦しいわ”そう言いながら、大きくリディアは息を吸い込んだ。

“ごめんよ。ついお前が可愛いもんだから”と、レオノールは言った。

確かに、髪の毛が長く、赤いスカートと赤いセータを着た幼いリディアの姿は、周りの自然にも増して、魅力的で、可愛いらしかった。レオノールが、そんなリディアを見て、抱きたい衝動にかられたのも、少しも不思議ではなかった。

そんな風にしばらく隠れんぼ遊びが続いた後、三人はもとの、檜の木のそばに戻って来た。三人とも遊びで、快い疲れにひたされていた。

“ああ、いい日だ”と、レオノールは、地べたに坐り込み、木にもたれかけると言った。

その目は、心なしか、潤んでいるように、リディアには思われた。

“父さんの子供の頃って、どうだったの？”と、リディアは、それとなく尋ねてみた。

“父さんの子供の頃か？”と、レオノールは、幼いリディアを見て言った。それから少し考えるように、間を置いてから、レオノールは続けた。“今のお前たちと大して変わりはないよ。野原で友だちと遊んだり、魚釣りをしたり、木登りをしたり、いろんなことをして遊んだものさ。――でもやはり貧しかったから、家の手伝いはさせられた...”

そんな風に初めて、子供の頃のちょっとしたエピソードをリディアに聞かせてくれた。友人と栗拾いに出かけて、友だちがもっとたくさん栗を取る為に、栗の木に登って揺さぶったが、いざ降りるときになって降りられなくなり、とうとう木の枝から落ちて、下に落ちていた栗のイガで大けがをしたときの話しなどを...

“そんなこともあったな。随分昔の話だ”と、当時をなつかしむように、レオノールは言った。“今は、あの友人はどこにいるのか。ともかく、子供の頃の思い出って、いつまでも残るものさ”

“ふ～ん、そんなものなの”と、リディアも感心したように、父親の語る話しに、耳を傾けていた。

“ともかくそういう意味でも、今お前たちは、貴重なときに身を置いているんだ”と、レオノールは言った。“だから、一瞬、一瞬を、大事にすることだな”

レオンが、二人から少し離れたところで、寂しそうにしていた。

二人は、そんなレオンに目を向けた。

“レオン。この家に来てくれてありがとう”と、レオノールは、日頃の労をねぎらうのだった。“君のおかげで随分とこの家は助かっている。本当に、心から感謝しているよ...”

レオンの表情にも、心の火がともったようだった。

“父さん、ぼくだって”とレオンは言った。“本当はひとりぼっちになるところだったんだ。でもこの家に連れて来てくれて、ぼくだって感謝しているんだ...”

リディアは、そんな父親と息子の会話を、ほほえましく見つめているのだった。

しばらくして、また空から光がさし始めた。風は冷たく感じられた。リディアは、目の前に広がる雄大な山の景色を目にしながら、ふと、海のことを思った。それは、本でしか知らず、まだ目にしたことのない海だった。

“ねえ父さん、海へ行ったことがある？”と、リディアはそれとなく尋ねてみた。

“海か...”とレオノールは、感慨深げに言った。“父さんの知っている海は断崖にそそり立つ灯台と、岩にくだける荒々しい海——そんな海を見たことがあるよ。そのとき、水平線というものも初めて知った。水平線が、自分を中心に、半円を描いているんだ。そして天気も、ちょうどこんな日のような天気だった。空はどんよりと曇っていて、向うの方では、日光が、まるでサーチライトのような光の束となって、海に降り注いでいた。太陽の姿はどこにも見えない。でもそれは、感動的な光景だった。断崖に立つと風は強く、海のところどころには、白い波頭が立っていた。遠く、水平線にまで延びるこの雄大な海はもうそれだけで、父さんの胸を満たすに十分だった。ふと足下を見ると、岸壁に押し寄せ、くだけ散る波と、向うの断崖にそそり立つ灯台と、それらが父さんの心をさらに満たしてくれた。もう夜は明けて朝になっていたが、それでも灯台は、休むことなく炎を投げかけていた。——そう、それが父さんの知っている海だ。またどうして海のことを尋ねたんだい？”

“どんなのか知りたいと思って...”と、リディアは控え目に答えた。

でも、心の中では、レオノールの今語ったそんな海へ行ってみたい気持でいっぱいだった。

“そうか、お前はまだ海というものを見たことがなかったんだね”と、レオノールは言った。

“海というものはなかなかいいものだ”と、彼は続けた。“晴れた海、嵐の海、静かな海、荒れた海と、海にもいろんな表情があるが、父さんの見た海が一番だ。もちろん、それぞれにもそれぞれの良さがある。でもやはり、父さんの見たあの海が一番だ、と今でも思っている。海を見るなら、朝方か、夕暮れ時か、いずれかのときに見るのが一番いい。そのときに、心に残る顔を見せてくれるからね。そのうちお前にも見る機会が来るだろうが、このことを覚えておくがいい。それは素晴らしいものだよ”

“海って、そんなにいいの？”と、リディアは尋ねた。

“ああ、山もいいが、海って、最高だよ”と、レオノールは答えた。“こんな話を聞いていると、海ってどんなものか一度見たくなって来ただろう。――でも、それはすぐにというわけには行かないな。何せ、ここは、こんなに山奥なんだからな...”

そのことがリディアには悔しかった。もっと海の近くの山だったらいいのに、と思った。リディアは一刻も待ち切れない思いがしたが、今は、あきらめる他なかった。

“そのうち、わたしも行くわ”と、リディアは、遠く、幾重にも折重なるような山の峰々を見つめながら、ぼつりと言った。

レオノールは、額に髪の毛がほつれ、目を輝かせるように遠くを見つめているそんなリディアの姿を見た。小さな体の中に、燃えるような思いを持っているそんな若いリディアが、レオノールには可愛くてならなかった。

しかし、リディアの頭の中はもう、晴れ渡った真青な空の下に広がる大海原の姿でいっぱいに満たされていた。そして、そこに登場する人物の姿としては、リディアと、もうこの世にはいない、父親と母親の姿だった。彼らが、微笑みかけながら、大海原を背景に、リディアの方に振り向いていた...

“さあ、もう食事も終わったことだし、行こうか”やがて、そう言ってレオノールが立ち上がった。

リディアも、レオンに遅れまいと立ち上がった。

レオノールは、二人の子供を、両手につないでその場から去って行った。

やがて、山を下って行くと、樹木がおおい、シダやその他の雑草におおわれたその向うの谷間を這うように、小川が流れている姿が見えて来た。小川の彼方には、もう少し広い川が本流となって、黒い林の陰に見え隠れし、さらにその向うには、草が生え、あるいは岩膚がむき出しとなった山の斜面が、日光を浴びて、その明るい姿を見せている。まだ空は曇っていたが、その斜面だけは、日光を浴びているのだ。

“ねえ、川よ”とリディアは指をさし、レオノールの手を離れ、駆けるようにして、草むらを降りて行った。

“気を付けるんだよ、リディア”と、レオノールは、リディアの後ろから声を掛けた。

レオノールがリディアに追いついたとき、リディアは、本流の岸辺の岩場に立って、川が白いしぶきをたてて、ゴツゴツした岩のあいだを流れ下っているその様を見つめていた。岸辺には、松やモミの木立がおおい、岩場のかん木からは、青い名も知らない可憐な花が、顔をのぞかせていた。水は大きな音をたてて、激しく流れていた。川が蛇行し、流れ下っているその折れ曲がった対岸には、岩膚を見せた山塊がまるで巨人のようにそびえ立っている。水は清く、植物の種類も豊富で、ここはまるで楽園のようなところだった。

リディアはじっと、岸辺の岩場に立って、川の流れを見つめていた。

“何を見つめているんだい？ リディア”そう言ってレオノールが近付くと、

“しーっ”とリディアは、何かを真剣に見つめているような様子で言った。

“魚よ。小さなお魚が、岩のふちにいるの”と、リディアは小声で言った。

なるほど、その声で言われている淵を見ると、確かに小さな魚が数匹、じっとしていた。

“虹鱒だね”と、レオノールは言った。“でも、そっとしておいてあげよう...”

その言葉で、リディアはやっと、岩場から離れた。それから、草むらに立って、改めたように、周りの景色を見回すのだった。そのとき、突然、どこにひそんでいたのか、ガンの群れが、森の方から大空高く舞い上がった。それらは、一団の塊となって、大空を向きを変え、突然翻ったりしながら、自由に飛び回るのだった。その自由な鳥たちの飛ぶ姿を見ながら、リディアはふと思うのだった。

あの鳥たちは、あんなに自由で幸せなのに、この素晴らしいときにはもう、あの猫はいないんだわ。この素晴らしい現在を、もうあの猫は知らない。それを知ることもなく、逝ってしまったんだわ。できるものなら、あの素晴らしい鳥たちの姿を、あの猫にも見せてやりたかった。でも、もうそれもできない相談ね。あの猫は、この現在を知ることなしに、死んで行ってしまったんだもの。猫が死んでしまった後も、無情にも、時は流れて行くのね...

そのことを、このわたしだけが知っている。――そう思って、リディアは少しばかり、悲しい思いがした。

今でも、猫の亡くなった悲しみを、引きづっていることには、変わりがなかったのだ。

大空を幾度か旋回していたそのガンの群れが、やがて向うの山に向かって、小さく、遠ざかって行くのだった...

リディアは、その悲しみを、なぜか、レオノールに言う気にはなれなかった。

その頃、リディアは、学校から帰ってから、家の雑用の合間をぬって、よく、牛小舎の二階に設けられた積み藁置き場に上がって、一人、めい想にふけったり本を読んだりするのが習慣となっていた。

秋も深まったその日は、よく晴れていた。リディアがいつものように、心もとない木の梯子を伝って二階の藁置き場に行くと、そこにどっさり積まれた藁に背をもたせかけるようにして、所定の位置にリディアは坐り、秋の柔かな日ざしのさし込む窓の方に目をやった。ここから見える窓の外の光景は格別で、よく晴れ渡った青い空や、紅葉しかけている庭の樹木の姿などがうっすらと目に飛び込んで来るのだった。リディアは、それらを目にして、はっとしたようにため息をついた。そしてふと、今しがた上がって来たばかりの、梯子の取りついている板が剥き出しの床に目をやったが、その場所は、昔よく猫が、体をうづくまるようにして昼寝を楽しんでいた場所だと思い出して、少し悲しい思いがした。昔なら、そんな猫の姿をその場所でよく見かけたのだ。しかし今は、積み藁の一部が床を占領している以外、何もなかった。猫の思い出は、段々と風化して行くものなのだ。――リディアはそんな気がした。その場所は、よく日光が当たり、今も、窓からさし込む光がよくその床を照らしているがゆえに、いっそう悲しい思いがした。

床の下からは、ロープでつながれた牛どもが、もの悲しそうな泣き声をたてていた。その一部は、リディアのいるところからも、床の吹き抜けを通して見えていた。

やがて、牛小舎の扉がバタンと鳴って、鋤を持ったレオンが姿を現した。レオンは無言のまま、鋤でわらをかき混ぜ牛に与えると共に、牛の糞の処理を始めた。それから、牛の手入れの為、ブラッシングを始めたとき、ふと、二階にいるリディアと、レオンの目が合った。

“そこで何をしているんだい？”と、レオンは、二階の積み藁にうずもれたところに坐っているリディアを見上げながら尋ねた。

“なんでもないわ。ただぼんやりしているだけ”と、リディアは、レオンを見下ろしながら答えた。

でも、レオンから見えるリディアは、両足を床に投げ出し、とても可愛らしく見えた。

“ぼくもそこに上がっていいかい？”と、何気なくレオンは言った。

“ええいいわ。ここはとってもいいところよ”とリディアは答えた。

やがてレオンは、梯子を伝って、二階に上がって来た。リディアは、彼に場所を譲るべく、自分の坐っている位置を少しずらせた。レオンは、二階に上がると、リディアを見、それから、リディアの横にやって来た。

“ここへはよく上がるの？”と、レオンは尋ねた。

“ええ、ときどき”とリディアは、それとなく答えた。

“ふ～ん、でもこんなところで、何をしているんだよ”と、レオンは、なおもひつこく関心を持ちながら、リディアに尋ねた。

“いろいろよ”と、リディアは答えた。“ここで、色んなことを考えたり、色んなことを空想したりするの”

“へえ～、たとえばどんなことを”と、レオンは、驚いたように尋ねた。

“そんなに大したことじゃないわ”と、リディアは答えた。“だってここは、物を考えたり、空想したりするのに、とってもいいところでしょ。それで、ときどきここへ来ては考えごとをしたりするの。たとえばね、あの窓の外を見つめてから目を閉じるの。すると、たとえようもなく満たされた気持になることがあるの。目の中にはまだ青い空が残っていて、それが微妙に変化して、それから色んな世界が目映ったりするの。それから目をあけると、色づく木の葉が見えるでしょ。とっても今、幸せな気持ちよ。あっ、シロが屋根の上を走って行くわ”

リディアの言う通り、窓を通して、向かいの自宅の屋根の上を、白い猫がのそのそ歩いて行き、どこか適当な日なたぼっこのできる場所を捜しているみたいだった。

“あの白い猫がいてくれるおかげで、前の猫の悲しみが、少しは柔いでくれているの”と、リディアは悲しそうに言った。“あの猫は、前の猫が死んでから三ヶ月後の春先に、ヒョッコリ姿を現して、それからこの家に住みつくようになったのよ。でも、前の猫ほどにはなついてくれないわ。わたしに抱かれるのもいやがるみたい。野良の生活が長くて、人に触れられるのは、余り慣れていないみたいね。――でもあの猫のおかげで、前の猫の一部肩代わりをしてくれていることは事実よ。今では、あの猫がとっても好きよ...”

“そうかい。君が猫好きなのは分かったけど、ぼくには牛の方が気になるなあ”とレオンは答えた。

レオンの、猫に対する気のなさが、リディアを少し悲しくさせた。

“猫にも猫のドラマがあるんだわ”と、リディアは心の中で思った。“この世に生まれて来て、色んなことを体験して、そして死んで行くの。考えてみれば、短くて、はかない一生ね。でもそのあいだ猫は、無邪気に、幸せに、一生懸命に生きるのよ。多分それが、わたしたちの感動を呼ぶのね。とりわけ一度猫と触れ合ったら、もうそれが最後、わたしの体の一部ようになってしまいうわ。だからその猫が亡くなったりすると、悲しくて仕方がないのよ...”

“でもここは気に入った”と、突然レオンは言った。“日がさして暖かいし、明るいし君が気に入っているというの分かるような気がするよ。どうだい、ここで君が得意な本などを読んで聞かせておくれよ”

“だってレオン、それじゃ勉強にならないわ”と、リディアは言った。

“でもぼく”と、レオンは言うのだった。“一生懸命やろうと勉強したけれど、やはり勉強は向いてないことが分かったんだよ。字なんて、難しくてとても読めやしない。とても君の能力について行くなんて無理だよ”

“でも兄さん”と、リディアは顔をしかめて言った。“そんな弱気を吐いちゃダメよ。それじゃ少しも勉強にならないわ”

“分かっているけど”と、レオンは続けた。“実のところぼく、君の朗読を聞くのが好きなんだ。とっても読むのがうまいし、それに君のフルートだって好きさ。そんなのをここで聞かせてくれれば最高だと思うんだけどなあ...”

リディアもその言葉でついにつっこりしてしまった。

“分かったわ。きょうはわたしの負けのようね”と、リディアは言った。“じゃちょうど本を持って来てから、それを読んで聞かせてあげるわ。きょうはね、アンデルセンのお話しよ。知ってる？”

“いいや知らない”と、レオンは首を横に振った。

“じゃ、今から読んで聞かせるから、黙って聞いていてね”

そう言ってリディアは、「野の白鳥」の話しを読んで聞かせるのだった。レオンは、積み藁に背をもたせかけ、そんなリディアの朗読を、目を閉じて、うっとりしたような表情で聞き入った

…

それから数日経った寒い、凍ったような日のことだった。その日は、レオノールも、リディアも、レオンも、ある用事で帰って来るのが遅くなった。帰って来るなり、リディアは、白い猫のことが気になり、いつもならこの寒さで忍び込んでいるはずの、牛小舎の中の藁を敷いたところへ見に行っても、あの白猫の姿は見られなかった。また夜歩きにでも、どこかへ行っているんだろうと、簡単に考えたが、その夜はとうとう帰って来ることはなかった。それでリディアは、少し心配になりだしたのだ。そんなことは、ここ数ヶ月というもの、一度もなかったことなのだ。夜には必ず帰って来て、部屋の窓を叩くなりする為、暖かい家の中へ入れてやったものなのだ。それなのに、この日に限って全くその気配はなくなり、それに、リディアにはふと思いがたることがあった。つい数日前、あの猫が寝てるだろうと牛小舎へ見に行ったとき、初めその猫だと思って手をさしのべた猫が、暗がりによく分からなかった為か、実は、あの白いボス猫だったことを。白いボス猫は、驚いたように牛小舎から飛び出したが、そのときになって初めて、ボス猫に、あの白い猫が寝床を奪われたことが分かった。

そのことと、今回の失そう事件とは関係があるのだろうか？

ともかく、翌日、一日待っても、シロは姿を現すことがなかった。

姿をパツタリ見なくなると、リディアは再び、以前のあの寂しさを感じるようになった。

前の猫ほどではないにせよ、やはりシロは、シロとしての可愛らしさや、存在感を合わせ持っていたのは事実だったのだ。しかも、前の猫の穴埋めをするのに十分役立ってくれていたのだ。そのシロもいなくなったとなると、リディアは再び、自分の生活の心もとなさを、感じないわけにはいけなくなった。

急に姿を見せなくなったシロは、一体どこへ行ってしまったのだろうか？

いろいろと憶測を呼んだ。誰かにさらわれたのか？ それとも、どこかで事故にあって、もう死んでしまったのだろうか？ それとも、あのボス猫に追っ払われたか、それとも、いびり殺されてしまったのだろうか？

あの、人なつっこさがなく、人を警戒ばかりしているシロが、誰かにさらわれるなんて、考えられなかった。となると、残された理由としては、なんらかの事情で事故に会ったか、ボス猫との関係でいなくなったのか、そのいずれかと思われたが、確かなことは何も分からなかった。

なんといっても、肝心のそのシロが、姿を現さないのだ。

リディアは、辛抱強く、その晩も、そして、翌日も、シロが姿を現し、帰って来るのを待った。

だが、二日経っても、三日経っても、姿を現すことはなかった。

家の周りは再び、以前のあの猫が亡くなった後のような、あの静けさを取り戻した。

猫のいなくなったわびしさが、再びリディアの心の中に、頭をもたげて来た。もうあのわびしさは御免だと、シロが出現してくれたおかげで、今日まで持ちこたえられて来たのだ。

それなのに、そのシロが突然いなくなったのだ。

リディアはとうとうたまりかねて、近所を歩いて、シロを捜し回った。しかしどこにも、そのシロを見ることがなかった。

どうなったのだろうか？ リディアはもう悲しくてならなかった。

どこへ行ってしまったのだろうか？ ただ、猫好きのおばさんが近くにいる、その人に、何日か経って帰って来ることもあると聞かされて、それが唯一の心の支えとなった。

そして、リディアはふと思い出したのだ。

シロが初めて、この家に来たときのことを。

それはまだ、前の猫の死の悲しみが完全には消えていなくて、その悲しみを引き摺っているときのことだった。どこをどういうわけか、新しくこの家に飛び込んで来た、前の猫よりはみすぼらしいこの猫にそれほど関心を引くことはなかった。しかし、少しは心の足しになるかも知れないと、餌を与えてやったのだ。リディアは、この白い猫との関係が、前の猫との関係のようになるとは、初めから期待はしていなかった。でも、空いた心の穴を埋めるには、この猫しかないのかも知れないと考え、世話をする決意をしたのだった。そして、最初は食事を外で与えた。白い猫も、野良の生活は、前の猫以上に長いと見え、人に対する警戒を怠らず、しかも、動きもすばしっこかった。しかも、前の猫よりはずっと若く、口には、鋭い、きれいな歯が、見事なまでに並んでいたのだ。その猫を、何日か手なずけた後に、とうとう、家の中のえさにまで、白い猫をおびき出すのに成功した。白猫は、えさ欲しさに、警戒しながらも、家の中にまで上がり込んで来た。そして、中に入って、えさを食べ始めたときに、リディアは、ピツタリとドアを閉めたのだ。

それを知ったときの白猫の驚きようと言ったら、それこそ、背中の毛を逆立たさせるほどの驚き方、あわてふためようだった。猫はギャッと叫び、恐ろしい勢いで逃げ場所を捜そうと部屋の隅へ逃げ込み、高いところへ上がろうとした。

無理もない、人間だって、もしそんな状況に追いつめられれば、同じ恐怖を感じただろう。何をするか知れない、自分よりも何倍も大きな巨人と同じ場所に閉じ込められたのだから。

リディアには、猫の驚きはよく分かった。だから、そばに寄って、恐怖をそれ以上かきたてさせるのではなく、その場は大人しく、やがて猫を家の外に逃がしてやったのだ。

...そんなことをくり返しながらか、徐々に手なづけられるようになって来た白猫だったのに、そして最近では、前の猫同様、家族の一員のようにみなして来た猫だったのに、それが突然消えてしまったとなつて、リディアはやはり、心にぽっかり空いた穴のようなものを、感じないわけには行かなかった。

その原因の一つには、この寒さがあるのかも知れない。それこそ、人に飼われていない野良猫にとっては、いい寝床を獲得する為には、しれつな争いとなるのは必死のことなのだ。あのシロは、その争いに破れたのだろうか？

確かに、最近の安楽な生活のせい、あのシロは、来た当時のやせ細った体に比べ、随分と肥えたりもし、それに、寝ているばかりの怠惰な生活が多くなつた。そして、近頃の寒い夜には、もう家の外では我慢できなくて、好んで家の中に入れるよう窓を叩いて合図をし、家の中の一番暖かい所でのびのびと体を横たえる、という日が続いたのだ。

「猫はその目的を失ったときに死を選ぶ」というあの言葉が、ふとリディアの頭にもたげた。

かつてのような、野性の抵抗力を失い、この寒さに、あの猫は耐え切れなくなつてしまったのだろうか。

いずれにせよ、シロがいなくなつてからというもの、まるでその穴埋めをするかのように、リディアの想像は限りなく広がつた。

また再び、以前のあの猫の死のときのような苦しみを味わうことはリディアは御免だつた。

しかし、余りなつきはしなかつたが、最近では布団のぬくもりを求めて夜は一緒に寝さへしていたあのシロの失そうの原因をいろいろと詮索しているうちに、たまらない気持ちになつて来るのを、リディアはどうすることもできなかつた。

失そうしてから四日目の晩、レオノールと日が暮れてから帰つて来たときに、レオノールは冗談に、

“きつといつものあの場所から姿を現すよ”と慰め、リディア自身もそのことをほんの一瞬期待したが、やはり庭は闇の中で静かなままで、猫の気配が全く感じられないと分かつたときには、悲しみの余り、リディアの胸は潰れてしまいそうにさへなつた。

多分――もうどこかで死んでしまつているのだろう、というのが、リディアのささやかな結論だつた。

あの可愛い目つきや、寝姿、無邪気な表情などを思い出し、もうその猫と二度と出会うことがないのだと思うと、リディアは、キュッと胸が締めつけられる思いがした。

あれから四日！ もう四日も姿を現さないということが、リディアには信じられないことだつた。ほんのつい最近まで、あの猫はいて、えさを食べ、暖かいストーブのそばで寝そべつていたというのに、その猫が急に消えてしまつたのだ。最後のメッセージも残さずに...

あの無邪気な顔のまま、この寒空の下で、草葉の陰で死んでいる姿を想像して、リディアはたまらない気がした。そして、何度も、部屋の窓のカーテンをあけて、猫はそこに帰ってはいないかと、真暗な、寒々とした庭に目をこらすのだった。

或る日、忽然としてこの世から消える――あるいはそれが猫の運命なのかも知れない、そう思って、リディアは自分を慰めようとした。これで、たて続けに二度も、猫の死を経験したわけなのだ。その落胆と、寂しさは深かった。

罪な猫、とリディアは心の中で思った。あんたは死んで、それでいいかも知れないけれど、残されたわたしはどうすればいいのよ。どのように生きて行けばいいのよ。

本当に、泣きたいほどの寂しさだった。

この前の寂しさは、シロによってある程度救われたが、今度こそは本当に、ひとりぼっちになってしまったような気になってしまったのだ。その穴埋めは、レオノールでも、レオンでもダメだった。

リディアは、たったひとりぼっちで、この世にとり残されたことを感じた。

シロこそ、リディアの本当の友だち、心のよき伴侶だったのだ。そのシロに先立たれたということは、この上なく大きな心の痛手だったのだ。

リディアの記憶では、前の猫の存在の方が大きいと思っていたのに、今となっては、シロの印象ばかりが、生々しく頭の中で蘇るのだった。

そのシロがいなくなった。

本当にいなくなったの？と、リディアは、誰もいない家の外に向かって、叫んでみたい気持だった。

本当に、どこへ行ったのよと、リディアは、心の中で泣きながら言った。生きているのなら、せめてどこかで生きているのなら、早く帰って来ておくれ。そして、元気なお前の姿を見せておくれよ。

“シローツ”リディアはつい、窓の外に向かって叫んでいる自分の姿を見出すのだった...

そのようにしてリディアはついに、猫のいない新年を迎えることになった。新年は、日光のよくさす穏やかな一日だったが、庭に出て、庭がいやに静かなのを見て、一抹の寂しさを感じないわけには行かなかった。シロは、あれ以来、とうとう帰って来なかったし、もう帰って来る見込みもないだろう。しかし、前の猫のときほどの悲しさを、リディアは感じなかった。一度、底を経験したせいなのか、それとも、一緒に過ごした期間が短かったせいなのだろうか、いずれにせよ、もう新しい猫を飼うのは御免だと心の中で思った。別れのときが余りにも辛いから、今度またもしそのような猫が現れたら、別れのときを心配しながら飼うことになるだろう。実際シロのときだって、前の猫の経験から、いつ別れのときが来るのだろう。

いや、この猫なら若いから、十年二十年は大丈夫だろうなどと気に病みながら飼ったときもあったのだが、その別れのときがこんなに早く、しかも突然の形でやって来るなんて、予想もしていなかったのだ。今思い返せば、前の猫の死の一周忌をレオノールと一緒に夜行い、久し振りの猫の写真などを見ながら、猫の思い出をあれこれとレオノールと語り合ったものなのだが、そのときにはまだシロは健在で、家の中で二人の会話を退屈そうに聞いていたのだった。そのシロが、それから間もなくして、姿を消してしまった。

その後も、シロの行方に関して色んな説が入り乱れた。隣の村でシロによく似た猫を見たという話しや、シロは、どこからか現れて、リディアの家にしばらく途中下車しただけで、まるで風来坊のようにまたどこかへ行ってしまったのだ、という説など。しかし、リディアはどちらも信じなかった。確かにどこかの、この寒空の下で、こごえ、やせ細りながら生きているシロの姿を想像できなくもなかったが、多分もう、どこかの草むらの上で死に絶えているのだ――そう思う方が自然な気がしたのだ。それにあの白いボス猫がからんでいるのか、そのところは分からなかったが、とてもこの世に生きているのだとは思えなかったのだ。

しかし、どういうわけか、シロのいなくなった寂しい庭を見ても、以前の猫が亡くなったときほどの悲しい気持にはならなかった。寂しさや、悲しい気持には変わりなかったが多分、それらに耐え得る強い精神というものが、以前の経験から培われたせいなのだろうか...

いずれにせよ、これで二年目の、猫のいない寂しい新年を、リディアは迎えることになったのだった。

シロは、今どうしているのかそれは分からなかったが、確実に、その死を見届けたあの猫の死から一年以上経った今、なお生き続けている自分のことが、リディアには辛かった。あの可愛い顔、あの優しさ、あの臆病で邪心のない顔つきを思い出すたびに、それが一年以上も前に、この地上から失われ、もう二度と会うことがないのだ、ということが、リディアの胸を押し潰しそうにした。これからも、あの猫のいない寂しさを引きずって、どこまでも生きて行かねばならないのだ。これから先、何年生きて、あの猫から遠ざかることはあっても、目前に現れることは決してない、ということが、リディアの気を滅入らせそうにした。そしてそのことを感じたとき、リディアは、この世で自分はひとりぼっちだ、親しい人はレオノールも含めて誰もいなくて、本当は孤独なのだ、ということを感じた。その孤独を慰めてくれたのが、実は、あの猫の存在だったのだ...

だから、猫がいなくなって、みんなに見捨てられたように自分は孤独なのだ、ということを感じた。

学校の友だちだって、先生だって、レオノールだって、あの猫ほど、自分の心の中に親密に入り込んで来たものはなかったのだ。そのことをリディアはハッキリと認識し、だから、猫のいなくなった寂しい庭を見るリディアは、自然、悲しくなって来た。

もう、本も読む気にならなくて、新年の朝、リディアはこっそりと、よくあの猫が寝ころがっていた牛小屋の二階の積みわらの部屋へ向かった。

そこは、冬でも暖かくて、まだ死んだ猫と、行方不明になった猫の両方が、（この猫たちが一緒にいた場面は、時期的に一度もなかったのだが）そこらへんに坐っていて、姿を現すような気がして来るからだった。そんなことがあり得ないことは分かっているけど、せめて、そんなふんいきを味わうだけで、リディアは満足だった。

そのようにして、リディアは、ひとりぽっちの、新年の朝を迎えた。

心地よい眠りの中でうとうととしているときに、突然、カタツという音がしたので、はっとなって、リディアは目を覚ました。

気が付くと、レオンがはしごを上がって来ているところだった。

“部屋にいなかったから、多分ここだと思って...”と、レオンは、目が合うなり言った。

“そうよ。いい気持だったわ”と、リディアは答えた。

そしてすぐ、あのシロが、どこかの草むらで可愛い口を開き、今にも死にそうな図を、夢現に見ていたのを思い出し、ハッとなった。

“年が明けたのに、君は部屋にいないんだねえ”と、レオンは、リディアのそばにやって来るなり言った。

“だって、シロがいなくなったんだもの”と、リディアは悲しそうに言った。“シロのいない新年なんて、余り楽しくはないわ”

“そのうちきっと帰って来るよ”と、レオンは慰めるようにリディアに言った。

“ううん、いいの”と、その慰めに対しても、リディアは半分あきらめ顔で答えた。

“わたしはね、レオン”と、リディアはしばらくしてから、誰に語るともなく、悲しそうに言うのだった。“この三年ほど、猫との生活というものを知ったわ。それは、あなたには分からないでしょうけれど、楽しい、本当にいいものだったわ。毎日がね、猫とともにあってね、その行方や仕種がとっても気になって、とっても楽しいものだったわ。――でも、もうそういう生活がお終いになったと知るときが来たようね。これからのわたしの生活には何も無い、本当に何も無いの。それでわたし、つくづく思うの。この三年間ほどわたしを楽しませ、勇気づけさせてくれたあの猫ちゃんの存在って、何んだったんでしょって。一匹は死に、一匹はどこか遠くへ行ってしまったわ。そしてもう二度と会うこともない。いいの、分かっているの。もう二度と会うことはない、ということは。わたしのこれからの人生に、再び登場することはないのよ。そしてただ、遠ざかって行く記憶として残って行くだけ... それは、辛い、悲しいことだわ。でも、これだけは確かよ。あの猫の存在だけは決して忘れないって。決して...”

そこまで言ったとき、リディアはたまらなくなっていて、とうとうレオンの膝の上に泣き崩れてしまった。

他にどうしようもない悲しさを、リディアは感じたのだ。

レオンは、そんな風に泣き崩れるリディアの頭を優しくなでながら、どうしていいか分からず、無言の、優しい視線をリディアに投げかけるばかりだった...

リディアの少女時代は、そのように暗いものとして流れて行った。

しかし、青い空には、群がる雲がゆっくりと流れていた。まだ冬のさ中だったが、リディアはしっかりと、そんな空を見つめていた。

もう誰もいないし、何もないと感じた自分だったが、そのような自分はまだ生きていた。あの、流れて行く白い雲は、自分の心もとない未来を暗示しているのだろうか、それともまた別のものをさし示しているのだろうか、リディアには分からなかった。

ただ暗い、言い知れぬ悲しい気持を抱いて、村の丘の上に、たったひとりで立ち尽くしているのは事実だった。冷たい冬の風が、そんなリディアに容赦なく吹きつけた。

間もなくして、流れ行く雲のひとつにじっと見入ってから、何を思ったのか、リディアはくりときびすを返すと、帰ることにした。ふもとで自分を待っているあの家に。自分を待っていると言っても、レオノールは留守がちで、レオンや家畜しか、その家にはいなかった。

リディアが帰って来ると、レオンが心配そうに顔を出した。

“どこへ行ってたんだい、今頃？”と、レオンは、帰って来るリディアを見て言った。

“ううん、そこまで”とだけ、リディアは答えた。

“そこまでって、何しに行ってたんだよ”と、レオンは、なおも問いつめた。

“なんでもないの”と、リディアは答えた。“ただ雲を見に行っただけ。雲が、あんまりきれいなものだから...”

“雲か！”と、レオンは、あきれたように言った。“確かにきょうの空はいい。でも、こんなに寒いのに、よく出掛けて行くね”

“雲を見ているとね、気持が落ち着いて来るのよ”と、リディアは答えた。“様々な表情をしていて、そのうち、何もかも、すっかり忘れてしまうの”

“そうか、君には忘れたいことがあったんだね”と、レオンは、同情するように言った。“でも、父さんはまたバクチだし、君はいなくなるし、家の中は本当に大変だったんだよ”

“御免御免、兄さん”と、リディアは謝った。“でも、どこか、悲しい、満たされない気持がしたもんだから。――でもいいの、シロのことはあきらめたわ。それにもう、思い出したくもないし...”

“そうだよ、いつまでもくよくよしていちゃダメだよ”と、レオンはそんなリディアを励ました。“そして早く、出会った頃のあの澆刺としたお前に戻ってよ。沈んだ君を見ていると、ぼくまで気が滅入っちゃう...”

“御免ね、レオン。心配かけたりして”と、リディアは謝った。“もう大丈夫よ。今回は、前と違って、回復が早いんだから。また、本も読んで勉強もするわ。それに、家のお手伝いもする。それにしても父さんって、ヒドいわ。家のことを全く顧みないんだから...”

“父さんのことはほっとけよ。それよりさ”と、レオンは言った。“君の学校でパーティがあるんだってね。そのときには、父さんだって、出席するよ。”

なんたって、リディアがみんなの前でフルートを吹くんだもの。それに、ダンスだってあるし、楽しい会になりそうだね”

“兄さんも来るでしょ？”と、リディアは楽しそうに答えた。

“もちろんだとも”と、レオンは胸を張って答えた。

その翌朝、窓からさし込む光でリディアは目が覚めた。そして同時に、シロはもうこの家にはいないのだ、ということ思い出した。部屋の中も外も、まるで死んだように静かだった。とりわけ窓の外は、美しいほど空は澄み、晴れ渡っていた。リディアはつい、それにつられて、ベッドから起き上がると、窓辺に歩み寄った。澄んだ、真青な空に、美しい白い雲や、灰色の雲――リディアはもともと空を眺めるのが好きだったが、あの日以後一層空を眺めるようになった。そうしていると、不思議と今の孤独を忘れ、悲しみも記憶もどこかに消えて、心が落ち着いて来るのだった。雄大な空や雲は、確かに悲しみを消してくれた。そして、自分自身が無になるような、そんな気分になって来るのだった。

しばらくのあいだ、立体的な雲の形や、消えそうに軽い雲、雲のへりのギザギザなどに関心を奪われ、じっとしているうちに、やがてふと部屋の寒さに気づき、リディアはストーブに薪をくべた。そして、椅子を持って来ると、ストーブのそばに寒そうに坐るとまた窓の外を見つめるのだった。

そうして、時が経って行った。

リディアは、まるで生きる希望を失った子供のように、そこでじっとしていた。

リディアは、昨晚とうとうレオノールが帰って来なかったことを思った。何もかもが、うまく行かないのだ。シロの失そうをきっかけに、この家は確実に崩壊して行くのだ、とさえリディアは思った。生きて行く、ということはどんなに辛いことだろう。いっそのこと、あの青い空の、白い雲の上にある天国にわたしを召してくれたら、わたしは、亡くなったオルガおばさんや、両親や、死んだあの三毛猫や、シロに会えるかも知れない――そんな気がリディアにはして来た。ああ、その方がよっぽどいい――とリディアは思った。父さんだって、レオンだって、学校の友だちだって、あの死んだ人や、動物の代わりはできない。決してできない...

リディアは、そんな風に考え、このまま眠ってしまいたいと思った。そうした方が、このまま生きているより、どんなに楽だろう。

リディアはぼんやりと、椅子に坐ったまま、窓の外の雲や、風に揺れる木の葉を眺めていた。何を期待するのでもなく、ただこの状況を打ち破ってくれる何かが欲しかったのだ。部屋の中は余りにも静かで、パチパチと薪が燃える音と、窓の外の寒風の音しか耳には入って来なかった。そしていつのまにか、以前もそうだったが、小鳥が、家の庭に舞い戻っていることにリディアは気が付いた。猫のいなくなった庭は、再び、小鳥たちの天下となったのだ...

しかし、木の枝に止まってさえずる小鳥が、リディアの気持を慰めるわけでもなく、この余りにも静かで、時が止まったかのような状況が、リディアを殺してしまいそうな気さえした。レオンが、この苦しい状況を打破してくれるとも思えなかった。

しかし何か...

リディアは、シロの失そうをきっかけとして、無性に、動物のことが気になり出した。動物について書いてある何か、いい本はないだろうか。そんな本を手にしても救いにはならないが、気を紛らせることはできるだろう。これからは、そんな風にして、心に空いた穴を、少しづつ埋めて行こうか...

そんなことを考えている最中だった。

突然、家の外で、ギャーギャーと叫ぶ声がして、リディアはハッとなった。

もしや、とその瞬間思ったのだ。あの猫の泣き声はシロでは？

そう思って、部屋の窓をあけると、なんと、あのシロが帰って来たのだ。

体を真黒に汚して、でも、出て行ったときにつけていたあの蚤取りの首輪を今もしっかりつけていたので、もう間違いはなかった。リディアは一瞬、自分は夢見ているのではないだろうか、自分の目を疑った。だが、こちらを向いて、えさをねだっているのは、間違いなく、あのシロだった。

リディアは窓を開いて、猫を家の中に入れた。すると猫は、リディアのことを決して忘れてはいなくて、入って来るなり、その足下に何度も頭をすり寄せて来た。リディアも、それに答えるかのように、猫の頭をなでてやった。それからすぐ、まだ置いたままになっていた猫のえさをやると、シロはガツガツとそれを食べた。リディアは、そっとそんな猫の背に手を当てたが、シロは気にすることなく、えさを食べ続けた。

それにしても、どこをどう過ごして来たのか、汚い体で、少しばかり、体をタオルで拭いてやることにした。少しばかり拭いたところで効果のほどはほとんどなかったが、猫が泣くたびにたてるそのかすれた声が、これまでの生活の厳しさを現していた。

リディアはさっそく、レオンを呼びに行った。

“帰って来たのよ、シロが”と言うと、レオンは驚いて駆けつけて来た。

そして、床で食事をしているシロの姿を見るや、

“本当だ。あのシロだ。それにしても真黒だな”と、驚いて言った。“でも、やっぱり生きていたんだな”

生きていた！ この言葉ほど素晴らしい言葉を、これまで耳にしたことはなかった。

そうだ、シロは生きていた。そして、無事、帰って来たのだ。

それは、去年の十二月二十日に失そうして以来、この日は一月十三日だったので、二十四日ぶりの再会だった。

その間に、シロはすっかりやせ、顔つきも厳しいものに変っていた。余りの嬉しさにシロを抱いてやると、驚くほどシロの体重が軽くなっているのに気づき、二度リディアは驚いた。可哀

そうに、この二十四日間で、すっかりシロは、体重を軽くしてしまったのだ。

どこをどうほっつき歩いて来たのか、この寒い冬のこと、食料事情が余り良くなかったことは、これで実証された形だった。それでなのか、背に腹は変えられない、ということで、シロは帰って来たのだろうか。

シロは本当に、胃がビックリするのではないか、と思われるほど、がつがつ食事をした。それから、好みの暖かいストーブのそばに来ると、本当に安心したのか、しばらく毛づくろいをした後、目を閉じてじっとしたのだ。

こうしてシロが、再び我が家の一員となるのに、たいして時間はかからなかった。

これが多分、人間だったら、その間経験した様々な冒険たんを、とうとうとまくしたてたことだろう。だが、悲しいかなこの猫が、しゃべってくれないのが、リディアにはもどかしかった。

“でもいいの”と、リディアは、優しく猫の背中をなでてやりながら言った。“あんたが無事帰って来ただけで。ちゃんとこの家のことを覚えていてくれたのね。それにしてもなんと人騒がせな猫。あんなにわたしを心配させ、悲しませるんだもの。もういやよ。もう行ったりしないでね”

ところがそのときだった、ふと気が付くと、窓の外に、あのボスの白猫が、じっと家の中を伺うようにし、シロのこぼしたえさのお余りを食べていたのだ。

驚いてリディアが窓辺に駆けつけると、ボス猫は、一目散に向う側へ逃げて行った。

ちゃんとあのボス猫は、シロの行方をかぎつけてやって来ていたのだ。

そして気が付くと、さっきまで大人しくしていたはずのシロまでが、心配そうな面持で、リディアのいる窓の近くまでやって来ていた。そしてじっと、ボスが去った方向を伺っているのだ。

やはり、この失そう事件には、あのボス猫が、大きく介在しているのだろうか。

それが唯一、この幸せな日に立ち込める暗雲だった。

“でも、もう離さない”と、リディアは心の中で思った。“もう決して、シロ、行かないでね...もう行かないでね...”

その日を境にして、再びリディアの家には平和と安定とが訪れた。猫一匹と言えども、帰って来たシロのおかげで、リディアは心の安定を取り戻すことができた。シロはもうすでに家族の一員であり、それが失そうして減るよりも、戻って来てくれて一緒に生活ができる方が、何倍も嬉しいことには変わりがなかった。

そればかりか、シロ自身の中にも、以前とは明らかに違った変化が認められた。それを一口で言うならば、“もう外に出て行くのはコリゴリだ”とでも言っているような、シロの心境の変化だった。

以前なら、家の中に入れてもまたすぐ家の外に出たがり、窓やドアをコツコツと手で叩いて合図したのだが、今はどういうわけか、余り外に出たがりもせず、暖かいストーブの傍らでじっと寝そべったまま、という状態が続いた。昔ほどの活発な動きも見られず、家の中でじっとしたままだった。

リディアは、そんなシロの、あきらかな変化の中に、シロが外の生活の中で、よほどひどい仕打ちを受けたのだろうことを見てとった。いったん遠くへ行ってしまえば、この家のように、暖かく接してくれる家など多分なかったのだ。しかも、寒い冬の折り、えさにも余りありつくことができなかったのだろう。あれほど痩せきっていた体も、三日ほどすると、すっかり回復して来た。それに汚かった体も洗ってやって、少しは白さが戻って来た。

でもときどき家の外に出たがることもあり、言われるまま出してやると、そのままどこかに消えてしまい、少し不安になったこともあったが、しばらくすると、もう窓口に帰って来て家の中へ顔を覗かせるのだった。そんなときはもちろん家の中に入れてやり、リディアはシロを抱いて、なでてやった。

そして、つくづく不思議に思うのだった。シロがこんな風に家の中にいて、自分に抱かれているなんて、つい、一週間ほど前までは、シロがいなくて、すっかりあきらめきっていたというのに、まるで今ここにいるシロは、夢・幻ではないだろうかと思うときがあった。しかし、間違いなくそこにいるのは、シロそのものだった。

“やっぱりお前は、ここしか帰って来るところがなかったのね...”と、リディアは、そんなシロを膝の上に抱きながら、ささやきかけた。“それにお前は、前よりもずっと人なつっこくなったわ。多分、あの二十四日間で、人や物に飢えることがどんなことか、分かったんでしょね。今のお前の姿から、そのときの状態がどんなだったか、だいたい想像がつくというものよ。――でもともかく、やっとこの家を見つけてくれたのね。この家を見つけたときのお前って、どんなに嬉しかったか想像がつくというものよ。多分お前って、遠くへ行き過ぎて、迷ってしまったのよ。そして、帰り方が分からなくなって、随分と苦しい生活をした。人や猫に追いたてられ、危うく命を落としかけたこともあったはずよ。食うものも食えず、あんなにやせていたことが、そのことを物語っているわ。お前は随分、この家を捜そうと思ったはずなのね。それなのに、ますます違う方向へ行ってしまったりして。そして、二十四日ぶりにして、やっとこの家のそばを通りかかり、そして思い出したのよ。昔のなつかしい、あの我が家だったことを。それで大きな声で叫び続けたのね。もしわたしたちがそのときいなかったとしたら、どうしたでしょうね。でもとにかくわたしはいて、あんたの声を聞いたのよ。――本当に小説にしたいような、長い、苦しい二十四日間だったんでしょね。わたしの家を発見したときの喜びがどんなだったか、想像がつくというものよ。あのときの、あんなあの必死な姿が、それを物語っていたわ。本当に、命からがら、助かった！という感じだったんだもの。――お前が人間だったら、その生活がどんなものだったのか語ることもできたのに、聞かせてもらえなくて残念ね。でもいいわ、わたしが代わりに書いてあげるわ。「シロの冒険」とかいう題で...”

それは、リディアの心の余裕を表していた。

そして、猫を膝の上に抱きながら、窓の外の、広がる空を見つめるリディアの心は、どんなに違っていたことだろう。

以前の空は、それがいかに晴れていても、それは悲しみの象徴でしかなかったが、今は、青い空は、穏やかに雲の広がる青い空は、幸せの象徴でしなく、それを見つめれば見つめるほど、リディアの胸に、喜びと、幸せな感情とをもたらしてくれるのだった...

それはまた、リディアの生活が元に戻ったことを意味していた。すなわち、猫がいることが普通で、猫のいなかった二十四日間が、異常な事態だったことを意味していたのだった...

リディアは、今度は、意気揚々と、丘の上に立った。空は晴れて、空気は冷たかったが、もう、以前のような、寂しさや悲しさはなかった。まだ周りは、荒涼とした冬景色には違いなかったが、その風景の中に、明らかに、未来に対する希望のようなものが感じ取られるのだった。立っている自分の側に確実に忍び寄る、その希望の気配とはなんだろう？ リディアは、その気配を感じとり、その足音を聞こうとした。そしてそれは、確実に歩みを速めている、あの春の気配でもあったのだ...

リディアが、本当に澄んだ青い空に浮かぶ、まるで生物のような真白な雲を眺め、それから、今は色あせた牧場に視線を移して家路に着こうとしたとき、後ろから親友のポーラが声を掛けた。彼女も、リディアも、背中にランドセルをつけている。

“そんなところにいたの。まだ帰っていなかったの？”

“ええ”と、リディアは振り向いて答えた。

“あんたの家に白猫が帰って来たそうね”と、さっそく彼女は言った。

“どうして知っているの？”と、リディアは驚いて言った。

“さっき、あんたのお父さんに会って、聞いたわ”と、ポーラが言った。

“お父さんが？　じゃ、今家にいるのかしら”

リディアにとっては、久し振りに聞く父親のことだった。レオノールは最近、出稼ぎに行ったり、友人と賭博をしていたりで、家に寄りつかない日が多くなっていたのだ。それで、もう間もなくあるパーティの日に、レオノールが来れないのではないかと心配していたのだった。でも、ポーラの話で、久し振りに、今レオノールが帰っていることが分かった。リディアの目は自然、輝き出すのだった。

“そうよ、シロが、しばらく行方不明になっていたの”と、リディアは、表情をほころばせながら言った。“でも今は帰って来て、また元の生活に戻っているわ。まるで何事もなかったみたいに...”

“そう、よかったわね”と、ポーラは言った。

リディアも、心の底から嬉しかった。あの真青な空のように、一片の曇りもなく、晴れ晴れした、感動的な気持になっていた。

ポーラと別れて我が家に帰って来ると、珍しくレオノールが、牛の世話をしていた。

“やあ、リディアかい？ さっきお前の友だちの... よく見る顔の子に会ったよ。名前の方は忘れちゃった”

レオノールは、リディアと顔を会わずなり、声を掛けた。

“ポーラよ。わたしも会ったわ”と、リディアは答えた。それから、ちょっぴり気になっていたことをリディアは尋ねた。“父さん、きょうは仕事はお休みなのか？”

すると、レオノールは、少しきびしい顔をした。

“また、伐採所の仕事に戻るかという話があつてな”と、レオノールはやがて言った。“今、友だちにかけ合ってもらっているところだ。ただ少し、賃金は前に比べて悪くなっているがな。声が掛ければ、明日にでもまたその仕事だ”

“そう、よかったわね”と、リディアは言った。

今までの父親の不安定さがたまらなくイヤだったので、これでほっと、一安心の気持だった。

そう言って、レオノールが、牛にブラシをかけ始めると、向う側から、スコップとバケツを持った、汚い恰好のレオンが姿を現した。

“お帰り、リディア”と、レオンはリディアを見るなり言った。“きょうの学校はどうだった？”

“相変わらずよ”と、リディアは答えた。“ボンバル先生が、今度のパーティには、お父さんと、それから兄さんにも、是非来てもらうようにだって。いいでしょ、お父さん？”

そう言って、気になっていたレオノールの方にリディアは振り向いた。

“ああ、わしは行くつもりだ”と、レオノールは答えた。

“兄さんも、いいでしょ”そう言って、今度はレオンの方に顔を向けた。

“もちろんだとも。リディアの為なもの”と、レオンは、泥だらけの顔を、リディアの方に向けながら答えた。

“ありがとう、お父さんも、兄さんも”

リディアは、二人に笑顔を見せながら、牛小舎を後にした。

外に出ると、ニレの木の下、よく日の当たる所に、シロが寝そべっていた。今や、家族の一員におさまったシロは、リディアが帰って来たことに気づいてか、気づかぬか、体を丸めたまま、まるで綿のように眠っていた。そんなシロの姿を見て、リディアは、何もかも満足だった。

家に入り、トントンと階段を上がって行く。そして自分の部屋に入ると、ベッドの上にランドセルを脱ぎ捨て、そのまま窓辺に向かった。

本当にいい空だった。青い空に、白い雲。明るく、日のさした庭に、白い猫。遠くには森や、牧場や、山が見える。家の樹々がそよ風に揺れ、草も風に揺れている。間もなく春がやって来て、花々が芽をふくだろう。何もかもが素晴らしい日！ こんな日が、いつまでも続いてくれたなら。リディアは、そのことを、心から祈るのだった。

“人生って、あの雲のようだよ”と、リディアは思った。“浮かんでは消えて、消えては浮かぶあの雲のようだよ。そして二度と、同じ姿のものはないの。――でも、今のわたしのは、なんと素晴らしいんでしょう！”

リディアは、その日の夕方は、人生でも最高の夕方を迎えたようだった。リディアは台所で、夜の食事の準備で忙しかったが、ときたま手を休めたとき、窓の外の夕陽が、ゆっくりと山の彼方に沈み行こうとしていた。空の雲が黄金色に映え、庭の樹木も金色に輝いた。リディアは思わず家の外に飛び出して、その美しさをひとり眺めた。こんな美しい夕方ってあるかしら？と、リディアはひとり思った。生活が充たされているから、だからいっそう、沈み行く夕陽は色どりを添えているように思われたのだ。しかもその夜は満月の夜。空に浮かぶ月夜は美しかった…

そしていよいよお待ちかねのその日がやって来た。

いつもは垢にまみれて真黒けになっているレオノールもレオンも、この日ばかりはリディアの為に体を洗って見違えるほどきれいになった。服も、しまってた一番いい服を着、頭には帽子までかぶった。この日は、家畜の世話もチーズ造りも、帰って来るまでのしばらくのあいだお休みだった。

リディアも、普段に比べて、鏡の前でうんとおめかしをした。

だからリディアとレオンとがお互い向かいの部屋から出て来て廊下で鉢合わせになったときは、お互いの変身ぶりに我れを忘れるほどビックリしたものだ。

“まあレオン、本当に兄さんなの？”と、リディアは思わず口に出してしまった。

“なんだかこんなの、ぼくに似合わないようで照れるなあ”と言いつつも、レオンの目はしっかりと、きれいに着飾ったリディアに向けられていた。“お前だって、きょうは特にきれいになったね”

“そう？”と言ってリディアは、嬉しそうに目を下に向けた。

パフ・スリーブのついた、薄い青色の、いかにも少女らしいワンピースで、腰のところを、少し濃い目の青いひもで、後ろのところをゆるく結んでいる。その上に幅の広いえりのついた、濃紺のダブルのコートを着ると、普段とは見違えるような、いかにも可愛らしい少女がそこに姿を現した。さらに、ふさふさと波打つような肩まで垂れた髪の毛の上に、セーラ帽をちょこんとかぶると、用意万端、出発の準備が出来上がるのだった。

“さあ行きましょう”そう言ってリディアは、レオンの手を引いた。

下で待っていたレオノールも、この日ばかりは、きちんとしたスーツで身を固めていた。

三人は、リディアを間にはさんで意気洋洋と家を出た。

この日ばかりは、レオノールも、レオンも、そしてもちろんリディア自身も、上機嫌だった。

レオンは家を出掛ける前に、牛のことが気になるのかももう一度、牛小舎を見に行った。

レオノールとリディアは、レオンがやって来るのを家の前の道のところで待った。

やがてレオンが牛小舎から戻って来ると、レオノールが声を掛けた。

“どうだった？”

“異常はないよ”と、レオンは、二人をまぶしそうに見つめながら答えた。

まだところどころ白い雪が残っていたが、途中の道中は、牧草地が顔を出し、すっかり葉を落とした樹木がそこそこに幽霊のように突っ立っていたけれども、もう気分は、まるで春のようだった。丘の向うの方には、冬枯れの木立のそばに、くすんだ屋根と二本の煙突のある、白い壁をした家が見える。さらにその背後には、裾野を針葉樹におおわれた山塊が見え、それらの光景はもう何度も、学校の行き帰りに目にして来た光景だけれども、この日はまた特別違ったように思われるのだった。道の脇には、牧場を囲った木の柵が続き、この辺が春になれば一面、黄色いはいえにしだの花でおおわれることを、リディアは知っていた。そして、そのようなうららかな日はもう間近だと、リディアは感心していた。

“ねえお父さん”と、リディアは、レオノールの方に向けて言った。“それで仕事の方はどうなの？うまいこと行ってるの？”

“ああ今のところはね”とレオノールは、娘の手をしっかりと握りながら答えた。“順調さ。やはりやり慣れた仕事だから呑み込みも速いしな。昔の仕事仲間も大勢いる”

“それはよかったわね”と、リディアは嬉しそうに言った。“実はわたし、父さんが定職につかなかったとき心配していたのよ。何日も家をあけっ放しのときもあったし、仕事をしているのかいないのか、分からないときもあったもの。でも、もうこれで安心。わたしも安心して、家の仕事や勉強ができるわ”

“すまなかったな”と、レオノールは、ポツリと言った。“――でも大人の世界には色々とあってな、お前にはまだまだ分からないことが色々あるのさ。わしが大嫌いだったあそこの営業所長が交替となってな、それでわしは行く気になったのさ。あれがおるあいだは、わしは行けなかった。でもその障害が取れた。それでわしはまた元の職場に復帰さ。だが、条件は前ほどよくはないがな”

“でもこれで大安心よ”と、リディアは言った。“シロも帰ってくれたし、お父さんも元の職場。わたしもこれ以上、何も言うことないわ”

そんな会話が続くなか、レオンは相変わらず黙々と歩いて行くのだった...

山裾の、こんもりと樹木が茂ったところにある学校に近付くにつれ、父兄に手を引かれた子供たちの姿を見かけるようになった。どの婦人も、父親も、みんな思い切り着飾っているが、本当にそれが似合ってそうな人は一人もいなかった。馬車で駆けつけた人もいるらしく、小さな、白い校舎の前は、普段とは違った賑やかさだった。門の前には、ボンバル先生が出ていて、来る人一人一人にあいさつをしていた。

レオノールも、久しぶりに先生と会うとなって、いささか緊張した面持ちになった。

しかし、ボンバル先生は、三人の姿を見ると、すぐ近付いて来て、さっと手をレオノールにさし出した。

“フローバさんでしたね。きょうはよくぞおいで下さいました”と、にこやかな顔つきで、いつもと変わらぬ服装のまま、ボンバル先生は言った。

“なに先生”と、レオノールは、少し緊張気味に答えた。“娘がいつも世話になっております。おかげさまでようやく今年には卒業できるようになりました。娘もいつも、あなた様のことを話しておりますな”

リディアは、嬉しそうな表情のまま、そんな二人の大人の姿を見上げていた。

“卒業まではまだ少し間がありますがね”と、ボンバル先生は、落ち着いた表情で、レオノールを見つめながら言った。“リディアさんの今後の針路について、折り入って話があります。パーティのあいだでも、終わってからでもどちらでも結構です。少し時間をとらせていただいてもかまいませんでしょうか”

“ええ、かまいませんが...”と、レオノールは、突然のことで、うろたえぎみに答え、それから、視線をリディアの方に向けた。

リディアは、甘えたような目を、レオノールに返した。

“さあ、それじゃどうぞお入り下さい”そう言って、ボンバル先生は、三人を学校へ案内すると、また次にやって来た人にうやうやしく握手を求めるのだった。

教室内は様変わりして、手作りのケーキや飲物が用意され、くつろいだ雰囲気にも包まれていた。机はすっかり片づけられて、椅子だけが並べられ、教壇に当たる場所にはピアノが置かれ、ちょっとした舞台となっていた。そこで子供たちは、日頃練習をして来た、劇をやったり、歌を歌ったり、楽器を弾いたりして、大人を楽しませるのだった。

やがて、一番目の劇が始まった。リディアは、友だちの出演している劇を楽しみながらも、胸の中はすっかり張りつめていた。こんなに大勢の人前でフルートを弾くのは初めてだし、途中で上がってしまつてとちりはしないかと心配だったのだ。だが、レオノールがリディアのその気持を察してか、優しくその肩に手を当ててくれた。

やがて、最初の出し物の劇が拍手のうちに終わり、いよいよリディアの番となった。

ボンバル先生が前に立って、司会をした。

“さて次は”と、先生は言った。“我が校きってのフルートの名手、リディア・フローバさんの演奏です。演目は、バッハから二曲と、チマローザから一曲です。どうか、拍手を持ってお迎え下さい”

リディアは緊張の極に立って、コートを脱ぎ、例の可愛らしいブルーの装いで、人前に立った。人々の拍手はリディアが前に立つことにより、急に鳴り止んだ。しんとした空気が教室内にみなぎり、リディアは、視線をこちらに向けている人々の中に、レオノールの視線もあることを確認した。

ゆっくりとフルートを持ち換え、リディアはそれを口に当てた。すると間もなく、物静かな、柔らかいバッハの旋律が、教室内に響き渡った。

チマローザの演奏が終わったとき、教室内はさっきのときよりも一層大きな拍手に包まれたが、リディアは興奮の余り、その拍手がほとんど耳に入らなかった。無事、演奏が終わったという安堵感で、すっかり気が抜けてしまったような気になった。リディアが席に戻って来たとき、レオノールはまだ拍手を続けていた。

“なかなかよかったぞ、リディー”と、レオノールも、満足気に声を掛けた。

後ろに坐っていた別の父兄が、そんなレオノールに声を掛けて来るのだった。

“なかなかいいお嬢さんをお持ちですな。立派な才能をお持ちなさっている。将来が楽しみでしょう...”

レオノールはそれには答えず、リディアの頭を力いっぱいなでてやり、それからその頬にキスをするのだった。

レオンも負けずに、リディアにキスをした。

“リディアの演奏は、きょうが最高だった”と、レオンは言った。

“有り難う、兄さん”そう言って、リディアは、レオンの手をしっかりと握った。

やがて、子供たちの出し物がすっかり終わると、後は、食事をしたり、自由にしゃべったり、本格的なパーティが始まった。椅子を教室の隅に並べて、教室の中央は、踊りたい人向きの、ダンス場と化した。ボンバル先生は、アコーディオンを肩に掛けて、いつでも好みの音楽を演奏してくれた。飲物の中には、大人向きにアルコールも用意しており、レオノールはつい余分にそれを飲んでしまったようだった。アルコールのおかげですっかり緊張の解けたレオノールはついには歌を歌うと言って立ち上がった。

“先生、もし分かりましたら、伴奏の方、お願いします”と、レオノールは言った。“わたしは余り歌は歌えませんが、ただ一曲、知っている曲がありまして、それは思い出の曲なんです。それは、深い、深い思い出の曲なんです。実はある人がおりましてな、その人から教わった曲なんです。こんな歌を人前で歌うのは初めてですが、なにしろきょうは娘の晴れの舞台です。思い切って歌うことにします。先生、イエーツの「柳の庭のほとりで」(Down by the sally gardens)の伴奏を一つ、お願いしますです”

そう言うと、周りからいっせいに拍手が上がった。ボンバル先生は分かりましたとばかり手を上げ、それからアコーディオンを鳴らした。

レオノールは酔って、少し舌がもつれてはいたが、それほど調子がはずれることもなく、むしろうまいと言えるほどに歌った。

リディアは、レオノールの歌を聞くのは生まれて初めてで、驚いたようにその歌に聞き入った。

しかしレオノールが歌っているうちに、その瞳にキラッと涙のようなものが光るのを、リディアは決して見逃さなかった。

やがて歌が終わると、がぜん陽気になってか、今度はレオノールは手拍子を始め、みんな踊ろ

うとばかり、パーティの盛りたて役が変わった。

それに合わせるように、ボンバル先生のアコーディオンによる軽音楽が流れ始め、子供たちも大人たちも、みんないっせいに輪になって踊り始めた。

リディアはすぐにはその踊りに参加しなかったが、やがてレオノールが、リディアが椅子に坐ったままになっているのを見つけると、踊っている人々をかき分けて、リディアのそばにやって来た。

“リディア、何をしているんだ。みんな踊っているんだぞ。父さんと一緒に踊ろう”そう言ってレオノールは手を差し伸べた。

リディアはその手を取ると、喜んで立ち上がった。そしてレオノールと抱き合うと、くるくると回るように踊り始めるのだった。

“どうだい、父さんもまんざらじゃないだろう”と、レオノールは話しかけた。“昔はこれでも、踊りはうまい方だった。歌は下手くそだけれどもね”

“なかなかどうして、お父さん”と、リディアは笑顔を父親に向けながら言うのだった。“歌の方もまんざらじゃないわ。わたし、お父さんの歌を聞くの、生まれて初めて。お父さんが歌うなんて知らなかったわ”

“そうか。わしだって、きょう歌うことになるなんて、知らなかった”

そう言って、レオノールは微笑んだ。

“でもあの歌、どうして覚えたの？ なかなかいい歌だったわ”

リディアは、気になっていたことを、それとなく尋ねた。

すると、レオノールは、急に顔が、引き締まった顔つきになった。それから、やがてポツリとレオノールは言った。

“それはな、お前のお母さんがよく歌っていた歌だったんだよ”

そう言ったときのレオノールの視線は、どこか遠くを見つめているような視線だった。

“わたしのお母さんが？”と、リディアは言った。“でもわたし、一度もそんな歌を聞いたことがなくてよ”

するとレオノールは、あわてたように訂正した。

“そうだ、いや、お前の母さんじゃなかった。わたしの知っているある人だったんだよ”

“その人のことはよく知っているの？”と、リディアはなおも尋ねた。

“そうだ、よく知っている”と、レオノールは今度は、リディアを見入るようにして言った。“なかなかいい人だったが、もう会ってはいない。どうしてそんなことを聞くんだ？ もういいだろう？ 話題を他のことに変えようじゃないか”

そう言ったきり、レオノールはもうそのことについては触れないような態度を取ったがリディアは子供ながら、これは何かあるな、と直観し、そのことについてそれ以上レオノールが言ってくれないことが不満だった。そしてこのときの記憶は、後々までもずっと尾を引くこととなった。

しかしこのときは、少し不満が残ったものの、リディアも、もうそれ以上触れようとは思わ

なかった。レオノールがそのとき見せた涙――その涙が、その言葉の裏に隠されている深い意味をさし示しているに違いないと感じながら...

やがて踊りが一段落して戻って来ると、レオンが、誰の誘いもなく、寂しそうに部屋の隅に坐っていることに、リディアは気が付いた。

リディアは、そんなレオンに優しく声を掛けた。

“兄さん、踊ろう？”

“だって”と、レオンはおずおずと言うのだった。“ぼく、踊りは苦手なんだ。だってよく知らないんだもの”

“なに、簡単よ”と、リディアは言った。“わたしが教えてあげるからさ、ねえ兄さん踊ろう？
さあ、勇気を出して”

そう言って、リディアはレオンの手を引いた。

レオンは周りを伺うように目をキョロキョロさせながら、しぶしぶ立ち上がった。

“だってぼく何も知らないんだよ。お前に迷惑かけるかも知れないしさ”

“大丈夫よ”と、リディアは、そんなレオンを励ました。

そして踊りの輪の中にレオンを連れて行くと、そのまま見事、レオンを踊りの輪の中に吸収してしまうのだった。

間もなくして、ひとりで踊りながら、みんなに愛きょうをふりまいていたレオノールがフラフラと一杯気分になりながら、踊りの輪から出て来て、自分の席に戻って来た。そしてまた一杯とやり始めたとき、ふとその手を止める男がいた。

気が付いて顔を上げると、それはボンバル先生だった。

“あら先生”とレオノールは言った。“先生は向うで、アコーデオンを弾いていたんじゃないんですか。今も、わたしの耳には、その音が聞こえていますかね”

“少し飲み過ぎじゃないですか”と、ボンバル先生は冷静にレオノールを見つめながら言った。“今は父兄の方とお子さんのことについてお話しをさせてもらっているところなんです。アコーデオンはもうとっくに別の方にお代わりしてもらっています。分かりましたか、フローバさん。今度はあんたの番なんです”

“わたしの番ですって？”と、レオノールはうつろな目を先生に向けながら言った。“わたしは何をすればいいんです？”

“ですからさっきも言いました”と、先生は言った。“リディアの進路についてです。あなたはどうお考えか、それを聞かせていただきたいんです”

“ああ、そのことですか”と、レオノールは言った。“わたしとしましてはあれを上为学校に行かせたいのはやまやまなんです...”

そう言ってレオノールは、また一杯、グイッとひっかけた。

“でも、家の経済がとても持ちません。それに、家には人手もいることですし”

そこまで言ったとき、先生の表情は急に険しくなった。

“それじゃあなたは、リディアさんをもう上級の学校へは行かせないと、そうお考えなんですか”
ボンバル先生は、激しい口調で言った。“それはいけません！ 絶対にいけません！”

その激しさに圧倒されてか、レオノールは少しうろたえたようになった。

“いや、そういうわけじゃ”と、レオノールは弁解めいて答えた。“ただ、リディアが上に上がるには、家の経済が持たないと...”

“その点は、さして心配はございません”と、先生は落ち着きをとり戻して言った。“リディアさんはなかなか優秀な生徒さんでおられる。フルートもあの通りですが、勉強の方もなかなかのものです。そして何よりも、本人自身、もっと勉強して、上の学校を目指したいと希望しておられるようです。だからどうか、その希望をかなえてあげてやって下さい。これは、わたしからのたっのお願いです。リディアさんは、上の学校へ進学すべきです。彼女には十分、その素質があるのです。経済が心配だと言われるのなら、奨学金を受けられればよいでしょう。優秀な生徒さんにはそれが受けられますし、リディアさんには十分、その資格があります。今の實力なら、市内で十番以内に入るのは確実なんです”

“十番！”とレオノールは言って、驚いた。“うちの娘が、市内で十番、なんですか？”

“実はここだけの話しなんです...”と、先生は急に声をひそめて言った。“実は、リトイアの中等学校へ進学するのに、奨学金を受けられるのは、市内で十人だけだと決められているんです。そしてその十人はもちろん、成績の優秀な者から順番にです。だから、その十番以内に入るのが是非必要なんです、リディアさんの今の成績から言えば、その中に入るのは確実です”

“本当ですか？ 先生”レオノールは驚き、もう一度、念を押すように言った。

“ええ、国語、算数、地理に理科、音楽、体育、どれをとっても人並み以上の成績を納められています”と、ボンバル先生は落ち着いて言った。“わたしとしてもここ数年というもの、こんな生徒にお目にかかったことがありません。たいていの場合、進学を希望される場合、あなたのように家の経済状態を問題にするんですが、あの子に限って、その心配だけはないんです。これはまれなケースです。あなたは幸運なお子さんを持ちなすった。だから、このチャンスを逃してはなりません。あの子は進学することによって、きっと立派なお嬢さんに成長して行くことでしょう。――でももし、成長の根を今のうちに刈り取ると言いなさるのなら、それは実に不幸なことになります。あなたにとっても、この私にとっても、それは不幸なことです。あの娘さんは、この村にとどまるべき娘さんじゃないんです。大きく、世界に向かって羽ばたいて行くべき娘さんなのです...”

レオノールは、じっと考え込んでいるようだった。レオノールの考えでは、リディアに上級校への進学は必要でない、という意見だった。勉強を趣味としてやるのは一向かまわない。音楽をたしなむのもいいだろう。だがそれはあくまでも趣味としてであって、学校へ行かれるのは困るのだった。家では、主婦に当たる者がいなくて、リディアが唯一その代わりだった。

だから、義務教育の小学校さえ卒業すれば、すぐにでも家の用事に専念してもらいたかったのだ。それに、リディアが、家を遠く離れて羽ばたいて行くなどは、とんでもないことだった。レオノールは、リディアを溺愛していたし、少しでも手放したくはなかったのだ...

“どうです？ フローバさん”と、ボンバル先生はもう一度、念を押した。“よろしいですね。わたしの意見に同意して下さいますね”

レオノールは、ワインの入ったグラスを見つめながら、放心したように、ただ一度だけがっくりとうなづいた。

同時に、ボンバル先生の表情は急に明るくなった。

“よろしい、これで何もかも決まりです”と、先生は言った。“フローバさん、よくぞ決心して下さいました。リディアさんの為にも、そしてわたしからも、心から感謝させていただきます。その決心が、実に寛大で、正当なものであったかが、後になって分かることでしょう。ホラ、あなたの娘さんはあんなに楽しそうに踊っていらっしゃる。実に、らいらくそのものです。その芽を摘み取ってはなりません。その芽を、どんどん伸ばしてあげるべきなんです。それじゃどうも、きょうは済みませんでした”

そう言って、先生がその場から引き下がろうとしたとき、踊り終わったリディアが引き上げて来た。リディアは、先生を見るなり、

“先生もどうですか？”と、踊りを誘った。

“そう、有り難いのだが...”と、先生が迷っているうちに、急にアコーディオンの音楽がテンポを速めて、踊りの輪が解けた。

それぞれが教室の端に退いて、みんなは手拍子を始め、まん中では小さな女の子が交替で可愛い踊りを披露した。

何人かの踊り手が交替した後、そこへ飛び入りで踊りに参加したのは、なんとまたあのレオノールだった。観客席は、レオノールが酔いに任せた踊りを披露すると、一段と大きな手拍子で盛り上がった。

リディアは、そんな父親の姿を見て、少し恥ずかしい気がした。いくらなんでも少しやり過ぎだという気がしたからだった。だが本人は、リディアのそんな気も知らないで到って満悦そうなのだ。時々奇声を発したり、ときには足がからまってこけそうになったりしながら、そのたびに爆笑を買ったが、ようやく踊り疲れてリディアのところへ戻って来た。そしてこの至極ご機嫌な父親は、今度は、いやがる娘の手を無理やり引っ張るのだった。

“リディア、今度はお前の番だ。お前の踊りを、父さんに見せておくれ”

リディアは余り気乗りはしなかったが、仕方なく中央に立った。そして、音楽に合わせて踊り始めると、これまた一段と大きな拍手が沸き上がるのだった。

半袖の、薄いブルーのドレスを身につけ、手を腰に当てると、一生懸命踊りのステップを刻んだ。周囲にいる観客たちは、リディアの、その可憐な、しなやかな踊りぶりに、ただ見とれるばかりだった。リディアの、ふさふさした髪の毛と、ひだのついたスカートとが風を切って舞い

、ソックスをはいた可愛らしい足が宙を飛び跳ねた。

そんなリディアの踊りを、一生懸命、食い入るように見つめていたのは、レオンだった。まるでその踊りにすっかり魅せられてしまったように、レオンの表情は変わることがなかった。

やがてリディアは、楽しそうに、表情に笑みを浮かべながら戻って来た。

“ああ、楽しかったわ”と言って、リディアは腰を降ろした。

中央ではまた別の子が、アコーディオンと手拍子に合わせて、踊り始めた。

“きょうは楽しかった”と、帰り道、リディアはレオノールに言った。“お父さんったら、みんなの前で踊ったりして。でも、なかなか面白かったわ”

“そうだろ？”と、レオノールは言った。“わしは正気だった。みんなを盛り上げようと思ってな。とりわけお前の為にわしは踊ったのさ”

“ところでお父さん”とリディアは言った。“わたしたちが踊っているあいだ、父さんは、先生と何か話していたわね。何を話していたの？”

“いや、なんでもないさ”と、レオノールは即座に言った。“単なる世間話で、もう話の内容は忘れてしまった。先生はなかなかよく気のつく、面白い人だね”

“わたしのことは出なかった？”と、リディアはなおも尋ねた。

“お前のことか？”と、レオノールは言った。“少しは出たよ。成績がいいとか、そんなことを話してくれた...”

“それだけ？”とリディアは言った。

“ああ、それだけさ”とレオノールは答えた。

リディアは不満そうに向うに顔を向けた。レオンが、そんなリディアを、心配気に見つめた。それでもレオノールは、顔色一つ変えなかったけれども、心の中ではまだ迷っていたのだった。先生にはついいい返事をしてしまったが、リディアを町の学校にやるなど、考えてもいないことだった。リディアを愛していたあまり、小学校を卒業しさえすれば、彼女にも家業の手伝いをさせ、ずっと手元に置いていたかった。だがリディア自身が――きっとそのことを承服せんだろう。そのことも、レオノールには分かっていた...

夕陽が美しく空を染める頃、三人は幸せな我が家に帰って来た。

家では、家畜や、猫のシロが、腹を空かせて、三人の帰りを待ちわびていた。

レオンとレオノールがさっそく家畜の世話にかかり、リディアはひとり、自分の部屋に戻った。

だが、自分の部屋に戻っても、レオノールが何も言ってくれなかったので、そのことが気になってならなかった。本を取り、机に向かって勉強をしようとしたけれど、少しも身が入らなかった。

しばらくして、仕事の合間をぬって、レオンがリディアの部屋に入って来た。服はまだ汚れたままだった。

“リディア、心配しているんだろ？”と、レオンが言った。“なんならぼくの方から、父さんに、本当のことを聞いてみようか？ もしダメだっていうのなら、ぼくが反対してやるよ。父さんは何も分かってないんだ。リディアは、上の学校へ行くべきだよ。しっかり勉強を積んで、ぼくとは違って、出世をしなくっちゃ... ねっ、ぼくが言うってみる”

そう言うなり、リディアが止めようとするのも聞かずに、レオンは下へ駆け降りて行った。

しばらくして、再びレオンが部屋にやって来たとき、レオンの表情は明るかった。

“リディア”とレオンは言った。“よかったね。父さんが、うんと言ってくれたよ。リディアの分まで、ぼくも仕事の方を頑張ると言ったら、もう分かったよ、だって。その代わりに、成績が落ちればすぐやめさせる、とも言っていた。厳しいね。でも一一ともかく、進学おめでとう...”

“ああ、レオン！”と、リディアは、椅子を蹴って駆けつけた。そして、レオンの服が汚れているのもかまわず、抱きついた。“ありがとう、嬉しいわ。何もかも、兄さんのおかげよ。わたしも、兄さんの分まで勉強するわ。そして、うんと勉強して、いい成績をとって、そして今に... ねえ、この恩は忘れないわ。いつかきつとこの恩を、兄さんに返らせていただくわ”

“いや、何もそんな”と、レオンは謙遜して言った。“これは、父さんがいいと言ったんだから、父さんに感謝すべきだよ。ねえ、後で礼を言うんだよ”

“ええ、分かっているわ、兄さん”と、リディアは、レオンの目を見て言った。“一一でも兄さん、わたし大好きよ...”

その翌日、リディアは、生涯でも最も幸せを感じた日の一つだった。

みんなの朝食を終えると、レオンは家畜の世話に戻り、レオノールは、村の伐採場へと向かう。リディアも、後片付けを終えてから、その二人に手を振りながら、村の学校へと向かった。これで最後にならない学校。今度からは、リトイアの中等学校へ向かうことになる。通学が、これまでと違って大変になるけれども、小学校へ向かうリディアの目は、早くも次のステップの学校に向かって、生き生きと輝いて見えるのだった...

その年、リディアはサビーノの小学校を卒業して、リトイアの中等学校へと進学することになった。村の小学校から進学したのはリディアただ一人だけであって、他の友だちはみな、家業の手伝いとか、町工場への就職とかで、バラバラになってしまった。ただ、親友のポーラが、リトイアの紡績工場に働きに行くことになり、二人が同じ方向へ向かうことが、なにかしら、リディアには嬉しかった。

そしてまた登校が始まって間もない頃、村を少し出たところで偶然にも自転車に乗っているポーラに、リディアは出会った。

“あら、あんたも自転車なの？”と、リディアは先を走っていたポーラに声を掛けた。

前を走っていたポーラは振り向いた。

“あら、リディア！”と、ポーラは驚いた顔をして言った。“あんた、上の学校へ進学したんだってね”

“そうよ”と、リディアは、自転車の前に鞆を下げて得意気に答える。

“よく受かったわね。なかなか難しいって話だったのに。私立ならともかく、公立の方でしょ”

“ええ、なんとかね”と、リディアは笑顔で答えた。“でも、あんたは、バスじゃなかったの？”

自転車に変えたの。あんたは最初から自転車？”

“ええ、自転車の方が好きだから”と、リディアは答えた。“時間は確かにかかるけど、こうして風を切って走るのが好きなの。それに、この道だって、とってもいいわ。森がずっと見えていて、川沿いに道は曲がりくねっているし、ところどころきれいなお花も咲いている。そんなのを見ながら走れるって、幸せよ。あんたはきょうが初めてなの？”

“いいえ、三回目”と、ポーラは答えた。“でも、リトイアに着いたときは、本当にくたくたよ。またバスに戻りたいと思うぐらい...”

“わたしは疲れなんか感じないわ”と、リディアは言った。“だってこんないい道、いくら走っていても飽きないもの。ねえホラ、あの川の流れが素敵でしょ”

道から河原までそんなに距離はなかったが、蒼々と草におおわれた土手が、細く蛇行しているきれいな小川にまで落ち込んでいた。道の反対側の斜面は、ずっと森におおわれていた。川に落ち込む土手のところどころには、可憐な花々が咲いていて、リディアはふと足を止めてみたくなることもあった。

“でもわたしには、同じ景色に見えるわ”と、ポーラは、余り関心を示さずに答えた。“あんたはいつでも元気なのね”

リディアはそれには答えず、黙ったまま、ポーラと並んで走った。

“それで、学校の方はどうなの？”と、ポーラも、並んで走りながら尋ねた。“友だちとか、うまいこと行ってる？”

“なんとかね”と、リディアは答えた。“――でも、勉強の方が、以前に比べて、少し難しいわ。あんたの方はどうなの？”

“分かってるでしょ”と、ポーラは、余りいい顔をしないで答えた。“毎日、同じ仕事ばかり。――でもね、似た境遇の子がたくさんいて、結構話しが合うの。そのうち、わたし、住み込みにしようかとも思ってるの。――でも、何よりも楽しいのは、給料がもらえるっていうこと。こんなの初めてよ。お金があれば、自分の好きなものが買えるわ。もちろん親は、貯金しなさいってやかましく言うけど、自分も一部取り上げていながら、さらに貯金だなんて。だったらわたしの生活費なんて、ほとんど残らないじゃない...”

“でもいいわねえ、給料だなんて”と、リディアは羨ましそうに言った。

“あんたは相変わらず、親からの小遣い生活ね”と、ポーラは言った。

“本当は働きたいんだけど...”と、リディア。“――でもそこまでとても余裕はないの”

“ところであんたのお父さん”と、ポーラは急に話題を変えて言った。“ヒドい噂が入ってるけど、あれ、本当の話なの？ 所長の奥さんに手を出して、所長さんとすごいけんかになったって。それ以来、仕事もろくすっぽ行かないで、お酒とバクチに精を出しているってそれ本当？”

すると、リディアは、急に暗い顔になった。

“本当なの”と、やがて暗い顔のまま、リディアは答えた。“所長の奥さんに手をかけたかどうかは知らないけど、大げんかがあったのは事実よ。それ以来、仕事には行ってるけど、帰りが遅くなったのも本当なの。いつも酒の匂いをプンプンさせてね。だから、家のきりもりはレオンひとりに任せているの。あのままじゃ、レオンが気の毒よ。父さんったら、本当に困った人...”

“フーン、あんたも色々と悩みを持っているのね”と、ポーラは同情したように言った。“でもお互い、行く道は違ってても頑張りましょうよ。あんたはとくに、わたしにはない頭を持ってるんだから、これからもうんと頑張るってね。わたしのできなかった分まで、うんと勉強してね。そして、偉い人になってよ”

“できるだけことはするつもりよ”と、リディアは、にっこりして答えた。

そんな会話をかわしながら、二人は、片側に小川が流れ、片側が森になっている曲がりくねった田舎道を、さわやかな風いっぱい受けながら、駆け抜けて行った...

約一時間の行程で、二人はリトイアに来て、手を振りながら、それぞれの持ち場へと別れて行った。リトイアは、サビーノの今の家に来るときに最初に立ち寄った町だったが、それ以来、何度か来る機会があったものの、こうして毎日通うようになったのは初めてのことで、新鮮な気がした。山ふところの盆地の、深い森におおわれたところで、少し開けたところに家々がぎっしり立ち並び、そこには、工場も、マーケットも、湯治場も、そして教会も学校も、すべてが詰まっていた。なかなか落ち着いた、ふんいきのある静かな町で、リディアは、この町へ通い出すなり、この町がたちまち気に入ってしまった。

この町に来ると、サビーノが、いかにのどかで、田舎で、町から取り残された存在か、ということがよく分かるのだった。それでもリディアは、自分を育ててくれたサビーノの村も、また大好きだった。その間には長い距離が横たわっていたけれども、リディアは、両方の愛すべき町と村とを持つことができ、幸せだと感じた。

ポーラの通う紡績工場が山手の、比較的町から不便なところにあっただのに比べて、リディアの通う中等学校は、町の中心にある教会のすぐ近くにあった。その学校には、方々の村の優秀な生徒ばかりが集まって来ていて、中には、通うことができずに寄宿生活をしている子もいた。リディアもできれば寄宿生活がしたかったのだが、家の経済がそれを許さなかった。中等学校に集まって来た子は、確かに小学校のときの子とは違う、とリディアは感じた。洗練された子もいたし、話し方の違う子もいたが、とりわけ顕著なのは、どの子も優秀な子だということだった。リディアは、そんな子供たちの仲間に入れたことが誇らしい気もした。しかし反面、勉強の中身は、難しくなる一方だった。

生徒たちの中には、気安くて友だちになれそうな子もいたが、それに比べて、先生の方は冷たそうで今一つだった。前のボンバル先生のような気安さはなく、リディアは、中等学校に通った後も、早くサビーノの村に帰って来たときなど、まだ小学校の職員室に残っているボンバル先生のところに訪れることもあった。そんなとき、ボンバル先生は喜んでリディアを迎え入れてくれた。学校での生活のことを色々としらべ、ときには難しい宿題を、リディアに代わって解いてくれることもあった。リディアにとって、ボンバル先生は、村で唯一頼れる存在だった。勉強ばかりではなく、生活全般について、何かとしらべ、ボンバル先生に相談した。

一方、レオノールのことは、リディアにとっても頭痛の種だった。それは何よりも真先に、経済の貧窮という形で、リディアに襲って来た。レオンの働きだけではとってまわって行けず、リディアは、学用品の購入にも事欠くこともあった。

リディアは、賭博と酒をやめさせようと、学校から帰ってから、それらしい場所へ走って行くこともあった。一度父親を見つけて連れて帰ろうとしたとき、逆に、レオノールに怒鳴られてしまう始末だった。それで、そのことを、ボンバル先生に相談に行ったが、先生の努力にも限界があった。結局は、いたちごっこをくり返すだけで、手に負えないと、リディアはあきらめざるを得なかった。

しかし、このことはリディアの生活に影を落としたが、それで勉強がおろそかになるということとはなかった。

そして、最初の学期の終わりに、リディアが非常に優秀な成績を納め、学内で一番の成績をとったという話しが、サビーノの村にも伝わった。村人たちは改めて、あの村はずれの農家のまるで天から降って下りたような少女に、思いをめぐらすのだった...

それから三年の月日が流れた...

リディアはもう十六になっていた。十六になって、本を胸に抱えながら、山裾にあるリトイアの町はずれの高等学校の並木道を歩くリディアの胸には、色んな思いが宿っていた。何よりも嬉しかったことは、この年、一番の成績でこの高等学校に進学できたことだったが、そこに至るまでの三年の月日の努力が、今となっては、まるできのうのこのように思い出されるのだった。その背後には、二つ年上の兄レオンの力があったことを、リディアは決して忘れたことはなかった。

深夜遅くまで勉強し体をこわしがちだったリディアを、夜遅くコーヒを持って見舞いに来てくれたのは、いつもレオンだった。彼も、昼間の目いっぱいの仕事をして疲れていたにもかかわらず、試験に備えて夜中まで勉強するリディアに、優しく励ましの言葉をかけてくれた。

“家のことは心配ないからね”と、彼は言うのだった。“なに、ぼくがちゃんと面倒をみてあげるよ。父さんの分まではできないとしてもだね、リディアは、家のことは心配せずに勉強すべきだよ。なんたってお前は、ぼくの出来のいい妹なんだもの”

“有り難う、兄さん”と、リディアは、疲れた頭を、窓の外の星空で癒しながら言った。“この御恩は決して忘れないわ。本当にわたし、兄さんがいなければどうなっていたか... あのお父さんじゃ、全然頼りにならないもの”

“オヤジのことは忘れろよ”と、レオンは言った。“仕事だって順調なんだから。オヤジはオヤジで勝手にやるがいいさ。今やオヤジは、居候みたいなもんなんだからな。オヤジに家の仕事を任せるわけには行かないさ...”

“兄さんって、本当に好きよ”

そう言ってリディアは、レオンの手を取って、その甲にキスをした。

“その言葉だけでぼくは嬉しくなるんだ”と、レオンは言った。“さあそれじゃ、覚めないうちにコーヒを早く飲みなよ”

“有り難う、レオン”リディアはそう言って、暖かいコーヒを心行くまで飲んだ。

一方、父親のことは頭痛の種だった。

リディアは父親を愛していたが、仕事も休みがちで賭博や酒におぼれて行くレオノールに、忍耐の限度のようなものを感じていた。ここ数年というもの、鼻歌まじりで夜遅くレオノールが帰って来てそのまま寝込んでしまうという日がよく見られた。賭けで儲けたときなどは気前よくリディアにドレスの一つでも買ってくれるときもあったが、逆に負けたときは文なしだった。ただ、レオンのかせぎまでは手をつけることができず、レオノールは自分の稼ぎを自分で精算していたが、その為にかせぎに家に入れるということはほとんど無いに等しかった。

昨年秋、リディアがまだ中等学校に通っていた頃、学校で授業を受けていたときに、突然一人の男が教室に現れてリディアを呼んだ。

聞くところによると、レオノールが伐採現場で大きな事故にあって、そのまま病院へ運ばれたので、すぐ駆けつけるようにということだった。かなりの事故だったのでけがの程度も大きく、リディアは驚いて同じリトイアにある病院へ駆けつけて行った。病院には既にレオンがいた。父親は重症で意識はなかったが、幸い一命を取りとめたことを聞かされ、リディアはなににもあれほっとした。レオノールは、倒れて来る木の下敷になったのだということだった。おかげで足を砕かれ肋骨も折っていた。彼は病室で、ヒドイ姿で寝込んでいた。――その日から、レオノールの長い入院生活が続いた。

約二ヶ月の入院の後、レオノールは退院したが、もう伐採現場で働くのはコリゴリだと言い出し、退院後もしばらく家でブラブラしていた。そのうち、レオンがただ一人で世話をして来た家の仕事を、レオノールも手伝うと言い出し、二人でその仕事を始めたのはよかったのだが、そのやり方をめぐって、レオンとレオノールの意見とがことごとく衝突して、いさかいが絶えなかった。だが、もともとの権利は父、レオノールの方にあり、レオンはほとんど疲れ果て、やめたいとさえ口に洩らすようになった。事実真剣にやめて別の仕事を捜すことを考え始めたのだった。

レオンは、リディアのおかげで読み書きをひと通りマスターすることができた。すると、もともと向上心の強かったレオンは、何か自分に向いた仕事は他にないかと、レオノールが戻ってから、それこそ真剣に捜し始めた。そしてあちこち捜したあげく、ついに、自分に合った仕事を、リランに見い出した。本当はリトイアで働く意向を持っていたのだが、もともと小さな町で就職口は難しく、彼の願いにかなった仕事は、大都市リランにしかなかった。

そしてその話しを、リディアは、つい昨日聞かされたばかりだった。

リディアが、自分の部屋で勉強していたとき、レオンがいきなり部屋に入って来た。

“リディア”と、突然彼は言った。“ぼくは決めたよ。ぼくはリランに行く。いい就職口が見つかったんだ。大工の仕事だよ。昼は見習いの仕事をして、夜は専門学校に通うつもりさ。大変だけどぼくは決めたんだ。――家の方は大丈夫さ。オヤジがなんとかやってくださるからさ。それに、お前の生活費だけれど、ぼくはできるだけ仕送りはするつもりだ。足りない分は、オヤジにみてもらおう他ないけれど、これまでよりは少しはいい生活ができるはずなんだ...”

“兄さん、本当に行くの”リディアは、少し悲しい気がして言った。

“ああ、お前と別れて暮らすのは辛いけどねえ”と、レオンは言った。“でも、もうこれ以上、オヤジとは暮らせないよ。全然意見が合わないんだから。あの家畜は、持っているのはオヤジかも知れないけれど、立派に育てたのはこのぼくだということを忘れてもらいたくはないな。でも、オヤジがあくまでも続けるといふのなら、ぼくがやめるしかなかったんだ。なあと心配はいらない。お前のことも、ぼくのことも、ちゃんとうまくやってく行けるさ。――でも本当に楽しかったよ。お前といわれたことがね。リディア、君に文字を覚えてもらったおかげで、今日のぼくがあるのさ。覚えているかい？”

君が初めてぼくに文字を教えてくれたときのことを。あのときはどんなに嬉しかったことか。勉強なんて縁がないと思っていたのに、可愛い、美人の君がだよ、本当に親切に教えてくれたんだもの。ぼくは、あのときの感謝の気持ちを一生忘れないよ。だから、その恩返しのつもりでも君にはちゃんと、勉強して行ってもらいたいんだよ...”

“ああ兄さん...”と言って、リディアは、そんなレオンを抱き寄せた。“それで、いつ行くつもりなの？”

“明日さ”と、レオンはきっぱりと答えた。“先方も、いつまでも待ってはくれないんだ。すぐにでも働き手がいるもんでね。しばらくは帰って来れないと思うけど、でもそのうち、ときどきはこの家に帰って来るつもりさ。だって、早くお前の顔が見たいものね”

リディアは、その言葉で、ショックの余り、身がすくむ思いがした。本当の兄ではなかったかも知れないが、リディアはやはりこの兄を愛していたし、その兄がいないとなるとやはり急に寂しく思われるからだった。家にはなおレオノールがいたが、レオノールでは話しにならなかった。リディアは今では完全に兄の方へと心が傾いていたのだった。なのに、その兄が突然いなくなるなんて...

しかしリディアは、沸き上がる涙を押し殺しながら、レオンの手の甲にキスをした。

“兄さん、じゃそこで待ってて”そう言うと、リディアは自分の筆筒にしまってあった、大事なレース編みのハンカチを取り出した。

“これ、兄さんにと大事にとってあったのよ”そう言って、リディアは、ハンカチをレオンに差し出した。“これを持って行って、ときどき汗を拭くときなど、わたしのことを思い出してよ”

“ああリディア”レオンは、それを受け取ると、リディアの手を握り、彼女を引き寄せた。“君はいつ見てもきれいだね。ぼくにはもったいないような妹さ。でも、運命のいたずらで、ぼくらは引き合わされたんだ。君が、ぼくの妹になることになって、本当によかった。あんな嬉しかったことって、なかったよ。初めて君と会ったとき、ぼくは自分の目を疑ったぐらいだ。本当に、こんなにきれいな子が、自分の妹になるのかって。――でも君は頭も良かったし、ぼくはずっと引け目も感じて来た。でも、そんなことって、もうどうでもいいよね。君は今こそ、ぼくの本当の妹だよ。そして、そんな妹を持つことができ、ぼくは誇らしい気持ちさ。時には、ぼくの勤める事務所まで訪ねに来ておくれよ。ぼくは誇らしい気持ちで、君をみんなに紹介してあげるからさ。ああ、しばらくの別れになって、本当に残念だけど、ぼくは君のことを、いつまでも愛しているよ。ああ、リディア、大好きだよ...”

そう言って、レオンは、リディアの頬に、いまだかつてなかった強さでもって、キスをした。

勉強の疲れの後、リディアは散歩をしようと言って家を出たが、散歩をするには余りいい天気とは言えなかった。空は曇っていて、今にも雨が降りそうな天気だった。

でも、そのどんよりした天気は、リディアのそのときのしめった気持にピッタリとしていた。こんなとき、リディアがよくやって来たのは、山裾にある人気のない寂しい小さな池だった。そこへ入って行くには、人為的な鉄の柵がしてあったが、いつのものかは分からず、今では行き来は自由となっていた。ギッーとうなる鉄の扉をあけて、茂みにおおわれた庭と、その向うにひそかに見える池のあるところへと、リディアは悲しい気持を抱きながらひとり向かった。

池は人気もなく、ひっそりとそこにあった。対面の小高い山の上空は、すっかり雲におおわれて、今にも雨が降り出しそうだった。リディアは、ぼんやりと、何がいるかも分からない池の水面を見つめた。それは、不思議な静けさで、リディアを魅きつけた。そして思い出した。こんな気分のとき、いつかこの池にやって来たことがあった。そうだ、あの猫を失ったときがそうだった。リディアは、今もはっきりと、レオンから受けたキスの感触を、自分の頬に感じていた。その幸せな気持を抱いたまま、いつそのこと、この池に身投げをしようか――そんな気さえ、リディアはした。そう、自分の身にふりかかるすべての苦しみを精算する為に、ここで死ぬことができたなら、どんなに楽なことだろう。もうここで自分の人生は終わるのだし、これまで生きて来た様々な出来事や思い出までも、これできっちりと精算することができるのだ。そんな自分の死体を見て、兄レオンやレオノールはもとより、村人たちはどんなことを思うだろうか？ そんなことを想像してみたりもした。――でも死んだわたしは、天国で、パパやママと、そしてあの猫と、幸せに暮らすことができるのだ...

しばらくのあいだ、寂しさと悲しさで、そして、自然に宿る霊のようなものとの、孤独のうちに対面した後、リディアは生きる決心をした。何んの為、そして、誰の為かは分からなかったが、とにかく力強く生きようと、リディアは決心した。たびかさなる逆境にくじけてはいけない！とリディアは思った。

池のある神秘的な場所を去って、再び家路を急いだ。帰る頃には、小雨がパラついて来た。

家に帰って来たとき、窓から心配そうに外を見張っていたレオンが、玄関に駆け降りて来た。“どこへ行ってたんだよ。心配したよ”と、レオンが、少し雨にぬれたリディアを見て言った。“なんでもないの。勉強に疲れて散歩に行っただけよ”とリディアは答えたが、自分の心に浮かび上がった様々な陰影については伏せることにした。

“そうかい。それならいいんだけど...”

レオンはそう言いながら、自分の部屋へと戻って行った。

宣言通り、レオンは翌日、まだレオノールが眠っているうちに、家を出て行った。

レオノールには一言も言わず、心配そうに見守るリディアには、別れのあいさつをかわしてから。

その日は、昨日とは打って変わったようによく晴れた日で、家を去って行くレオンの姿が、木の葉のざわめきや、青い空に浮かぶ真白な雲の美しさとあいまって、リディアの目には、一層鮮やかに、また美しく映るのだった。リディアは、家の外の道に出て、いつまでも、いつまでも、レオンに向かって手を振り続けた。

しばらくしてから、レオノールが二日酔いの状態から起き出し、やがてレオンがいないことに気が付いた。レオンのことをリディアに尋ね、リディアが正直にレオンが出て行ったことを告げると、いきなり頬を、レオノールにぶん殴られた。なぜ止めなかった、とどなられながら。リディアは黙ってその痛みをこらえた。それからしばらくして、リディアは思い直したように学校へ出かけて行った。

“ねえ、なにをぼんやりと考えているの？”

リディアは急に話しかけられて振り向いた。見ると高校に入ってから急に親しくなったキャシーだった。彼女も腕に教科書をかかえている。

校舎へと通じる並木道は素晴らしいもので、そこからさし込む日射しも、とても快かった。

“なにね、ちょっと”と、リディアは答えた。

“でも、元気がないわ。どうかしたの？”とキャシーはなおも言った。

リディアはとうとう言う決心をした。

“実は兄さんが、家を出て行ったの。けさ早く...”

“本当？ またどうしてよ”と、キャシーは尋ねた。

“家で、父さんと意見が合わなくなったからよ”と、リディアはしんみりと答えた。

“本当にわたしの家って、どうしてこうも不幸続きなんでしょ”

“同情するわ、あんたに”と、キャシーは慰めてくれたが、そんな言葉など、リディアにはなんの慰めにもならなかった。

二人が揃って校舎に歩いて行くと、脇道では、数人の男子生徒がひやかすように彼女たちを見つめていた。

“おい、べっぴん。いつかデートしようぜ”

誰かがそんなことを言ったが、二人はかまわずに先へと歩いて行った。

授業中もリディアは、家のことが心配で、集中することができなかった。

それで、鉛筆を持ったまま、鉛筆を指でくるくる回しているだけで少しも講義の内容をノートにとっていないのを鋭く先生に見つかり、それを指摘される場面もあった。リディアはハッと我に返り、あわててノートを取り出した。

そのせいか、帰りに先生に、職員室へ来るように言いつけられた。

授業が終わってから、リディアは、おずおずと職員室に向かった。

先生は、椅子に腰掛けて彼女が来るのを待っていた。

“ああリディアかい。そこにお掛け”と、やって来たリディアを、先生は隣の椅子に坐らせた。

“君のことは聞いている”と、先生は、間を置かずに話し出した。“家に経済的余裕がないことはね。でも、きょうのあの態度はいけないな。何か考え事をしていたね。何か心配事でもあったのかい？”

“いいえ、別に”と、リディアはごまかした。

“そうか。じゃ、話題を変えよう”と、先生は言った。“君は将来、どういう方面に進みたいと思っているのか、希望を語って下さい”

“わたしの将来ですか？”と、リディアは驚いたように言った。

“そんなの、特に具体的なイメージはありません”と、しばらくしてから、リディアは言った。“でもただ、勉強して大学に行きたいとは思っています。大学に行けば、もうこの小さな町や村にいる必要はなくなりますし、もっと視野の広い人々と出会うこともできると思いますわ。わたしの思っていることはそれだけです...”

“なるほど、そうですか”と、しばらく考え込んでから先生は言った。“でも、余りにも漠然とした目標ですね。例えば、わたしはこういうことをやってみたいとか、こういう研究をしてみたいとか、そんな目標はないんですか？”

“もちろん夢はありますわ”とリディアは言った。“わたしは、自分の人生を無駄にしたいくはないんです。これは、生意気と思われるかも知れませんが、小説のように歩いて行きたいと思っています。素晴らしい人生を歩んで、後で振り返っても、ああこれでよかったと思えるような人生をね。その為には、いろいろとやらなければならぬことはやるしかないですわ”

“ほお～、なかなか面白いことを言うんだね、君は”

と先生は、微笑みを浮かべながら言った。

“いや、よく分かった。もう帰っていいですよ”

先生はそう言って、リディアを職員室から送り帰したが、このときのリディアの発言は、このときのリディアの夢や、生活状況のすべてを言い表していたと言っても、決して言い過ぎではなかった。

リディアは、素晴らしい人生を歩もうと願っていたし、ただそれだけを願っていたのだった。

そういう彼女に襲いかかる様々な逆境は、彼女の歩もうとしている道に立ちはだかる障害物でしかなく、決して彼女の歩みそのものまで押しとどめることはできなかった。

家では、レオノールは家畜の世話をしていたが、酒びたりと賭博の生活は相変わらずだった。リディアはこの父を、いつしか、心の底から憎むようになっていた。そして帰って来ると、この父とはできるだけ会わないようにし、ひたすら自分の部屋で夢を見続けていた。いつか自分が、こんな生活ではなく、誰か素晴らしい人と出会い、まるでシンデレラのような生活ができる日が来ることを...

それから数ヶ月ほど経ったある日、リディアは一人の男と出会った。

名は、モーリー・オークレーと言い、リディアよりは二年程上の学生で、トランペット吹きだった。

リディアはいつも静かな川沿いの、土手道を自転車で駆けて、学校に通っていたのだったが、気候がよくなって来ると、学校近くの土手の木陰で、決まってトランペットの練習をしている一人の男の姿を、放課後、よく見かけるようになった。この道を利用して帰る生徒は少なかったため、そのうちリディアは、この出会いを、何か運命的なもののように感じるようになった。そして何度もすれ違っているうちに、まだ一度も話したこともないにもかかわらず、この男に対する関心は、日増しに強くなって行くのだった。

そしてこの日もまた、期待に違わず、男はいつもの木陰で、トランペットを吹いていたが、それは素晴らしい音だった。トランペットがこんなにいい音色だとは、これまで全くリディアは知らなかったのだ。

リディアはつい、その音色に聞きほれて自転車を止め、その男のそばに歩み寄った。

男は、トランペットを吹くのをやめなかったが、その目は、やって来るリディアの方に向けられた。リディアが近付いて来ると、男はトランペットを口から放し、リディアに声を掛けた。

“やあ、君だね。いつもここを通って帰って行く子”

“そうよ”と、リディアは微笑みながら答えた。“あんた、トランペット、上手ねえ。もう長い、練習をしてからは”

“一年生になってからさ”と、男は答えた。“何かひとつでもいいからやれるものを持とうと思ってね、トランペットに決めたのさ。君は、最近見掛けるようになったけど、一年生なの？”

“そう、今年入って来たばかりなの”と、リディアは答えた。

“そう、いつも通り過ぎて行くので気にはなってたけど、まさか声を掛けて来るとは思わなかった”

リディアも、男のその言葉で笑った。

“でも、とっってもうまいわ。聞きほれてしまって、ついね”とリディアは言った。“今ほどの腕前なら、もう人前で演奏しても大丈夫でしょ。十分通用する演奏だわ”

“いや、まだまださ”と、男は言った。“ところどころ指が動かなくてね。ときどきいやになって投げ出してしまいたくなることもある。――でも結局のところ、ぼくにはこれしかないんだ。ぼくの夢は、将来これで町に出て、いろんな町を演奏して回ることなんだ。でも、そんなことができるには、まだまださ”

“へえ～、すごいわねえ”と、リディアは感心して、目を輝かせながら言った。

自分と同じようなことを願い、成そうとしている人に出会ったのは、これが初めてだった。その驚きは大きく、感激も大きかった。

“ねえ見せて。トランペットって、こんな楽器だったの。目の前で見るとは初めて”

男がしぶるのもかまわず、リディアはさっさとそのトランペットを手にとりて見た。トランペットの金色の輝きや、手ざわりは素晴らしいものがあった。

“君は何か、楽器は弾かないのかい？”と、やがて男は、それとなく言った。

“実は、フルートを少しね”と、リディアはそれとなく答えた。“でも小さい頃は、ピアノもやっていたの”

“そう、じゃ、ぼくよりか、歴史は古いわけだ”と彼は言った。

“でも、あんたのトランペットほどうまくは演奏できないわ”と、リディアは、正直な気持ちになって言った。“本当に、あんたのトランペットって、すごいもの”

“褒めてくれて、嬉しいよ”と彼は、素直に喜んでくれた。

それから二人は、お互いに名前を尋ね合った。出身地も尋ね合い、モーリイが、全く別の田舎からやって来て、この学校で寄宿生活をしていることが分かった。ほんの少しの出会いだったけれど、そのあいだに、二人はすっかり意気投合をしてしまった。リディアは、この人なら、自分の窮状を理解してもらえると考え、つい、自分が今置かれている境遇を語ってしまった。モーリイは、そのときだけ顔をしかめ、リディアの不幸な境遇に同情さえ示してくれた。モーリイは、田舎の出だったけれども、貧しくはなく、むしろ裕福とさえ言える地主の出身で、そのことがリディアには少し、羨ましく感じられた。でも自分だって、あの出来事さえなければ、裕福な家の出なのだと考え、そうして自分を慰めた。

“ねえ、あんたのトランペットって、本当にすごいんだから、うんと頑張る”と、リディアは最後に、そう励ました。“わたしも密かに応援しているわ。うまく行くようになって”

“君みたいなファンがいてくれて、嬉しいよ”と、モーリイは、笑顔になって言った。“でも来年は卒業だし、それまでに、自分の進路をはっきりさせておかなきゃね”

“そう、来年なのね”と、リディアは、ちょっぴり寂しそうに言った。

“それまでにぼくの寮に一度君を招待したい、と言いたいところなんだけど”とモーリイは言った。“残念ながら、ぼくの寮は女人禁制なんだ。禁を破れば追い出されちゃうからね。――でもいいや。こうしてときどき会おうよ”

その言葉を聞いて、リディアは胸が熱くなるのを感じた。

“またあした会っていい？”と、リディアは言った。

“もちろんだよ”と、モーリイは答えてくれた。

“じゃまたあした、この時間に”とリディアは、息を弾ませて言った。“家では早く帰らないと父さんがうるさいのよ。へたに遅れて帰ることがあったら、ぶんなぐられることだってあるの。女のあたしがよ”

“君って、よく我慢しているんだなあ...”と、モーリイは、同情的に言った。

“だって、他に行くところがないんですもの”リディアは悲しいけれど、そう言うしかなかった。それを、半分、微笑みさえ浮かべて、モーリイに言った。

“君って子が、ますます好きになりそうだ”と、モーリイは、自虐的な、そんなリディアの笑顔を見つめながら言った。

“じゃあ行くわ。さようなら...”リディアは、そう言って、置いてある自転車の方に向かった。

“じゃあ、またあしたね”と、モーリイは、そんなリディアを見送ってくれた。

自転車に乗る頃、再びリディアの耳には、あの快い、モーリイのトランペットの響きが聞こえて来た。快い、人を酔わせるような、夢を誘うような響きに、リディアはうっとりなってしまった。しかし、再びモーリイの方に振り向くことはなかった。熱い感動で胸がいっぱいになったリディアは、輝ける未来に向かって、自転車で力いっぱい駆け出して行った...

サビーノの村に帰り着いて来た頃、――もう村の空は、うっすらと夕陽が射し始めていたけれども、その美しいたそがれの雲を見つめながら、リディアの胸は感動でいっぱいだった。今となってはまるで夢の出来事のように、あのときのことが思い出されて来た。もう何度も見慣れた村が、そして、我が家が、向こうに見え出して来た。リディアは、いつになく弾んだ気持で家に帰って来た。

すると、入口のところで、バツタリとレオノールと会ってしまった。

レオノールは、厳しい目つきでリディアを見つめた。

“どうしたんだ？ きょうはいつもより遅いじゃないか”と、レオノールは言った。“せっかくお前に手伝ってもらおうと待っていたのに、また何かしでかしたんだろ”

そう言うなり、いきなりピシャリと、リディアの頬に平手打ちをくらわせた。

リディアは、余りの痛さに、思わず頬に手を当てた。と同時に、リディアは悲しくなって来た。帰って来るなり、こんな仕打ちなんて。リディアの目には急に涙があふれて来た。

“父さんなんて”と、リディアは言った。“父さんなんて、もう知らない！”

そう言うなり、リディアは涙を流しながら、二階へ駆け上がった。そして、二階の自分のベッドの上に体を伏せると、思い切り、大声を出して泣くのだった...

次の日、リディアは期待を込めて学校に向かった。

授業中も、実験室での、理科の実験中も、リディアは、放課後、あのモーリイに会うことしか頭になく、勉強に身を入れる気にはなれなかった。

“見なさい。すごいよ”と言って、先生が見せてくれた、顕微鏡観察での鉱石の結晶もリディアには、ただそれだけのものでしかなかった。

そして――いよいよ待ちに待った放課後がやって来た。

リディアは、友だちとは早々と別れ、晴れ晴れとした気持で、自転車に乗って、風を切って行った。

素晴らしい川原の土手道だった。土手道は樹木でおおわれ、木洩れ陽が、網の目のように、自転車に乗っているリディアに降り注いだ。穏やかな川の流れの表面には、さわやかな風のせいさ、さざ波が立っていた。するとやがて、――あの、哀愁を帯びたラッパの響きが、向うの方からして来るのだった。リディアの胸は、もうそれだけでも、ときめいた。

やがて、大きな樹の木陰でトランペットを吹いているモーリイの姿が見えて来た。

リディアは、自転車を脇道に放置するなり、勢いよくモーリイの下へ駆けて行った。

モーリイは、トランペットを吹く手をやめて、リディアの方に振り向いた。

“やあ、君かい？ やっぱり来たんだね”と、明るい表情で、モーリイは言った。

リディアは、本当は、彼の胸元に飛び込みたかったのだが、その気持を押しとどめて、彼のそばに立った。

“来たわ。約束通りにね”と、リディアは、嬉しい表情を包み隠さずに言った。“だって、今のところ、本当にあんたしか、あんたしかないもの。何んでも相談できそうな人が...”

“きのう会ったばかりなのに？”と、モーリイは、冗談めかせて言った。“きょうは、きのうと違って、一段と深刻そうだね。君の境遇のことはきのう聞いた。それがせっぱつまっているとでも言いたいのかい？”

“そうよ。あんたなら分かってくれるでしょ”と、リディアは言った。“きのう帰って来たら、さっそく父さんに殴られたわ。ホラッ、頬っぺのところが、まだ少しあざとなって残っているでしょ”

そう言って、リディアは、頬をモーリイの方に向けて、わざと近付けた。

モーリイは、言われるまま、リディアの頬を覗き込み、

“本当だ”と言った。“ほとんど分からないけどね、まだ少し残っている。それにしてもヒドイお父さんなんだなあ。君みたいな可愛い娘を殴るなんて...”

“でしょ”とリディアは言った。“この前なんか、わたしの髪の毛をひつつかんで振り回すのよ。痛って、なんの... そんな父さんと、これから何日も暮らさなきゃならないの。以前ならまだレオンがいて、御免、レオンって、わたしの兄さんのことなの。そのこともきのう話したわね。そのレオンと色々と話しもできたのに、今じゃ家では、もう誰とも話しができないわ。まるでわたしの家って、生き地獄みたい”

“そこまで深刻なのかい”と、モーリイは、今では、真剣な顔つきになって言った。“でもぼくだって、寮の生活だしねえ。そりゃ何かしてあげたいけど、今すぐどうのこうのって、できやしないよ”

“それは分かっているわ”と、リディアは言った。“今はただ、こうしてあんたと会ってるだけでも幸せなの”

“そうかい。そんな風に思ってくれるのかい？”と、モーリイもにっこりして言った。

“ねえ、何か一曲、わたしの為に聞かせてよ”とリディアは言った。“そう、さっき、ここへ来るまで聞こえていた曲がいいわ。あれ、なんていう曲なの？”

“ああ、あの曲かい？”と、モーリイは笑顔で言った。“「詩曲」って言うんだよ。チェコのそれほど知られていない人の作品。なかなか哀愁を帯びて、いい曲だろ。ぼくも好きな曲さ。じゃ、君の為に...”

そう言ってモーリイは、再びトランペットを口に当てると、力強く、しかし、繊細で、優しく、美しいメロディーを奏で、リディアは、しばしのあいだ、その力強く、歌うようなメロディーに、うっとりとなるのだった...

演奏が終わると、リディアは、モーリイに惜しめない拍手を送った。

“どうだい？ なかなかのもんだろ？”と、モーリイは、にっこりとリディアの方に向いた。“じゃあ、君の要望にお答えしまして、もう一曲、アンコールと行くか。これもぼくの好きな曲で、きっと君も気に入ると思うよ”

そう言って再び、モーリイは、トランペットを口に当てた。

そこから奏でられた曲は、さっきと違って、もっと歯切れのよい演奏のように思われたが、さっきよりも一層哀愁を帯びていて、リディアは、さっきよりも一層好きになれそうな曲に思われた。その素晴らしいひとときが終わったとき、リディアは、さっきよりも一層強く拍手を送った。

“素晴らしいわ、モーリイ。本当に素晴らしいわ”と、リディアは拍手を送りながら言った。“本当に、こんなに素晴らしい日ってないわ”

いつのまにか、喜んでいるリディアの目には、涙がひと筋、光っていた。

“作曲者のことは、よくは知らないけど、「禁じられた音楽」という曲さ。これを、きょうの君の為に捧げるよ”とモーリイは言った。“何かの折りに、この曲のことを思い出してもらえれば、幸いです”

“ああ、モーリイ！”リディアは、我慢できなくなって、彼の胸元に抱きついた。“好きよ。あんたが好きよ”

モーリイは、余りの突然のことで、成すすべもなく、されるままになっていた。

“リディア、冷静になって”やがて彼は言った。“ぼくは学生で、一介のトランペット吹きさ。そんなに好きになってもらっても、何もできやしない。そりゃ、こうして会うことはできるけど、それぐらいのものさ。余りぼくに過大な期待を抱いてもらっても、それは、ぼくは困るんだ。ね、

子供じゃないんだから、分かってくれるね”

“もちろんよ”とリディアは、胸に埋めていた顔を起こして、モーリイを見つめながら言った。“わたしは何も要求はしないわ。ただ、こうして会ってくれるだけで十分。それだけで嬉しいの。それ以上、何も期待してはいないわ...”

しかし、そのようにモーリイを見つめるリディアの目には、涙が光っていた。

“泣いちゃダメだ”と、モーリイは、リディアの涙を、指で拭き取って言った。“もっと強くならんくちゃ。そうでないと、この世は生きて行けないよ”

モーリイのその言葉は、リディアの胸の中で、激しい衝撃のようなものを与え、それは、大きな渦巻きのようになって、体の中に広がり始めた。そしてリディアは突然、神の啓示のようなものを、心の中に、光がさし込むのを感じた。

“そうよ。あなたの言う通りよ”と、突然リディアは、彼を突き放すと、距離をとって言った。“わたしの今の苦しみなんか、遠い将来に比べれば小さなものよ。ねえ、わたしは頑張るわ。迷いなんかないの。今を頑張るしかないの。ありがとう、モーリイ。わたしに希望を与えてくれたわ。じゃわたし、もう帰る。またこの次ね、モーリイ。さようなら...”

リディアはそう言うなり、モーリイが、何がなんだか分からず、あっけにとられているのを尻目に、さっと土手を駆け降りて、自転車の方に向かった。

リディアが再び、自転車にまたがってこぎだすと、あの木陰の方から、モーリイの優しいトランペットの響きが聞こえて来た。再び彼は練習を始めたのであり、流れて来た曲は前の二つとも違って、このときのリディアの気分が一番よくマッチしたような、「9月の雨」という曲だった。その流れるようなメロディーを後ろにしなながら、リディアは晴れ晴れした気持で、自転車を走らせて行った...

その翌日、リディアは期待しながら例の場所に行ったが、どういうわけか、モーリイの姿はどこにも見られなかった。リディアは、がっくりと肩を落としながら家路につく他はなかった。

レオノールは、家では相変わらず不機嫌だった。学校などやめてしまえ！と何度となく、帰って来たリディアをののしった。リディアは、そうした脅しや、罵声にじっと耐えた。

その翌日も、その翌日も、モーリイの姿が見えなかったので、リディアは段々と心配になり出して来た。

一週間程が過ぎたとき、リディアは思い切って、昼休みに、校舎が別の、モーリイのクラスを覗いてみることにした。上学年の男子生徒たちは、やって来るリディアの姿を、興味深げに眺め、中には、口笛でヒヤカしたりする者もいた。でも、クラスを思い切って覗いてみても、やっぱりモーリイの姿は見られなかった。一人の親切そうな男子生徒が、そんなリディアに近付いて来た。

“誰かお捜しなのかい？”

リディアは、この人なら言っても大丈夫だと思い、思い切って聞いてみた。

“モーリイ・オークレーさんはいらっしゃる？”

“ああ、あのモーリイか”と、男子生徒は驚いたように言った。“あのトランペット吹きの”
リディアは、彼を見つめながら、うなづいた。

“彼なら、学校をやめたよ。ほんの一週間ほど前に”

リディアは、その言葉で、心臓が潰れるほど驚いた。

“あの男と、何か関係でもあったのかい？”と、彼は興味深げに言った。“あの男は、家庭でも、学校でも、色々と問題があつてね。とうとう今の生活が続けられなくなってしまって、やめてしまったという噂だ”

“問題？”と、リディアは尋ねた。

“君は知らなかったのか？”と、彼は言った。“君とあいつがどんな関係にあつたのかは知らないけど、家では、あいつは、破門同然の状態だったのさ。学業が怠慢で、しょっちゅう中欠席ばかりしていたからな。だから親が段々仕送りをしなくなって来た。やむなく最後にはアルバイトで稼いでいたけど、それが悪循環で、益々学校を休むようになって来た。いずれにせよ、もう遅過ぎたんだ。彼としては、やめるしかなかったのさ。幸い、トランペットの腕前はなかなかのもので、それで身を立てるとかは言っていたけどね”

“それで、オークレーさんはどこにいるの？”リディアは心配になって尋ねた。

“さあ知らない。ぼくは親友じゃなかったんでね”と彼は言った。“彼は割と、みんなから孤立していたし、彼のことを知っている者は、割と少ないんじゃないかな”

その最後の言葉で、モーリイへの手がかりをぷつぷつと失ったリディアは、大人しく引き上げて行く他はなかった。

リディアが引き上げると、もうさっそく数人の男子生徒が、彼のところに走って来て、今のやりとりの内容を聴き出そうとしているらしかった。リディアとモーリイの噂は、これで校内に広がるかも知れないと思ったが、リディアはもう、別に気にしなかった。

その日以来、モーリイとの関係は、たった二日だけで終わるのかと思うと、リディアは悔やんでも悔やみ切れない思いだった。家に帰って来て夕食の支度をしているときや、食後、暮れなずむ窓辺のそばで、本を開いたときなど、ふと、モーリイとの楽しかった日々のことを思い返し、なつかしむのだった。そしていつぞや、彼女の想像の中では、モーリイと二人で夢の世界を歩き出し、全く別な生活を歩んで行くのだった。

もうすっかりモーリイのことはあきらめ、暗く、沈んだ生活を送っていたリディアの前に、突然思いがけないことが起こった。

学校が終わって、いつものように、いつもの道を自転車で帰って行くリディアの前方から、もう長いこと聞くことのなかったあのトランペットの響きが聞こえて来たような気がして、リディアはハッと became.

しかし、いつぞやの空耳だったこともあり、今回も、空耳ではないかと最初は疑った。だが、空耳にしては、それは明確な音を伴っていた。一層近付いて行くにつれ、もう間違いはなかった。だが、演奏しているのは、いるはずのないモーリイではなく、別人ではないか、そんな気もした。もちろんモーリイであれば、こんなに嬉しいことはない。リディアは、一刻も早くそのトランペットの響きに近付きながら期待に胸をふくらませた。

彼を隠していた最後の樹を過ぎると、土手の上の木陰でトランペットを吹いている彼の姿が見えて来た。木陰で、一生懸命トランペットを吹いていたのは、紛れもないあのモーリイだったのだ。

リディアは、自転車をその場に倒すと、そのまま駆けて行った。

“モーリイ！”と彼女は、声を限りに叫んだ。“モーリイ！”

彼も、その声に気づき、土手を降りて、彼女の方にやって来た。

二人は、土手の中腹ですれ違い、しっかりと抱き合った。モーリイが、こんなに激しく彼女を抱きしめたのは、無論始めてのことだった。

“リディア、会いたかったよ”と彼は言った。

“本当？”と、彼女は言った。“わたしだって、どうして行ってしまったの？ 何んの断りもなく寂しかったわ。辛かったわ...”

“悪かった”と、モーリイは謝った。“君に手紙を出そうかとも思ったけど、家が分からなくてね。ぼくのは、誰かから聞いたのかい？”

“ええ、知らない、あんたの友だちから”と、リディアは答えた。“学校をやめてしまったんですってね。どうしてなの？”

“じゃあ、知ってるだろうけど、続けられなくなってしまっただけ”と、モーリイは言った。“実は、君には黙っていたけど、ここ、リトイアのちょっとしたクラブで、年寄りを相手に、アルバイトをしていたんだ。ダンスホールで、ぼくが演奏するのさ。まあまあ収入だったよ。でもおかげで勉強などできやしない。夜の遅いときなど、翌日、教室で居眠りさ。だから、成績は落ちる一方。寮にもバレて、ついに、寮に入れてくれなくなったのが、ちょうど君と会ったときさ。それでぼくは、もういい加減、見切りをつけることにした。どうせ家からは破門された身だし、こらで一つ、自分の腕を世間で試してみようと思ったのさ。それで思い切って、こんな田舎町じゃなく、その日のうちに荷物をまとめて、リランに行くことにした。君には悪いけど、ぼくにはそうするしか生きて行く道はなかったんだ...”

“じゃあ、リランまで行ったの？”と、リディアは驚いて言った。

“君のことはずっと気にかかっていた”と、モーリイは言った。“だって君はいい娘だし、とっても印象に残っていたからね。でもまず生活費を稼がなくなっちゃならない。トランペット一つを持っていたって、そう簡単に雇ってくれるところなんかなかったさ。だから最初は、辛い生活の連続さ。ホテルのボーイ、掃除夫、皿洗い、庭師の手伝い、なんでもやっただけだよ。そしてとうとう、一箇所、ぼくの希望するダンスホールにもぐり込めたよ。

年齢を少しいつわったおかげでね。だって、ぼくが十八だと言えば、誰も雇ってくれないもの。はちを少し越えたところだと言って信用させたのさ。給料はそんなによくはないけど、ぼくの好きなトランペットを演奏することができる。期間は、この夏のあいだの短いものだけどね。たとい短くとも、ぼくは力の限り演奏し、みんなに楽しんでもらうつもりさ。それに、もしそこで成功すれば、次のステップへと進むことができるかも知れないしね。――それで、ようやく余裕ができたとき、君のことを思い出したのさ。今こそ君に会いに行かなくちゃならないって。幸い、きょうはミュージックホールの改装日でそれで君に会いにやって来たのさ...”

“そうだったの”リディアは、嬉しそうにモーリーの胸の中に頭を埋めながら言った。“わたしのことを忘れないでいてくれたのね”

“忘れるものか”と、モーリーはきっぱりした口調で言った。“いつもの場所で待っていれば君が通り過ぎるだろうと思ってね。力の限りトランペットを吹いていたら、そしたら君が...”

“わたしがやって来た”とリディアは嬉しそうな顔をして言った。“そうよ、わたしはずっとこの道を通っていたわ。来る日も来る日も、あんたの姿を見やしないかと思ってね。でも、見ることはなかったわ”

“御免、御免”と、モーリーは、優しく彼女を抱きながら言った。“でも、もう黙って別れたりはないよ。ぼくの居場所は、ちゃんと君に伝えておく。ほら、これがぼくの住所で、連絡先の電話番号はこれさ”

そう言って、一枚の紙切れを、リディアに手渡した。

それには、リランの住所と、電話番号とが書かれてあった。

“でもここじゃ、毎日というわけにも行かないわね”と、リディアは、紙切れを見つめながら心配そうに言った。

“リランって、結構遠いからね”と、モーリーは言った。“ぼくも、これから友だちと会って、それから今晚の夜行でもう帰らなくっちゃならない。――でも、それまでに、君としっかりと、きずなを深めておかなくっちゃならないと思ってね。ねえ、どうしよう？”

“どうしようって、何をよ？”と、リディアは言った。

“今後のことさ”と、モーリーは言った。“君が今言ったように、毎日会うわけには行かないよ。――でも、君とは会いたい”

“わたしもよ”と、リディアは言った。

“じゃこうしよう”と、モーリーは言った。“当分は、手紙のやりとりをするんだ。これが目下のところ唯一の交際手段だ。何か緊急なことがあれば電話をしてくれてもいい。でもそうでない限り、ぼくも書くし、君も書いてよこしておくれよ。それでかまわないっていうのなら、君の住所を教えてくれないか”

“いいわ。喜んで”と、リディアは言った。

そして鉛筆を取り出すと、ノートの切れ端にさらさらと住所を書いて、モーリーに渡した。

モーリイはそれを大事そうにポケットにしまい込むと、言った。

“有り難う、リディア。実は、また当分会えそうにないことを言うと、君は怒り出すんじゃないかと、それを恐れていたんだ。でも案外素直に、君は応じてくれたんだね”

“だって仕方がないでしょう”と、リディアは言った。“本当は毎日でも会いたいわ。でもあんたはリランだし、わたしはサビーノ。この距離はどうすることもできないからね”

“君はなかなか物分かりのいい娘だ”と、モーリイは言った。“本当は君を呼び寄せたいぐらいの気持なんだけど、あいにく、そんな資力も、経済力もない。でも今の仕事をもっと軌道に乗って、成功したら、そのときには喜んで君を招待してあげるよ”

“本当？”と、リディアは、微笑みをいっぱい浮かべて言った。“じゃ、そのときを待っているわ”

“そのときが早く来ればいいんだがね”と、モーリイは言った。

それから、二人は一緒になって、モーリイがいつも演奏していた、今は誰もいない土手の上の大きな木陰を見つめた。

“もうすぐ夏休みだね”と、モーリイはそれとなく言った。“いつもなら今頃は、帰り支度で忙しいときだったんだが。――でも、もう今年の夏は家に帰ることもない...”

“本当にもう家には帰らないつもりなの？”と、リディアは、心配そうに尋ねた。

“ああ、親父が、家には入れないって言ったからね”と、モーリイは、ひとり笑うように言った。“だから、ひとりで生きて行くしかないのさ。でもその方が結構自由で、楽しいときもあるよ。リディア、君だっていずれはそうしようと願っているんだろ？”

リディアは、急に、自分の心の底を見透かされたようで、ギクツとした。

“どうしてそんな風に思うの？”と、リディアは言った。

“だって、君の話しを聞いていれば分かるさ”と、モーリイは冷静に答えた。“君はあのとき、家の辛さを語ってくれたじゃないか。その話を聞いていて、これは早く、家を出るしかないな、とぼくはそう思ったのさ。もちろん、今すぐというわけじゃない。でも、いずれそういうときが来ると、ぼくはそう思うんだ。君は決して、今の生活に満足なんかしていないのさ”

“本当を言えば、その通りよ”とリディアは言った。“でも、あなたの言う通り、今、家を空けるわけにはいかないわ。学校を卒業して、さらに上の学校に行きたいし、あんなお父さんだけど、やはりほって行くわけには行かないわ。今だって、働き手がひとりで大変だってことがよく分かっているの。だから、この夏休みには、うんとお返しをしてあげなくっちゃならないって、思っているの。家の手伝いをしなくちゃならないし、暇があれば、少しでも働いて稼ぐつもりよ。そうでないと、実際、わたしの家はやって行けないわ。父さんが、わたしに学校をやめろっていう理由も、よく分かっているの”

“じゃあ、上級学校へ進むのは、ますます難しくなるな”と、モーリイは言った。“もちろん、働きながら学んで手もある。いずれにせよ、大変だな”

“可能な限り、やっけて行くつもりよ”と、リディアは答えた。

“ねえ、リディア。また手紙を出すよ”と、モーリイは言った。“そして、この夏のあいだ、また会おう。そのときには、本当に二人きりで、楽しい日を過ごそうよ。どうだい、かまわないかい”

“ええ、もちろんよ”と、リディアは嬉しそうに言った。

“じゃ、その日が来るのを、お互い楽しみにしようよ”と、モーリイは力強く言った。

“ええ、楽しみにしてるわ”と、リディアは答えた。“そして、手紙も書くわ。あんまり多いからって、腹を立てないでね。思いつく限り、わたしは手紙を書くつもりなんだから...”

“こりゃ、読むのが大変になりそうだ”そう言って、モーリイはにっこりした。

“ねえ、わたしたち、お互いに距離は離れているけど、これでまた近くなったわけね”と、リディアは言った。“じゃ、お別れの前に...”

そう言って、彼女は、モーリイの頬にキスをしようとした。

その唇を、逆にモーリイは奪い返した。そして、甘く、優しく彼女を抱き寄せ、彼女の唇から、力の限り、キスを奪うのだった...

長いキスの後、二人は別れた。

リディアは、幸せな思いを胸に入れて、モーリイから去って行った。それは、六月のある日、夏休みはもう目前だった...

夏休みに入ると、さっそくりディアは家に縛られねばならなかった。家畜の世話や、干草刈り、チーズ造りなど、うんと用事を言いつけられた。夏の暑い盛りにレオンが手伝いに帰って来てくれたときは、本当にほっとした。レオノールは、レオンを見ても、以前のように叱りつけるというのでもなく、ただ顔を見合わすだけで、余り話しかけようとはしなかった。

草刈りで汗を流し、土手の斜面にぐったりと腰を降ろしたリディアとレオンは、何年か前の、あの子供時代のように戻っていた。

“御苦労さん、兄さん”と、リディアは、ぽっかりと浮かんだ真白な雲を見つめながら言った。“兄さんが帰ってくれたおかげで助かるわ。本当にいいの、こんなことして。仕事の方は大丈夫なの？”

“休暇をもらって来たから大丈夫さ”と、レオンは答えた。“でも、家に帰って来て安心した。父さんが、どうやらちゃんと、家の仕事はやっているようだからね。かなり荒れているんじゃないかと心配していたんだ”

“ぶつくさ言いながらもなんとかね”と、リディアはにっこりと笑った。

リディアは、父親のいやな面をたくさん知っていたが、今ではそれは当然のこのように受け入れていた。

酒ぐせ、賭博癖。イライラした気難しい性格、そうしたものを今さら変えようとしてもどうにもなるものではなかったのだ。それらのことを、とりたてて気にしないことが、唯一、生活の安定を保つことだと心得ていた。ただし、仕事がうまく行かないとなると、それは別問題なのだが

...

“ところでリディア”と、レオンは話題を変えて言った。“これは、リランで聞いた話しなんだけど、モーリイ・オークレーとかいうトランペット吹きと関係があるそうだね”

“どうしてそんなことを？”

リディアは、意外だったが、驚いてレオンを見た。

“いや、そんなことは、どことなく、噂で入って来るもんさ”と、レオンは答えた。“でもね、おせっかいかも知れないけれど、彼ならやめた方がいい”

“それ、どういうことよ”と、リディアは言った。

“つまり、彼は必ず、お前を不幸にする、ということさ”

“そんな、いい加減なことを！”リディアは、このときばかりは、たとえ兄でも許せない気持になって言った。“わたしは彼のことをよく知っているわ。兄さんは、どれほど知っているというの。知らないのなら、あんまりいい加減なことは言わないでよ！”

“確かにぼくは会ったことはない”と、レオンは言った。“でも、ある友達が忠告してくれたんだ。彼は女好きな男で、現に今も、リランに愛人が一人いるんだと。しかも、そんな男に、お前が関係しているんだと聞かされたものだから、これは黙ってははいられないと思ったのさ。これは嘘じゃない。そんないい加減な男なら、きっとお前を不幸にするよ。ねえ、今でも彼と付き合っているのかい？”

“嘘！嘘っ！”リディアは腹立たしい気持になって言った。“彼はいい人よ。そんなことをする人じゃないわ。――でも今はもう、付き合っていない”

どうしてリディアは、兄に嘘をついたのか分からなかった。あるいはこれ以上、詮索されるのがいやだったのかも知れない。事実、この前会ったことは二人だけの秘密で誰にも知られていないはずだった。

“そうかい。なら、安心したよ”と、レオンは言った。“今も彼と交際しているんじゃないかと思ってね。でも――もうそんな話、やめにしようか”

リディアは、ぼんやりした表情でうなづいた。しかしその心の内側は、傷がついたようにショックだった。

久し振りの兄の為に、リディアは立派なごちそうをつくった。

夕食時、久し振りに全員がテーブルについた時、レオノールは、こんな御馳走は、自分のときはめったにつくってくれないとぼやいた。

“でも父さん”と、リディアは、高価な砂糖をさし上げた。“兄さんがこんなにたくさん、おみやげに買って来てくれたのよ”

夕食後、兄は自分の部屋で泊まることになり、リディアも自分の部屋に戻った。
戻るとすぐリディアは、机に向かって、ペンをとった。
すぐにでも会いたい、とモーリイに向かって、手紙を書いた。

三日後、短期の滞在だったが、レオンは帰って行った。

仕事は順調だから心配はいらないことと、一度リランまでおいでよ、とリディアを誘いながら、レオンはひとり去って行った。

レオンが行ってしまうと、リディアは寂しい気がした。せっかく昔話して花が咲いたのに、その相手が行ってしまったのだ。そんなリディアの気も知らないで、さっそくレオノールから怒号がとんだ。

“リディア、ボヤボヤせずに草を刈るんだ！”

手紙を出して十日程した頃、村の郵便配達がりディアの前を通りがかり、たまたま家の前にいたリディアに、“ハイこれ”と言って、一通の手紙を手渡した。差し出し人は、父に知られないように、女友達の名が使われていたが、すぐモーリイからだと直観した。リディアは、さっそくその手紙を持って、自分の部屋に駆け戻り、封を切って手紙を開けてみた。

君と約束していた再会のこと、八月十日にどうだろうか。この日の十時五十二分にリトイアに着く汽車の便がある。この日はたまたま仕事が休みで、都合がいいんだが...

というようなことが手紙には書いてあった。リディアは、それに応えるようにさっそく返信を書いた。村の郵便ポストに手紙を投函したとき、さっきの配達夫とバッタリ会って、リディアはドキリとした。

約束の十日の日が来て、リディアは、レオノールには、学校の行事でどうしても行かねばならないと偽り、家を出た。

久し振りに家を離れると、気分は爽快だった。

素晴らしい谷、深い森。水は清く、空は青かった。それらが今日は一段と素晴らしく思えるのは、今日は、モーリイに会えるからだ、と、リディアは思った。

約一時間ほどの自転車の旅の後、リディアはリトイアの駅までやって来た。

駅前には、夏の登山や、観光客などの人々で結構賑わっていた。日ざしは明るく、駅のすぐ向う側に迫る山の緑はまぶしいほどだった。

駅前広場には、観光客用の馬車が止まっていたが、リディアはすぐそばに自転車を止めて、駅に向かった。時計を見るともう十時五十分を指しており、ぐずぐずしてはいられなかった。駅に着くや否や、向う側から頑丈そうな赤いディーゼル機関車に牽引された鉛色の車体をした列車が入って来た。リディアは、モーリイが窓からこちらを見ていないかと、居並ぶ列車の窓に目を向けた。

すると、ちょうど自分が立っているところを通過する列車の中に、自分を見つめている視線に気が付いた。モーリイだ！とリディアは思った。その瞬間、モーリイも、窓から顔を出して、リディアの方を見た。リディアは、少し自分の位置より前方へ向かう、モーリイのいる列車に向かって駆け出した。走りながら、精一杯、彼に向かって、手を振った。モーリイも、笑顔で応え、窓から乗り出すようにして手を振ってくれた。列車が止まる頃、モーリイは窓から顔を引っ込めた。リディアは、胸を高鳴らせながら、乗降口に行き、乗客が降りて来るのを見守った。年老いた人や、若者たちなどの観光客に混じって、やがてモーリイが元気な姿で降りて来た。左手には、あのトランペットの入ったケースをしっかりと握っていた。

モーリイが降りて来るなり、リディアは、彼の体の中に飛び込んだ。そして、しっかりと彼の体を抱きしめると、その胸の中に頭を埋めた。嬉しさの余り、目には涙があふれて来た。

“会いたかったわ。会いたかったわ”と、リディアは、あふれて来る涙をふくこともなく、つぶやいた。

“ぼくもだよ”と、モーリイは言った。“でも、こんなところじゃ、みんなが見ているよ”

“そうね”そう言って、にっこりと、リディアは、モーリイを見上げた。

モーリイも、優しく彼女の肩に手を当て、やがて二人は、寄り沿うようにして、駅の構内を歩いて行った。

“ねえ、連れて行って。わたしをこの田舎から救い出してよ”

リディアは、半ば冗談めかせて、モーリイに言った。

“ああ、できればそうしたいんだが”と、モーリイは言った。“でも君だって、まだ時期は早いつて言っていたらう”

“そうだったわね”と、リディアは言った。“でも、こんなに天気がいいんだから、どこか汽車に乗って遠くへ行きたい気がするわ”

そう言っているとき、モーリイを運んで来た汽車が、ゆっくりと動き出した。

“あら、わたしの心の翼が、行ってしまおうのね”と、リディアはそれを見て言った。

“でも、君の代わりに、ぼくが来たじゃないか”と、モーリイは言った。“はるばると四時間もかけて...”

“四時間も！”とリディアは驚いたように言った。“随分と遠いのね”

“リランは、そう簡単に行ける街じゃないよ”と、モーリイは答えた。“何度も汽車を乗り変えて、やっとこのリトイアさ。実際に、こうやって苦労して来ると、この町の偉大さが分かるというものさ...”

“でも、あなたにとっちゃ、もう用のない町ね”と、リディアは、ちよっぴり皮肉っぽく言った。“もともとこの町の人じゃないし、ここの高校も退学になってしまったんだから...”

“でも、君がいるから、こうしてやって来たじゃないか”と、モーリイは言った。“そう言われれば、君がいなけりゃ、もうこの町は、ぼくにとっちゃ、用のない町かも知れない...”

“じゃあ、わたしだけの為に、ここへやって来てくれたのね”と、リディアは嬉しそうに言った。“ありがとう、モーリイ、好きよ”

そう言いながら、一層強く、彼の手を握り締めるのだった...

再び駅前広場に出ると、そこは明るくて、観光客たちで賑わっていた。

リディアは、馬車のそばの、建物の白壁に立てかけてあった自転車のところに行った。

それを見てモーリイは、

“自転車で来たのかい？”と言った。

“ええ、父さんには嘘を言って来たんですもの”と、リディアは、にっこりして答えた。

“それで、どこへ行こうか？”と、モーリイは、それとなく尋ねた。

“いいところがあるの”と、リディアはすぐ言った。“きれいな湖があつてね、とっても静かで、いいところよ。ちゃんとお弁当はこの通り”そう言って、自転車の籠に、布でくるんでいた弁当を、モーリイにとって見せた。“父さんには内緒で、こっそりつくって持って来たの”

“それで、飲物は？”と、モーリイは尋ねた。

“ワインがひとつ”と、リディアは答えた。

“いいね”と、モーリイは言った。“でも、シャンペンもいい。この近くでいい酒屋を知っているんだ。そこへ行って買おう...”

二人はさっそく酒屋に駆けつけた。酒屋の前で待っていると、やがてモーリイが笑顔で酒屋から出て来た。手にはしっかりとシャンペンが握られていた。

“それで、君の言っている湖は、ここからは遠いの？”と、モーリイは、シャンペンを籠に積みながら言った。

“自転車で三十分ほどのところ”と、リディアは答えた。

“まさか”と、モーリイは驚いたような顔をして言った。“まさか、この自転車で行くんじゃないだろうね”

“行くつもりよ”と、リディアは、にっこりして答えた。“さあ、あんたがこいで。わたしは、あんたの持って来た荷物を持ってあげるわ”

“大丈夫なのかい？ 二人乗りをしても”と、彼は、心配そうな顔をして言った。

“大丈夫よ。この自転車、丈夫なの”リディアはそう言って、自転車の前を彼に譲った。彼がまたがると、リディアも、その後ろに乗った。そして、片手で彼の荷物を持ちながら、もう一方の手で、しっかりと彼にしがみついた。

“もういいわ。発車オーライよ”と、リディアは言った。

“じゃ、重いけど、出発進行。ヤレヤレ...”

モーリイは、ぶつくさ言いながら、二人の乗った、やたらと荷物の多い自転車が、よろよろと

動き出すのだった...

リトイアの森に囲まれた町は、やがて徐々に、彼ら二人から遠ざかって行った。

ゆっくりと、静かな山道を、ときたま、ハイキングの人々とすれ違ったり、追い抜いたりしながら、自転車で走って行くと、森と草原の向う側に、やがてうっすらと、山の谷間に沈んだようなそれほど大きくはない湖が見え出して来た。それが、H...湖であった。

いつか、一度来たことがあって、忘れ難い印象を残し、モーリイが来たらそこに案内しようと心に決めていた。

やがて、湖のそばに来ると、水は、驚くほど澄んでいた。すぐ後ろには岩山が迫り、緑の山の斜面は、美しい草原以外は、黒々としたモミの林で、ビッシリと埋まっていた。湖岸には、ところどころ民家があって、中には、ホテルや、民宿となっているのもあるらしかった。空を見上げると、空は、驚くほど青く澄んでいた。

“ねえ、あそこがいいわ。あそこの木陰へ行きましょ”と、リディアは、モーリイをかりたてた。

やっと二人は目的地に着き、モーリイは、ほっとしたように自転車を置いた。

“ここなら知っている”と、モーリイは言った。“思い出したよ。一度、友だちに連れられてやって来たことがあるよ。ここで泳いで、釣りもやったんだ”

“へえ～、釣りをやったの！”と、リディアは、感心したように言った。“何か釣れるの？”

“ここの湖は、水深はそう深くはないんだけど、大きな鱒さ”と、モーリイは答えた、“もっとも、ぼくじゃなくて、友だちが釣り上げたんだけどね”

“そう、そんなのが昼食になればいいのにね”と、リディアは笑顔で言った。“さあ、それじゃここで、弁当を広げて、お昼休みにしましょ”

リディアは、持って来た敷布を、波がすぐ迫る、湖岸の草原に、さっと広げた。

“さあ、モーリイ、ここで食事をしましょ”

“いいねえ”と、モーリイも、湖と空を見上げながら言った。“こんなところで食事ができるなんて、本当に久しぶりだ”

リディアは、自分がけさ、こっそりつくっておいた、とっておきの弁当をそっと広げた。

パンにピザに、茸や肉をいためた料理、それから薄切りのソーセージなどだった。

モーリイは、それを見るなり、舌なめずりをした。

“うまそうだな”と、彼は言った。“結構君って、料理がうまいんだね”

“これは、亡くなったおばさんに教えてもらったものよ”とリディアは、さりげなく答えた。

モーリイは、さっそく、そのうちの一つを口にほおぼった。

それからモーリイは買って来たシャンペンの栓をあけにかかった。それは勢いよく音をたてて開き、中からあわがあふれて来た。

“リディア、グラスだ”とモーリイは言った。

リディアはあわててグラスを二つ用意し、それにそれぞれ注いで、二人で乾杯をした。

その最初の一口を舌につけたとき、リディアは、かつて味わったことのないほどの幸せを感じた。

“いいねえ、こんなところでのんびりできるなんて”と、やがてモーリイは言った。“天気はいいし、湖はきれいし、後ろの森も、それに君だって、なかなかきれいだ”

リディアも、自分のつくったソーセージを食べながら、にっこりと微笑んだ。

しばらくすると、モーリイは、ごろりと体を横たえた。どこか、遠くからは、ハイキングに来た子供たちの声に混じって、小鳥の声が聞こえていた。

“やっぱり、来たかいがあったなあ...”と、モーリイはつぶやいた。“はるばると、君に会いに来てよかったよ。本当に、つくづくそう思う...”

リディアが坐ったまま、横になっているモーリイの目を見ると、彼の目は、本当に満足し切ったように、潤い、生き生きと輝いているのだった。

“ねえ、リランって、どんなところ？”と、しばらくして、リディアは尋ねるのだった。

“リランかい？”と、モーリイは、横たえたまま、リディアの方を見た。“大した街じゃないよ。どうしてそんなことを聞くんだい？”

“だってわたし”と、リディアは言った。“ずっと田舎暮らしで、都会って見たことがないでしょ。だから、都会って、どんなところか気になるの”

“そんなこと、余り気にしない方がいいなあ”と、モーリイは言った。“だってぼくの考えでは、都会より田舎の方がずっといいものが揃っているもの。空気はきれいし、水は澄んでいるし、人間は少ないし、なんといっても、人間の少ないのがいいよ。しかも、田舎に、君のような美女が住んでいればなおさらね”

“ねえ、冗談じゃなくて、本当のことを言ってよ”と、リディアは言った。“本当は都会の方がいいでしょ。そして、こんな田舎なんか、一段下に見下ろしている”

“おいおい、どうしてそんな言い方をするんだ”と、モーリイは言った。“田舎は本当にいいと認めているのに”

“実は、わたしの兄さんもリランに勤めているの”と、リディアは言った。“兄さんの話を聞いていると、辛いことも多いけど、結構楽しいことも多いらしいわ。色んなことがあって、都会のめまぐるしい歩みについて行けないともこぼしていたわ。ねえ、本当にそうなの、都会って...”

それには直接答えずに、ただひと言、モーリイはこう言った。

“君の兄さんが、リランに勤めているらしいな。そのことは知っているよ”

“向うで兄さんと会ったの？”とリディアは尋ねた。

“そういうことじゃないけど”とモーリイは言った。“どういうわけか、そのことを知っているんだ”

。都会って、広いようで、案外狭いからね...”

そのとたん、リディアの頭には、あの兄の言葉が浮かんだが、それについて尋ねることは、どういうわけか、よすことにした。リランの愛人については尋ねずに、ただ一言、

“そうなの...”とだけ、リディアは言ったのだった。

モーリイは、チラリッと、そんなリディアを見やった。

“ねえリディア”と、やがてモーリイは言った。“君は都会へ行きたいのかい？ だったらやめた方がいいよ。とりわけ、君のような性格の子はね。今のままでいるのが一番なんだ。都会は、確かにいい面もあるけど、悪い面の方が多すぎるよ。それを早く見ちゃダメだ。都会には、変な奴がいっぱいいる。たかり屋、浮浪者、やくざ、ポン引き、なんでもありさ。人を信用なんて、できやしない。本当に、食うか、食われるかの世の中さ。そんなの、見ずにすむものなら、結局、見ないでいるのが一番いいのさ。都会に出れば、男と女の関係だって同じことさ。君のような子だったら、きっと傷がつくに決まっている。男に裏切られ、世の中に裏切られ、お先真暗なんて、そんな目には会いたくないだろう。ぼくはそんな娘をこの目でたくさん見て来た。一一ぼくが言いたかったのはそのことさ。都会なんて結局、だまし、だまされ合い、裏切り、裏切られ合いなのさ。だから、君のような子は、都会に行こうなんて、望まない方がいいんだ。今のまま、純粹でいるのが一番いいんだよ...”

“へえ～、随分とヒドい世の中らしいわね、都会って”と、リディアは驚いたように言った。“あんたも、そんな目に会ったの”

“会ったさ...”と、モーリイは、遠くを見つめるように言った。“都会で生きるって、思っているほど簡単じゃない。その点、君の兄さんは、えらいと思うよ。しっかりと生きているらしいからね。でも、ぼくのような根なし草にとっちゃ、それはヒドいものさ。今でこそ白状するけど、何度か餓死しそうになったこともあったのさ...”

“本当？ モーリイ”と、リディアは驚いたように言った。

モーリイは黙ってうなづいた。

“何日も仕事がなく、仕方なしにアルバイトをしたら、給料日になって、雇い主がとんずらしやがってね”とモーリイは言った。“結局、文無しで何も買えなかった。あのときほど、ひもじい思いをしたことはなかったよ。それに、仕事のあるときは、こびを売る御婦人も、都合が悪くなりや家を出て行けて、全く勝手な奴さ、女って動物は...”

“リランでは、いろいろあったみたいねえ”と、リディアは、それを聞きながら言った。

でも聞きようによっては、モーリイの生き様は、なかなか素晴らしいとも思えて来るのだった。

“でも、それでもあんたは”と、リディアは言った。“都会暮らしをやめようとは思わないんでしょ”

“もうすっかり身にしみついてしまったからね”と、モーリイは言った。“良きにつけ悪きにつけ、もうぼくは都会に染まってしまって、田舎には戻れないよ。一一でも、こんな風にして田舎に戻ってくるのは、それはそれとして、いいものなんだ...”

“そこにわたしがいるから？”と、リディアは尋ねた。

“その通りだ”と、モーリイは、きっぱりと答えた。“君は田舎にいて、ぼくにとっちゃ、かけがえのない娘なのさ”

“そんな風にして、わたしを田舎に閉じ込めておくつもりなのね”と、リディアは言った。“いつまでも、田舎の愛人にしておくつもり？”

“いや、そんなつもりじゃ”と、モーリイは否定した。“君を愛人なんて思っちゃいない。君は、ぼくにとっちゃ、唯一の恋人さ...”

“本当にそうなのね”と、リディアは念を押した。

“ぼくの心臓にかけて”と、モーリイは胸に手を当てながら言うのだった。“そのことを誓うよ”

リディアは幸せそうに、あの青い空に向かって、頭をのけぞらせた。

“モーリイ、でもわたしは行くわ”と、彼女は言うのだった。“いつか必ず都会に行くの。そこがあんたの言うような修羅場だとしてもいいの。だってあんたの話を聞いていると、こんなに平和で、のどかな田舎よりもやっぱりいいっていう気がして来るもの。わたしはあんたの恋人でも、田舎で待ち続けるのはいやよ。都会がどんなに誘惑に満ちているか、それをこの目で実際に確かめてみたいのよ。ねえ、ずっとこの田舎に閉じ込められているわたしの気持ち、あんたに分かる？”

“分かるよ”と、モーリイも同意した。“やはり君はいずれやって来るだろうね。その時期がいつになるか分からないにしても、そんな気がするよ”

さわやかな風が、二人のそばをさっと駆け抜け、それは、澄んだ湖面にさざ波をたてた。水鳥がそんな湖面にさっと舞い降りて来ては、美事にえさをついばむのだった。

“君はまだ、満たされていないようだね”と、やがてモーリイは、それとなく言った。“今の生活が不満なんだね”

“だって、家にいるのは、あんな父さんなんですもの”と、リディアもふと言った。“わたしのことについては全く理解力がないわ。ただ考えているのは、わたしを手元に置くことだけ。でもわたしはカナリアじゃないんですものね。父さんがわたしを愛していることは分かるわ。でも、その表現の仕方がまずいのよ。可愛さ余って、憎さ百倍、それがあの人の、わたしに対する表現なのよ。それに、――最近では、もうわたしのことなど何も考えていないような気さえするの。昔のように、もう元気がなくなって来たせいもあるかも知れないけれど、関心のあるのは自分のことばかりよ。悪い友達とお酒を飲んだり、賭博をしたり――最近ではヒドクなる一方よ。ねえ、そんなところにずっといるなんて耐えられる？ でもわたしは耐えている。ときどきなぐられても、怒鳴られても耐えている。本当になぜでしょうね。自分でも不思議なぐらい。不思議なぐらい辛抱強いよ。

—あの父さんが、本当の父さんでないことは分かっているわ。でもね、不思議だけど、ときどき本当の父さんのような気がするときがあるの。一つは、あの父さんとの暮らしが長いせいがあるかも知れない。でもそれだけじゃなくて、どう言ったらいいか、あの父さんとはどこか深いところで結ばれていて、大切にしていあげなくちゃならない、いたわってあげなくちゃならない、見捨てちゃならないって気がするときがあるの。そしてそんなことを思う瞬間、どういうわけか、あの父さんが、本当の父さんのような気がして来るときがあるのよ...”

“君って、変わっているね”と、モーリイは言った。“君の父さんって、見たことはないけど、君の話しからだいたい想像がつくよ。そんな、悪魔のような男なのに、それでも君は、その男を、君の心のどこかでは愛している...”

“かもね”とリディアは答えるのだった。“そうでなければもうとっくに家出をしているはずよ。それに—こんなこと、もうほとんど希望薄なのに、あの父さんが、元のまともな父さんに戻って、わたしたちの家が再び明るい、いい家に戻ることを期待しているの。まるでわたしって、夢見ている少女みたい。そんな、もうほとんどあり得ない希望を夢見るからこそ、わたしはこうやって、毎日を生きていられるのね...”

“君って、けなげだね”と、そんなリディアを見ながらモーリイは言うのだった。“でもそんな君が、一段とぼくは好きになったよ”

“ねえ、天気もいいし、食事が終わったから散歩をしてみない？”しばらくしてから、急にリディアは明るい笑顔になって言った。

そう言って先に立ち上がると、まだ坐ったままのモーリイに手を差し出し、

“さあ、早く！”

モーリイは、差し出されたリディアの手を取って立ち上がると、今度はリディアは、彼の手を振り切るなり、勢い良く丘に向かって駆け出した。

モーリイも彼女につられて駆け出した。が、リディアは彼に追いつかれまいと必死になって駆け上がった。

丘をしばらく上がったところにあるモミの密生林のところまでやって来ると、さすが力が尽きたのか、リディアはどっと草むらに倒れ込んだ。それから、続いてやって来たモーリイの方に、そのままの姿勢で振り向くと、再び笑顔になって、リディアは言うのだった。

“やはりダメねえ。わたしって、すぐ疲れるんだから”

しかしモーリイも、ハーツハーツと息を切らせていた。

“そんなことないよ”と、彼も、疲れたように立ち上がりながら、リディアを見つめながら言った。“あんなに必死に走りゃ、誰だって息切れしてしまう...”

リディアは、今度は全身をひっくり返し、すっかりあお向けになって空を見上げた。

“素晴らしい空...”と、彼女は、うっとりした表情になって言った。“ねえ見て、雲が美しいわ。あの空にまで、飛んで行けたらねえ...”

モーリイは、そんなリディアの上に、どっとかぶさり込んだ。そして、彼女の頬や鼻や唇に、激しくキスの雨を降らせようとした。

しかしリディアはそれを拒絶すべく、頭を左右に振った。

“モーリイ、やめて。今はそんな気分じゃないわ”

モーリイはやむなく、キスをするのをやめた。

“どうしてだい？”と、モーリイは言った。“こんなのはいやなのかい？”

“ただなんとなくよ”とリディアは答えた。“ねえ、それよりホラッ、一緒に並んで空を眺めてみましょうよ”

モーリイは仕方なく彼女の上から離れ、彼女と一緒に、あお向けに並んだ。が、彼女の手だけは、しっかりと握っていた。

“君って、結構可愛んだね”とモーリイは、少し不満そうに言った。

リディアはしかし、彼の不満も聞き流した。

“ねえ、このまま目を閉じましょ。こんなに幸せな気分ってめったにないわ”

そう言ってリディアは、満足深げにまぶたを閉じた。彼もそうしたかは分からなかった。が、リディアは、今は、自分のことだけで満足だった...

しばらくして目を開けたとき、モーリイが横にいないことに、リディアが彼にしゃべりかけて初めて分かった。

リディアはハッとなって上半身を起こして周りを見た。ふもとの、食事をしていた場所にも、他にも、どこにも彼の姿は見られなかった。

リディアは驚いて立ち上がった。そして叫んだ。

“モーリイ！ どこにいるの。どこかに隠れているの！”

しかし、どこからも、何んの返事も返っては来なかった。が、目を閉じていた時間上、彼がそう遠くにいるとは考えられなかった。

“意地悪ね”とリディアは言った。“隠れているのなら出て来なさい！ あんたが隠れているのは分かかってよ”

そう叫んでも返事がないので、リディアは歩き出した。方向が定まらず、あっちこっち振り返りながら、フラフラした足取りで、リディアは丘を歩き始めた。

が、しばらく行くと、なんのことはない、モーリイは、ふもとの木陰で、湖の方に向かって坐っていた。

リディアは彼を見つけるや、あわてて彼の下へ駆けて行った。

近づくと、モーリイは、ぼんやりと湖の方を見つめながら、トランペットを手に握っていた。

“どうして返事をしなかったの？”と、リディアは、やって来るなり彼に言った。

“だって、ぼくは隠れてなんかいないし、いずれ君が見つけるのは、目に見えていたからさ”と、モーリイはそっけなく答えた。“ぼくはただ、湖に向かってトランペットを吹きたくなっただけな

んだ...”

しかしリディアには、彼の思っていることがよく分かった。何よりも、その不満気な顔が、彼の心を象徴していた。

“嘘でしょ”とリディアは言って、彼のそばにしゃがんだ。“さっき、わたしがキスを拒絶したから、それでむくれているんじゃない？”

“だって、君は嫌いなんだろう？”と、彼は、リディアの方には向かずに答えた。“そんなことはもう思ってやしないよ...”

“いや、思っている”と、リディアはにっこりしながら言った。それから、決心したようにリディアは続けた。“いいわ、キスをして。ただし、あんたのトランペットを聞かせてもらってからよ。ねえ、何か一曲聞かせて”

すると、モーリイは、急に元気が出たようだった。

“じゃ、君の為に、小品だけどいい曲があるんだ”とモーリイは言った。“別にキスの為じゃないけど、ちょうど今、湖を見ながら考えていたところなんだ。じゃ、吹くからね”

そう言ってモーリイは、トランペットを口に当てると、吹き始めた。

やがて、甘い、ささやくようなメロディーが、そよ風に乗って、そのトランペットの先から流れて来た。

リディアは、目を閉じて、折り曲げた両膝に腕組をしながら、うっとりとそのメロディーに聞き入った。

やがて、甘い余韻を残しながらその演奏が終わると、リディアは目を開けた。

“なかなかいい曲ねえ”と、リディアは言った。“なんていう曲なの？”

“「聞かせてよ、愛の言葉を」、っていうんだ”と、モーリイは、落ち着いた表情で答えた。“ジャン・ルノワールとかいう映画監督の作った作品。なかなかいい曲だろ？ ぼくの大好きな曲の一つさ”

“曲もいいけど、題名も素敵じゃない？”と、リディアはにっこりして言った。“「聞かせてよ、愛の言葉を」、だなんて。ねえ、それじゃいいわ、聞かせてよ、あんたの愛の言葉を。モーリイ”

リディアは、そう言って、目を閉じた。

“弱ったな、そんな風に改まって言われると”と、モーリイは照れるように言った。“でも、君が好きさ。愛しているよ”

そう言うなり、彼は、リディアの背中に手を回した。それから、彼女の口に顔を近付けると、やがて、優しく、しかも情熱的な口づけをモーリイはした。リディアは黙って、彼の愛に答えるのだった...

“ねえ、こんな日が続くといいわねえ”と、口づけが終わってから、しばらくしてからリディアは言った。“ホラッ、向うに白鳥がいるわ。素敵ねえ...”

確かに、湖の上には、何羽かの白鳥が舞い降りて来て、静かに浮かんでいた。

“そう、素敵な一日だ”と、モーリイも同調して言った。“こんな日が毎日続けば、言うことなしさ”

それから二人は、抱き合うようにして、草むらにあお向きになった。

美しく澄んだ青い空には、真白な雲の塊や、ちぎれたような雲が浮かんでいて、それらはゆっくりと東の空へと流れていた。

“雲を見るたびにわたしは思うわ”と、リディアは、それをじっと見つめながら言った。“あの雲の上にまで飛んで行って、そこから遠くを見たいって。だって、あそこからなら、わたしのいる村も、あなたのいるリランだって、見えるかも知れないでしょ”

“君のいる村はともかく”とモーリイは言った。“ぼくのいるリランまでは無理さ”

“あの雲の上からでも？”と、リディアはなおも言った。

“ああ多分。リランは遠過ぎるからね”

“そうかも知れないわねえ...”と、リディアは少し寂しそうに言った。しかしすぐ力づけられたように、リディアは続けるのだった。“ならいいわ。もっと高く上がればいいのよ。あの雲よりももっと高く。あなたのいるリランが見える所まで高く飛び上がればいいわ。そうすれば、あなたのいる街がどんな街かよく分かるようになるわ。そんな高さにまで舞い上がれば、きっと素敵なことでしょうね。ねえ、白鳥って、そんなことができるから羨ましいわ...”

“だったら白鳥になればいいさ”と、モーリイは、少々乱暴に言った。“何かで読んだお伽話のようにね。そんなことが実際に起これば、きっと素晴らしいだろうな。白鳥の王子やお姫様がいて、それは実は人間で、白鳥に姿を変えているだなんて”

“あんたも結構ロマンチックなのね”と、リディアはその話を聞いて言った。“そんなことを面白がるなんて、思ってもいなかった”

“ぼくはロマンチストさ”と、それに対してモーリイは言うのだった。“君が今まで気がつかずただけさ...”

そんな風にして、二人の楽しい時は流れて行った。リディアは、モーリイと過ごす時間がこんなに楽しいものだとはいえなかった。多少信頼性に欠ける点もあったけれど二人でいるこの楽しさに比べれば、微々たるものに過ぎなかった。リディアは、いつかはこのモーリイに付いて街に行けるような、そんな日が来ることを待ち望むのだった。

あんなに楽しかった一日も、ようやく終わろうとする頃がやって来た。まだ陽は高く、時も遅い時刻ではなかったが、父親との約束上、帰らねばならない時刻がやって来た。

本当はもっと長く、一夜を共にしたい気さえあったのだが、それは現時点では許されないことだった。しかしリディアは、その言葉を口にすることが、なぜかなかなかできなかった。モーリイと別れることがこんなに辛いことだとは、思ってもいなかったのだ。それは、別れるときが近付くにつれ、一層はつきりつつのってくるのだった。

モーリイはまだリディアといられるものだと、当然のように思っていた。彼は、彼女の肩を抱き寄せ、そのふさふさした柔らかい髪の毛を指でつまんでいた。

“ねえ、こんなに楽しい夏って、なかったわ”と、リディアはそれとなく言うのだった。“いえ、夏がこんなに楽しいなんて、思ってもみなかった。こんなに楽しい時間なら、もっともっと続ければいいのに。――でも、時って非情ね。あんなに勢いのよかった太陽も、今は少し陰って、もう間もなく夕方が来るんですもの。ねえモーリイ、もう間もなくわたしたち、別れなくっちゃならないわ。父さんには、夕方の六時頃までには帰るって、言って来たんですもの”

“そんな約束なんか、少しぐらい破ってもいいじゃないか”と、モーリイは言った。

“ダメよ”と、リディアは言った。“父さんに疑われて、ぶたれるに決まっているわ。わたし、もう本当に、あまりぐずぐずしてはいられないの”

“そうか。残念だなあ”と、モーリイは残念そうに言った。“でもまだ四時過ぎだぜ。まだ少しぐらいなら、いいんじゃないのかい？”

“ええ、まだ少しぐらいなら”と、リディアは答えた。

“だったら、残された少しの時間を有意義に使わなくっちゃ”

それは、モーリイが感じた正直な気持かも知れなかった。そしてその気持の現れなのか、彼は、リディアを一層強く抱きしめた。

リディアは、強く抱かれるまま話し続けた。

“モーリイ、きょうは本当に楽しかったわ。やって来た湖も、お天気にもめぐまれて、なにもかも本当に素晴らしかった。わたし、さっきうたた寝したとき、素敵な夢を見たわ。きれいな湖があって、緑もきれいで、そして、島からその湖に向かって、とっても素敵な、木で出来た浮き見堂が張り出しているの。橋を伝って屋根のあるその浮き見堂に行くと、今は人には利用されてなくて、物置になっているの。木材の切れ端や、新聞紙などに混じって、そこに何があったと思う？ 教えてください。わたしの大事な大事な宝物。わたしの書いた物語のノートがきちんと整理されて、置かれているの。でも風雨にさらされて置かれているのが気になって、わたしはその上に新聞紙をかぶせ直そうとしたわ。なんといっても、そのノートはわたしの命だったんですもの...”

“へえ～、そのノートには何が書いてあるんだい？”と、モーリイは興味ありげに尋ねた。

“それは秘密”とリディアは答えた。“わたしの夢はね、わたしの生活を基にした素晴らしい物語を書くことよ。それが、自分の夢の中で、わたしの気持を先取りした形で現れたのね。でも素敵じゃない。湖上に張り出された浮き見堂の中に、大切にしまい込まれていたなんて...”

“まあたまには珍しい夢を見るものさ”と、モーリイは、意外とそっ気なく言うのだった。“――でも、正夢ってこともあるし、何年か、あるいは何十年か経って後、ぼくが実際に、そんな浮き見堂で、君の書き残したノート類を発見したりしてさ”

“そしてそのときは、もうわたしはこの世にいないの？”と、リディアは言った。“いやよ。ノートだけ残すなんて、そんな寂しい人生を歩みたくはないわ”

“まあ冗談さ”とモーリイは言った。“でもそこに書かれている内容が素晴らしいものなら、なおさらいいじゃないか”

“素晴らしい人生。そして素晴らしい物語ね”

と、リディアはうっとりするように、モーリイの肩に頭をもたせかけるようにして言った。

“本当に、そんな人生をこれからも歩んで行きたいわ...”

二人は、もうそろそろ別れねばならない時が来たことを悟った。

“ねえ、わたしたちの夏はもうこれでお終いな？”と、リディアは寂しそうに言った。

“ああ、お終いかも知れない”と、モーリイは冷静に答えた。“これからまた仕事が入って忙しくなるんだ。今度会えるとしても、秋になるかも知れないな”

“秋まで会えないの”と、リディアは悲しそうに言うのだった。“じゃ、あそこにいる白鳥たちも、みんな帰ってしまった後なのね...”

“でも、そんなことを言ってる間にもう秋はやって来るさ”

二人はしっかりと立ち上がった。そしてもう一度、この夏の記憶をしっかりと胸に刻み込むかのように、しっかりと抱き合った。やがて二人は、持って来た荷物を片付け始めた。モーリイは、トランペットを丁寧に拭き、リディアは、バスケットや敷物をきちんと自転車の籠に入れた。

すっかり片付け終わると、リディアが自転車を押しつつ、二人は歩き始めた。

リディアにはこの日の出来事がまるで夢のようにも思え、胸がつまりそうだった。こうしてモーリイと歩いているのが、なぜかしら悲しかった。それにひき比べて、モーリイは、意外とあっさりして、冷静だった。

湖を去るとき、リディアはもう一度、白鳥の浮かぶ、静かな湖の方に振り向いた。さざ波を立てるきれいな湖面と、誰もいないはずの岸辺の草原に、自分たち二人が今もなおじっと坐っていて、楽しげに、どこか遠くを指さしているそんな姿が今もなお目に浮かぶような、そんな気がリディアにはしたのだった。

モーリイとは駅で別れ、長い道のりの中、リディアは家に帰って来た。

今となっては、何もかも思い出となってしまった楽しい一日。リディアは、モーリイと本当に別れることになってしまった駅のことを思い出すのだった。

非情な列車がやって来て、それはモーリイを呑み込んで、リランという、未だ見たことのない街へと彼を連れ去って行った。リディアは一生懸命彼に向かって手を振った。彼も窓から身を乗り出して、それに答えてくれた。

“今度はいつ会えるの？ モーリイ”と、リディアは念を押した。

“秋さ。秋になったらまた手紙を送るからね”モーリイはそう叫んだ。

列車がすっかり去ってしまうと、リディアはひとり寂しく自転車に飛び乗った。もう日はかげり、空にはうっすらと、夕闇が迫ろうとしている。夏の日暮れは遅く、その時まではまだずっと先だということをリディアは知っていたが、もう既に、リディアの心の中はすっかり夕暮れとなっていたのだった。

谷間を流れる溪流に沿って、我が家へと帰って行くリディアの目には、いつしか涙があふれて来た。こんなに楽しくて、そしてこんなに悲しい夏を経験するのは初めてだ、とリディアは思った。

でもまた秋になれば――それがリディアにとっては唯一の希望だった。

谷間の彼方に見え隠れする夕陽に向かって、リディアはどこまでも、どこまでも、自転車を走らせ続けた。

父レオノールは、帰って来た娘を見ても、リディアがそんな経験をしたとは少しも疑わなかった。

リディアが帰って来るなり、居間のソファーに腰掛けていたレオノールは、ただ一言、“きょうの学校はどうだった？”と言っただけだった。

リディアは、自分の部屋に戻るなり、もう一度泣いた。

きょうの一日が余りにも幸せで、今の境遇が余りにも不幸だと感じたからだった。

ベッドの上に頭を埋めると、涙がどつとあふれ出し、いつまでも泣き続けるのだった...

そうこうしているうちに、いつのまにか秋となった。

リディアは、一度、モーリイをあきらめようと思ったことがあった。めったに会うことのないモーリイのことを思い続けることは、忍耐の限界を越えていると思ったからでもあった。だが、彼に対する思いは断ち難く、ズルズルと彼との手紙のやりとりだけは続けて来た。

そして今では、精神に対する一定の安定を得ていた。父は相変わらずで、トランプによるバクチをやめようとはしなかった。夏になって、腰を痛めてからは、今までのように友人の家へ遊びに行くのではなく、昼日中から、好んで、仲間を家に招待するようになった。案の定、やって来たのは、粗野で、がらの悪い連中ばかりで、昼っぱらから酒を飲んで騒ぐのだった。リディアは、彼らと顔を合わすのがいやだったが、仕方なしに、給仕などに利用されるのだった。

あるとき、“酒はまだか！”の催促で、仕方なしにお盆に載せて持って行くと、彼らのうちの一人が突然、リディアの腰の周りに腕を回し、リディアをギュツと抱き寄せ、自分の膝の上に彼女を坐らせようとした。

そのときはさすがにレオノールもムカッとしたようだった。

“うちの娘に手を出すな！”と、レオノールは叫んだ。

リディアは何も言わなかったが、腹立たしく、また情けなくて、泣きたいぐらいだった。

男から解放され、戸口へと戻って行ったとき、今度は彼女は、レオノールも一緒になって笑っているのを耳にした。

“でもフローバさんよ、あんたの娘は、なかなかのべっぴんだぜ”と、男は言った。“ちょっとぐらい手が触れたって、そうムキになりなさんよ”

“だってあれは、今一番難しい年頃なんだ”と、レオノールは答えた。

“なんだか聞くとところによると、学校へ行かせてるんだってね。ようやるよ、全く”と、例の男はまた言った。“変な教育をつけたりすると、それこそ、あんたから離れて行くかも知れませんぜ”

“人のことはほっといてくれ”とレオノールは言った。

“でもあんただって、娘さんがべっぴんなのは認めるでしょ”と、男は続けた。“男なら、ほっときゃせんよ。あんなべっぴんさんを。現にあんただって、この前は、ギースさんの家で、女中さんに手をかけていたじゃないか”

“こら、声が高いじゃないか”と、レオノールは怒鳴った。“うちの娘がまだそこにいるんだ。言葉に気を付けてもらわないと”

そう言って、彼らは一緒になって、笑ったのだった...

リディアは、ドアを締めて自分の部屋に戻った。外は、雨の降るうっとおしい天気だった。遠くの森が小雨にけむるように、リディアの胸の中も、涙にぬれていた。

モーリイと会わなくなって随分長いと感じた頃、リディアは再び学校に戻り、普通の生活に戻ったが、リトイアで気晴らしのようなものに心が惹かれることもあった。

それは、いつも通る町の通りで、一ヶ所、興味を惹く劇場の看板が、いつも目に止まり、固く閉ざされた木の扉の中は、どんな風になっているのか、日増しに気になって来るのだった。一度は中に入ってみたいと思うのだったが、リディアの小遣いでは、とても入れそうにないのだった。そしてある日リディアは、ついに夢にまでその劇場を見るようになってしまった。夢の中で、いつものように彼女がその前を通りがかると、大勢の婦人が珍しくその前に群らっていて、今から婦人たちがその中に入って行こうとしているのだった。今がチャンスだとリディアは思った。今なら扉が開いていて、その中を見ることが出来る。リディアは、通りすがりに、婦人たちの手前から出来るだけ背筋を伸ばし、首を長くして、その内部を見ようとした。すると――思っていた通り、内部は素晴らしい劇場だった。小さくて、そんなに大勢入ることはできなかったが、整然とした椅子の向うに、きちんと、薄いピンクのビロードの天幕やカーテンでおおわれた舞台と、さらにその舞台の奥に、同じようなビロードの天幕やカーテンに囲まれた長方形のスクリーンとが見えていた。その奥行きが深い、品のある、小さな劇場の光景は、一目見ただけで、リディアの胸を魅了し、ますますその劇場に入ってみたいという思いは募るばかりだった。

目が覚めてからもリディアの思いは同じだった。本当にあの扉の向うは、夢に見たあの光景通りなのだろうか。そしてもしその通りだったとしたら、あの舞台の上にモーリイが立って、演奏をしてくれるのではないだろうか。そしてわたしは、演奏を終わったモーリイに、あの劇場の、あの舞台の上へ、花束を持って行く...

そんな子供じみた想像をふくらませては、リディアは自分の心を慰めた。

リディアはしかし、次の日、その小劇場の前を通っても、固く閉ざされた木の扉の中へ入って行く決心がつきかねた。それよりももっとリディアの心を変えたのは、あの、夢の中で見た素晴らしい劇場の内部は、あくまでも夢の中にとどめておいて、もう永久に、この劇場の中へ足を踏み入れるのはやめよう、ということだった。事実が、もしあの夢を壊すことになるのなら、なんにもならないのだ。

そんなことを考えながら、後ろ髪を引かれる思いをしながら、リディアは小劇場の前を通り過ぎて行った。劇場の前には、夢で見たような婦人たちの集まりはなかったが、しばらく走ったとき、驚いたことに、まるで夢に見たような婦人たちのグループに出くわしたのだった。お互いに何かしゃべりながら、ある者は子供の手を引きながら、前の道を立ちふさがるように、前の方へと歩いていた。

そしてちょうど橋にさしかかったとき、リディアは向うから来る誰かと、肩を触れ合ったような気がした。

その相手が誰だろうと振り向くなり、突然、痛いほどの力で、リディアの手首を握る者がいた。

見ると、頬に切り傷のある、品のよくなさそうな男だった。

“お嬢さん、オレの体にぶっつかって、逃げて行くことはないだろ”

と彼は、大きな、太い声で怒鳴った。

“何もわたしは、逃げようなんて...”と、リディアは、少し興奮気味に答えた。

“まあまあ冷静に”と、男は、なおも手を握りながら言った。

周りでは、この出来事を、遠巻きに見ながら歩いて行く婦人たちは大勢いたが、止めに入ろうとするような人は、誰もいなかった。

“この片を、どのようにつけようと思っているんです？”男は、薄気味悪い笑いを浮かべながら言った。

“この片をつける、ですって！”と、リディアは、顔を青ざめながら言った。“じゃ、とにかく、警察へ行きましょう。そこで、詳しくお話ししますわ”

“警察だって！ 何を考えてるんだ！”と、男は急に態度を変えた。“なめるんじゃないぜ！”

そう叫ぶなり、ピシャリッと、リディアの頬を痛いほど強く打ったのだった。その余りの強さに、リディアは、思わず路上に倒れてしまった。

男は、そんな彼女を面白そうに見つめ、ニタニタと薄笑いを浮かべていた。

“よく覚えておけ。オレにぶっかったらどんなことになるか。まあ、きょうのところは許してやる。しかし今度は気をつけな！”

そう捨てぜりふを吐くと、男は、その場から去って行った。

そのときになってやっと、婦人のひとりが駆けつけて来て、リディアを抱き起こした。

リディアの服は泥だらけになり、唇を少し切って、血がにじみ出していた。まだ恐ろしさで気が動転しているリディアに向かって、その婦人は励ますように言うのだった。

“まだこの程度で済んでよかったよ。全く、あいつはね、ここらでは、札つきの悪党だよ。よくあんたも踏んばったわ。他の人なら、身がすくんでしまって、何も言えないところだよ。本当に、何もなくてよかったわ”

リディアが、みんなのしている前でよろよろと立ち上がると、そのおかみさんは、リディアのスカートに付いた泥などを払ってくれた。

やがてリディアは、倒れていた自転車を起こし、フラフラとその場から去って行こうとした。

心は、ショックと悲しみとで、いっぱいだった。

やがて、自転車で乗って風を切り始めたとき、リディアは、向うに浮かぶ雲に向かって心の中で叫んだ。

“ああモーリイ、あんたがいないからこんな目に会うのよ。わたしを助けて。わたしをこの生活から救い出して！　お願い、お願い、モーリイ...”

季節が秋となってから、日は一段と足を早めるように、リディアには思われた。空はいつもどんよりと曇っており、その空のように、リディアの心も曇っていた。

授業のとき、リディアはふと、目の疲れをいやすかのように、黒板から窓の外へ目を転じた。校庭にはシナノキが茂っており、マツムシソウの青い花が雑草に混じって、さやさやと揺れていた。するとリディアはもう授業のことは忘れてしまい、ふと、小学校の校庭でも、同じような光景を目にしたことを思い出したのだった。すると、たまらなく、なつかしさのようなものが胸に込み上げてきた。あの頃、一緒に遊んだ友だちは、今はどうしているだろう。みんな一緒になって、栗拾いや、虫取りや、川遊びに熱中したものだ。小さいときは、お父さんもそれほどうるさくはなく、それで行けたのだ。家の手伝いはさせられたけれど、そうでない日は、日が暮れるまで、みんな一緒になって遊んだものだ。でもみんなはそれぞれの人生を歩み、わたしは今、高校で授業を受けている。ここまで進学できた者は、あの友だちの中でも、自分ひとりしかいないのだ。

そんなことをぼんやりと考えているとき、突然、数学の女の先生がリディアの名を呼んだ。

“リディアさん、今の話、お分かりになりましたか？　それじゃもう一度、今の楕円の方程式を言って下さい”

“楕円の方程式ですか？”と、リディアは驚いたように言った。

“それじゃこちらに出て来て、黒板に書いてくれますか”

先生の手招きで、リディアは衆目の集まる中、椅子から立ち上がって、おずおずと前に歩み寄った。そしてチョークを受け取ったが、もちろんただの一つも書くことができなかった。リディアはもう恥ずかしさでいっぱいだった。

“ダメじゃないですか”と、先生は、そんなリディアを叱りつけた。“聞いてなかったんですか。だったら、そこに立ってなさい！”

リディアは言われるまま、教室の隅に立たされた。

“それじゃ、アーソン君。代わりに書いて下さい”

先生がそう言うと、眼鏡をかけた、いかにも秀才そうな生徒が黒板のところにやって来て、スラスラと、座標軸及び方程式、そしてその結論になる、

$x^2/a^2 + y^2/b^2 = 1$ の楕円の方程式を書いたのだった。

“よくできましたね”と、先生は、微笑みながら、その生徒を讃えた。

そして授業の中身は、次の問題へと移行して行った。

リディアがやっと解放されたのは、30分ほどしてからだった。

自分の席に戻って来ると、友だちのキャシーが、心配そうにリディアに声を掛けた。

“ひどいわね、立たせるなんて。疲れたでしょ。何か心配事でもあったの？”

“うう～ん、大丈夫よ”と、リディアは答えた。“あんなところに立たされるなんて、恥ずかしいわ。でも、本当になんでもないの。有り難う、心配してくれて、キャシー”

放課後、リディアとキャシーとは、教室前の廊下を歩いていた。窓の外の空は、もう今にも雨が降って来そうな空模様だった。教科書を胸に抱えるリディアは、先日の劇場の話しを、キャシーにした。するとキャシーは、その劇場に興味を示し、

“一度行ってみましょうよ”と、リディアを誘ってくれた。

“でも、つまらない劇場だったら、あんたに悪いもの”と、リディアはキャシーに言った。

“出しものはどうしても、劇場の中が、あんたの見た夢のようだったら面白いもの”と、キャシーは言うのだった。“ねえ、面白そうだから一度行きましょ”

“でもまたあのヤクザに会うわ”と、リディアは言った。

“ヤクザなんて！”とキャシーは勇ましく言った。“今度すれ違えば、あんたがそいつを殴る番よ”

“まあ、よく考えてみるわ”と、リディアは答えた。

リトイアに住むキャシーとは、校門まで来ると、もうそこが別れ口だった。

ところが雨がパラパラと降って来て、リディアは、雨がっぱを身にまとわねばならなくなった。

それを見てキャシーは、

“今晚は、雨が強そうよ。家に帰るのはあきらめて、わたしの家に泊まらない？”

と言ってくれた。

彼女の家には、両親も妹も兄もいる。みんな幸せそうで、楽しい人たちだった。

確かに、明るい彼女の家庭に行くのは魅力的だった。

でも、リディアは首を横に振った。

“いいえ、やっぱり帰るわ。家では、お父さんが待っているもの”

“こんなに暗くなっているのに？”と、キャシーは言った。“それにこの雨よ。そのうち、川が増水して、帰れなくなるかも知れなくてよ”

“わたしって、こんな天気も好きなの”

リディアは、目いっぱい言ってみたつもりだったが、心の内側では、その気持とは正反対だった。こんな雨の降る、暗い中をひとり自転車に乗って帰って行くのは、わびしくて辛い気持だった。

でもリディアは、キチンと雨がっぱを着た。そして、うらめしように雨を運ぶ空を見上げると、

“さようなら、キャシー。またあしたね”

そう言って自転車に飛び乗った。

校門に立ち、手を振りながらリディアを見送るキャシーの姿を後ろに見ながら、リディアはもう泣きたいほどの悲しい気持だった。

長い、寂しい谷沿いの道のりの後に、やがてぼんやりと、雨と霧にかすんで、夕闇に包まれたサビーノの村が、ひっそりと見えて来る。それを目にしたとき、自分の住んでいる村は、なんとわびしいのだろうと思うと同時に、ほっと胸をなで降ろすような気になったのも事実だった。どんなに寂しくとも、そこが唯一自分の帰って行ける我が家には違いなかったのだ。

もうすっかり日が沈もうという頃、雨でボトボトになったリディアを、珍しくレオノールが玄関まで出迎えてくれた。

“すごい雨だったろう。ぬれなかったか”と、レオノールは言った。

“ええぬれたわ”と、リディアは、首のひもをはずしながら答えた。“でも、雨がっぱのおかげで、大したことにはならなかったみたい”

“そうか。かっぱがあったんだな”とレオノールは言った。“さあ、中に入りなさい。熱いコーヒが用意してあるからな”

レインコートをすっかり脱いで家の中に入ると、居間のテーブルには、確かにコーヒがあって、暖かそうに湯気を立てていた。

リディアは、髪についたしずくをタオルでぬぐうと、そのままテーブルのそばに行き、暖かいコーヒを口に運んだ。なんとも言えない香りと暖かさが、のどの奥を通った。

何気なく窓に目を向けると、窓の外は、しとしとと、なおも雨が降り続いていた。

レオノールが、ボタンと木の扉を閉め、家の中に入って来た。

そのようにして、この日もゆっくりと、暮れて行くのだった...

十六才のリディアの高校生活の秋には、課外活動として、山へのハイキングもあった。

それを引率してくれる体育の先生は、背も高く、ハンサムで、女の子のあこがれの的でもあった。リディアは、キャシーに誘われて参加することにした。

秋の山の緑は、一段と濃く色づき、美しい。しかし、バスに乗ってひとたびリトイアの町から郊外に来ると、まだ人の手の加わっていない荒野が広がっていた。まるで荒海がうねるようなごつごつした荒れ地に、草がのび放題に生え、ピューピューと吹きすさぶ風に揺れるに任されていた。

みんなは、背中にリュックをかつぎ、歌を歌いながら、一列になって歩いた。

総勢は、男の子五人も含んで十五人ほど、圧倒的に女子学生が多かった。

しかし歩くにつれ、空模様が段々と怪しくなり、あまり快適なハイキングとは言えなかった。そのうち、雨がパラパラと降って来た。

向うの方では、まだ空が青いのに、変な天気、とリディアは思った。

しかし、雨まじりの風の為に、みんな急いで森の方へ避難しなければならなかった。みんな、持って来た雨がっぱをリュックから取り出し、頭からすっぽりかぶると、避難して来た木陰に坐り、このハイキングをだいなしにしそうな曇り空を、うらめしそうに眺めた。

避難した生徒たちは、仲良し同士、いくつかのグループに分かれた。

リディアたちは、たまたま、人気のある先生のそばにいた。

“ねえ、先生。このままで、大丈夫でしょうか”と、一人の女生徒が、先生に尋ねた。

“分からないな”と、先生は、うっとおしそうに空を見上げながら答えた。“このまま雨が降り続けば、ハイキングは中止せざるを得んな...”

そう言っている間にも、雨は本降りとなって来て、木陰の雨宿りでは、とうていしのげない状態となって来た。先生は、やむなく、さらに森の奥へと、みんなに避難指令を発した。

しばらく行くと、森の中に、一軒のレンガと石で出来た古そうな建物が見え、その軒先へ、みんな避難すべく飛び込んだ。そして門をドンドン叩いてみたが、中から返事のないところを見ると、どうも長いあいだ空き家となっているようだった。

幸い、誰かが、横の割れた窓ガラスから中に入ることができ、みんなの為に、中からその門をあけてくれた。古びた頑丈そうな木製の門は、ギューツと言う、いかにも古びた音をたてて、開いた。家宅侵入には違いなかったが、激しい雨の為、この際、そんなことは言うてはいられなかった。

中は、思っていた通り、ほぼがらんどんで、古ぼけたテーブルが、ほこりをかぶっているばかりだった。内部はそれほど広くはなく、みんなは、雨から逃れられてほっとすると同時に、気味悪そうにその中を見つめながら、中に入って行った。

“雨が止むまでのあいだ、この中にいて、じっとしていよう...”と、先生はみんなに言った。

それで仕方なく、生徒たちは、めいめいの場所に腰を降ろした。

外は、相変わらず強い雨で、割れたガラスのすき間から、風が容赦なく、室内にも吹きつけて来た。その風は、肌寒いほどだった。

リディアたちは、ぬれたかっぱを脱ぎ、床に広げて乾かすと、お互いが、体を暖めるように、身を寄せ合った。

そこへ先生がやって来た。

“きょうは大変な日になってしまったね”と、先生は言った。“全くついてないけど、こんな日もあるということさ。仕方ないから、何か、お話しでもしてみようか”

すると、身を寄せ合っているリディアを含めた女生徒たちは、一斉に、“して！して！”と、先生にせがんだ。

“じゃ何か、不思議な話しの一つをね”と先生は言った。

その話しというのが、リディアには、とても印象深く、後々にまで記憶に残ることとなった。

こんな雨の日にふさわしく、一人の女生徒が汽車に乗ってひとり旅を続けていた。

外は曇り空で、憂鬱な一日だった。女生徒は、見知らぬ街の風景に心を奪われながら、ぼんやりと流れ行く車窓の風景を眺めていた。汽車に乗り合う人の数は少なかった。地元の人と思われるおばさんや子供たち、それに学校に通う地元の中学生など数人しかいなかった。

窓の向うには、やがて、操車場と思われる、レールがいっぱい敷かれた雄大な風景が目飛び込んで来た。そこには、様々な貨物や黒い車体をさらしたタンク車などが、曇った空の下で、寂し気に打ち置かれていた。

と間もなく、小さな駅に来て、そこでは、乗っていたわずかな乗客が、みんな降り出しとうとう車内は、その女学生一人ぼっちとなってしまった。

彼女は、ひとりぼっちになって、あせりにも似た気持になったが、列車は、そんな彼女を乗せて、なおも次の駅へと向かって走り続けるのだった。

女生徒は、揺れるガラーンとした車内の中で、心細くなって来た。見知らぬ街へやって来たとは言え、この列車は、どこへ向かおうとしているのだろうか？

車窓の風景は、さらに寂しいものとなって来た。工場や倉庫が見えるが、この日は、休日のせいか、人気もなく、ひっそりとしている。そして、その周りをおおう草むらは、ただ伸び放題になっているばかりだった。

見渡す限り、ただ荒野と、工場及び倉庫のある場所が、この列車の目ざす次の駅で、しかも終着駅だった。

列車が静かに止まり出すと、女生徒は、胸を高鳴らせながら、プラットホームに降り立った。

なんと寂しい所にやって来てしまったのだろう。終着駅のさらなる先の方には、大きな橋が掛かっているのが印象的だった。しかし、それ以外には、何もない。確かに、人気のない工場や倉庫はあるが、人の住む家は、そして宿はあるのだろうか？

女生徒は、折り返し運転のこの列車に乗って引き返そうと思って、発車時刻を車掌に尋ねようと思ったが、そそくさと車掌はプラットフォームの向こうに消えてしまい、尋ねることができなくなってしまった。それで、あわてて発車時刻表を見に行った。すると、次の発車まで、三時間も待たねばならないことが分かった。

もう降りるしかなかった。改札まで来て、せめて駅員に何か話そうと思ったが、驚いたことに、その駅員がいないのだ！ まるで無人の駅。そして、ここは、無人の街ではないのか。そんな風に思って、女生徒は、いっそう胸をドキドキさせた。

実際、彼女の悪い予感当たったようだった。駅から外に出て、工場街に降り立っても、人っ子一人見当たらなかった。そのくせ、犬や猫が、まるで我が物顔のように通りをほっつき歩いている。

女生徒は、心細い気持を抱きながら、当てもなく、街角を歩き続けた。行けども行けども、寂し気な工場や倉庫が続くだけで、人の気配はない。

“誰か、せめて誰か、姿を現してちょうだい！”と、彼女は叫んだ。

だが、工場街は、そんな彼女をせせら笑うかのよう、ただ彼女のこだまが返って来るばかりで、なんの返事も返っては来なかった。

しかし歩いているうちに、彼女には分かって来た。この入り組んだ工場街の向こうには、雑草におおわれた荒野と共に、その彼方に、茫洋と広がる海があることを。

ともかくそこへ行こう、と彼女は思った。船に出会うかも知れず、誰かに出会うかも知れない。

ついに彼女は、海辺にやって来た。だが、曇り空で、海は、ぼんやりと霧に包まれていた。さっきの大きな橋が、この海に掛けられていることが、彼女には分かった。しかし、分かったことは、ただそれだけだった。人もいず、船もいなかった。

しばらくのあいだ茫漠たる海を眺めた後、彼女は引き返すことにした。

どこに？ 彼女に当てなどはなかった。ただ三時間後の帰りの汽車に乗ることだけだった。しかし汽車は、本当に定時に出発してくれるのだろうか？ そんな不安が、さっと彼女の胸を過った。

そのときだった。海辺から工場街の方へ振り向いて眺めたとき、その工場街の中心部辺りから、急に、黒雲のような煙がモクモクと立ち込めたかと思うと、その黒い雲は、巨大な人影のようになり、ついには、ギョロリとした二つの目がつき出し、それは、恐ろしい形相で、まっすぐその女生徒の方を見つめ出した。

女生徒は恐ろしくなって、両手で顔をおおうと同時に、海岸に沿って逃げ出した。

だが、その巨大な黒雲から伸びた腕は、そんな彼女をひとつかみできるような勢いだった。

“待て！お前”と、その黒雲はついに叫んだ。“何を恐れることがある。わしは決して怖い者ではない。わしは、お前が今思っている心の影に過ぎないのだ”

その言葉で、女生徒は、少しは心が柔いのか、恐る恐るその場に立ち止まって、その黒雲を見つめる余裕さえできたようだった。

黒雲は、彼女の方を見つめながら、モクモクとその表情や姿を変えながら、なおも続けた。

“わしは寂しさの精だよ。そんなものを見たものはおらんだろう。だがいるのじゃ。現にここにな。何も悪いことをしようと思っっているのじゃない。だがときたま、こんな寂しいときに、人の前に姿を現すことがあるのじゃ。わしは、人に危害を加えようなどとは思ってはおらん。ただ、わしの存在を知って欲しいだけなんじゃ。あんたは幸運にも、わしの存在というものを知った。わしの存在――それは、あんたの魂と一対のものなんだ。わしのような魂を持っていない限り、わしを見ることはない。だが、あんたはわたしを見た。それは、あんたが、わたしの魂と似ていたからなんじゃ。つまりわしは、さっきも言った通り、寂しさの精なんじゃ。寂しい――本当に寂しさを知っている者だけが、わしの魂を理解することができる。そして、そんな魂を持っている者の心は、清らかだ。本当に清らかなんじゃ。その清らかな魂をいつまでも大切にすることがいい。それは、あんたの人生を豊かにしてくれるはずのものじゃ。わしの言いたかったことはそれだけだ。わしと出会ったことを幸運に思うがいい。そんなことはめったにないことだからな”

そんなメッセージを伝えた後、その人影をした巨大な黒雲は、あたかも空に浮かぶあの黒雲の仲間になるかのごとく、スーッと天空の方へと消えてしまうのだった。

彼女は、海辺にひとりとり残されて、身も心もすっかり震えていた。

しかし、恐怖の心と同時に、なにか、真理を悟ったときのような、晴れ晴れとした気持ちになっていたのも事実だった。

彼女は、その後、その街から出たのか？ そのこのところは分からない。

しかし、その体験があってからというもの、彼女が、幸せな、豊かな人生を送って行ったことは、もう間違いのないことだった...

先生がすっかり話し終えたとき、先生は、周りを取り囲むように坐っている生徒のひとりひとりに対して、まんべんなく話しているようだったけれど、リディアには、その話しは、まるで自分ひとりの為に聞かせてくれたような気がして、胸が詰まる思いだった。

だって、寂しさの精なんて、まるでわたしの為に話してくれたようなものじゃないの、とリディアは思った。しかしいずれにせよ、その話しによって、リディアは勇気づけられる思いがし、ますますその先生が好きになった。

“でもね”と、先生は最後に言った。“この中に寂しがり屋さんがいるとしても、それでいいと思っただけはダメだよ。寂しさの精はなんでもお見透しだからね。寂しがり屋さんがどんな風に生きて行くのか、じっと見守っているんだからね”

それで、生徒たちはお互いの顔を見合わせたが、誰もあえて、自分がそうだと名乗るようなそぶりを見せる者はいなかった。

そのときだった、ひょいと窓に目を向けた男子生徒が叫んだ。

“先生！雨がやみました”

その声で、みんな一斉に窓の外に目を向けた。

窓の外、軒先からはまだ雨滴がポタリと垂れていたが、確かに雨はもう降ってはいなかった。嵐が来て、先生のお話の前には、あれほど風にゆさぶられていた庭の樹木も、今はピンと立っていた。そして遠くの空は、雲が切れて、日光が顔を出して、美しく光ってさえた。

“さて、もう出ようか”外に目を向けていた先生が、振り向いてみんなに言った。

その声で、みんなぞろぞろと外に出始めた。

リディアも、仲良しのキャシーと一緒に外に出た。もう雨はすっかりやんでいた。そして、出しなにちょっと立ち止まり、美しい彩りで輝いている西の空を見つめると、急に、なぜか晴れ晴れとした気持ちになって来るのだった。先生の話しがそうさせたのだろうか、不思議だが、あの話しの主人公がわたしだ、という気がして来るのだった。

そのとき、ふと肩に手を触れる者がいて振り向いた。

先生だった。先生は、優しい顔つきで、リディアを見つめた。

“リディアだね”と、先生は言った。“今の話し、気に入ったかい？”

“ええ、とっても”と、リディアは、何かに魅せられたような顔つきで答えた。

“じゃよかった。さあ行きなさい”

先生の言ったのはそれだけだったが、リディアはすっかり上がって、もう胸がいっぱいになってしまった...

秋は深まり、木々は色づいて、落ちた木の葉が川に運ばれて行く...

静かな村の大地が夕闇に包まれて、丘の上の雲が黄金色に輝くとき、リディアは一層、もの寂しさを感じるのだった。

村の大地は美しい。荒涼たる丘。そして素晴らしい光。紅葉した木の葉や、風に揺れる樹木。咲き匂う花々。

だがリディアは、もの寂しさを禁じ得なかった。レオノールと二人きりの今の暮らしが、まるで一人ぼっちの生活のように思われたのだ。

自転車に乗って、美しい花の丘を駆けても、幽玄な村の山を登ってみても、リディアの心はおさまることはなかった。

モーリイ。リディアの思うことはそれだけだった。

リディアはさっそく、モーリイに手紙を書いた。

すぐ来て。寂しくて、死んでしまいそう。

そんな内容の手紙だった。

しばらくして、モーリイから返事が来た。

忙しいけど、会いに行く。駅まで迎えに来るように。

いよいよその日が来て、リディアの胸は高鳴った。

あの夏の日以来、本当に久し振りに、モーリイと会うことができるのだ。

その日は、空は晴れていたが、北風が強く、落葉が宙に舞って、寂しさが心を突き刺すような、日だまりの休日だった。

リディアは、珍しく、赤いカーディガンを羽織って出掛けた。

野良仕事をしている村人も、リディアが自転車に乗って出掛けて行く姿を見ても、別になんの不思議も抱かなかった。

リディアは、丘を走り、荒野を突き抜け、森を通り、谷間の川岸を走り、そのようにして、ようやくリトイアの町にやって来た。

駅は、夏ほどの賑いはなく、閑散としていた。観光客を呼び込む露店もなければ、夏のあいだのあの賑やかな掛け声もなかった。表通りは、街路樹の葉が落ちて、路上に一面降り積もっていた。リディアは、自転車に乗って駆けつけて来ると、街路樹の一つに自転車をたてかけ、そのまますぐ駅に駆けて行った。

列車は到着して、丁度出発したあとだった。リディアは、息を切らせて、ホームに駆けつけて来た。動く列車が、みるみるうちにホームから遠ざかって行く。到着した人々が、めいめい何か話し合いながら、やって来たリディアには気付かずに通り過ぎて行く。リディアは、そんな乗客の中に、彼はいないかと、頭をせわしく動かして、捜し出そうとした。

すると、ついに見つかった。降りた人々の最後尾のところに、トランクを担いだ一人の男が立

っており、それがモーリイだった。

すると、リディアのそれまで緊張していた顔は、急にほころびて、彼に向かって、思いっきり、手を振った。彼も、リディアに気づいたと見え、手を振ることで応じた。

やがてモーリイはやって来て、リディアは彼の胸の中に飛び込むなり、しっかりと抱きしめた。嬉しさの余り、目からは涙が、こぼれて来てしまいそうだった。

“モーリイ、会いたかったわ”と、彼女は、モーリイの胸の中に頭を埋めて言った。

モーリイも、優しくそんな彼女を抱いた。

“ぼくもさ”と、モーリイは言った。

それから小声で、“リディア、こんなところで抱いているのはよくないよ。みんな見ているよ。だから、どこか、適当なところにでも入ろう...”

そう言って、モーリイは、彼女の背中に手を当てながら、歩き始めた。

リディアは、すぐには彼から離れる気にはなれなかった。彼を抱き締めながら、一緒になって歩いた。

駅を出てしばらく行くと、メインストリートから少しはずれたところに、感じのいいレストランがあるのが目に止まり、リディアは、モーリイに言われるまま、中に入った。

室内は、思っていたよりも広くて、大きなガラス窓から見える外は、緑が多く、ぜいたくな割には客が少なく、全く申し分のないレストランだった。

こんな高級なレストランに飛び込んだのは、リディアには初めての経験だったので、幾分かリディアは緊張した。それに比べてモーリイは、彼には経験があるのか、不思議なくらい落ち着いていた。

ボーイがやがて、窓際に席を取ったこの若い二人連れのところにやって来て、注文を取った。

モーリイは、慣れた口調で、次々と注文をした。

“あんた、結構慣れてんのね”と、ボーイが去るなり、リディアは言った。

“リランじゃ、ときどきあるんでね”と、モーリイは、素っ気なく答えた。

“じゃ、こんな田舎のレストランなんて、あんたにとっちゃ、なんでもないのね”

“まあそういうことさ”

そう言って、二人はにっこりと笑い合った。

“ねえ、あのとき以来ね”やがてリディアは、ポツリと言った。“随分と長かったわ。最近はどうしているのよ”

そのとき、ボーイがやって来て、ワインを賞味させた後、料理を次々と並べて行った。

ボーイが去ると、モーリイは答えた。

“相変わらずさ。生活もよくなったり、悪くなったり、まあまあといったところかな。——でもね、変わったことと言えば、ちょっとした話しが舞い込んだのさ。リランも確かに大きな町だが、メロランスに来ないかって話しが出て来たんだ。確かにあそこは大都会さ。”

あそこなら、今のように不安な生活じゃなく、安定した生活が得られる。それに、今みたいに副業などせずに、好きなトランペットに専念することができるかも知れないしね”

“じゃ、あんた、メロランスに行くの！”リディアは、驚いた顔をして言った。

“行くっていても、今すぐというわけじゃないさ”と、モーリイは、冷静に答えた。“空気があってからの話して、早くとも、年末か、来年始め。遅ければ、春以降にズレ込むだろうな。だから、そんなにあわてた話しじゃないんだ”

“でもメロランスって”とリディアは言った。“ここからは随分と遠いところじゃない。そんなところへあんたが行ってしまえば、もう二度と、あんたとは会えないわ”

“そんなに怖い顔をするなよ”と、モーリイは、彼女をなだめるように言った。“だから、君の悪いようにはしないつもりさ”

“しないって？”と、リディアは、半分泣きたくなるような気持ちを押しえながら言った。

“だから、向こうに行って落ち着けば、そのときには君を呼ぶつもりさ”

“でもそんなの...”と、リディアはなおも言った。“いつになるか分からないじゃない”

“そう無理を言うんじゃない”と、モーリイも、少し興奮気味に言った。“ぼくだって向こうに行けばどうなるか分からないんだ。でも、これは生活の為さ。ぼくと、そしてもちろん君の為の”

“それ、本当なの？”と、リディアは、半ば疑うように言った。

“本気さ”と、モーリイは、冷静に答えた。“君はいつか、都会に出て行きたいって言っていたらう。その夢をぼくの手で実現させてやりたいのさ”

“本当、モーリイ”リディアの表情は急に明るくなった。“それが本当なら嬉しいわ。わたしの言っていたこと、あれ、決して嘘じゃないの”

それから、彼女は、思いのたけを、モーリイに語って聞かせるのだった。

“ねえ、わたしの夢は二つあるの。世間を広く見ることと、素晴らしい小説を書くことよ。今のわたしには、なかなか出来そうにないけどね。でも、是非やってみたい。どちらも本当に素晴らしいことじゃない。世の中にはきっと、この村では味わえないような、楽しい、素晴らしいことがいっぱいあるはずよ。わたしはそのことを、あの死んだ猫から学んだの。死ねばそれっきり、世間の素晴らしいことも味わわずに終わるわ。あの猫はそれで終わったの。みんなそうよ。だから、あの猫の為にも、わたしは生きてやりたいのよ。わたしが世の中を生きる時、そのときは、あの猫も一緒になって生きているのよ。そんな気がするの。わたしが世間を見つめているときは、そのときは、猫も一緒に世間を見つめているの。わたしの心の奥底から、わたしの目を通して、あの猫が世間を見つめているわ。そして言うわ。リディア、一生懸命生きなさいって！”

ねえ、それと同時に、まるでドラマのように生きるって、素晴らしいことじゃない。人には、色んな出会いと別れとがあるわ。もう二度と出会わない別れもあれば、思いがけない出会いもある。そういったことをわたしは小説に書きたいし、もし書ければ、どんなに素晴らしいことでしょ！ ねえ、わたしの言うこと、分かるわねえ、モーリイ。本当の愛に巡り会えるような、そんな小説が書きたいのよ”

“分かるよ。君が恋に恋する気持が”モーリイは冷静に答えた。“そんな素晴らしい恋に巡り会えて、そんな素晴らしい小説が書ければ、言うことなしだな”

“ねえ、わたしって、変わっているって、思わないでね”と、リディアは言った。“でも、たまらない気持なの。色んな、寂しい思いや、悲しい思いが、わたしを夢見がちにさせたの。そんな気持を抱くことなく、順調に育った人は、決してそんなことを考えないと思うわ。素晴らしい小説を書きたい、なんて！ でも、わたしは思うのよ。人との別れが余りにも悲しいから、また人との出会いが余りにも嬉しいから、そう思うのよ。それを、もっと真実なものにしたい。もっと幸せなものにしたいって願うのよ。だって――そんなことのない人生なんて、つまらないものね。愛する人と出会えるからこそ、幸せなのよ。そしてその為には、それぞれが色々な努力をしなくちゃならないわ...”

モーリイが、そんな彼女の目を見つめたとき、彼女の目は真剣で、生命力で輝いていた。

やがて二人は一緒にレストランを後にした。

街路樹は葉を散らし、木枯らしの冷たい風が街をおおった。リディアは、自転車を押しながら、モーリイと並んで歩いた。やがて二人は、リトイアを縫って流れる比較的大きなR...川のほとりにまでやって来た。川沿いには、プラタナスの木が植わり、家々が、互いに身を寄せ合うようにひっそりと建っていた。遠くに見える対岸は、もう一面森で、人が住んでいるのか、ただ寂しいばかりだった。川沿いのプラタナスの木は、葉を散らし、そのうちわびしい姿をさらすことになるだろう...

リディアは、着ていたカーディガンを、一層寒そうにたぐり寄せた。モーリイは、そんな彼女を抱き寄せるように、肩に手を当てた。

“随分寒くなったわね。そのうち、この街にも冬が来るわ”と、リディアは、風の舞う空を見上げながら言った。“ねえ、まだわたしは、この街や、この川から出ていないの。相変わらずわたしはここにいる。何度も目にしたこの川なのに、それでもまだわたしはここにいる。――ここがわたしは嫌いじゃないわ。でも、連れて行って。この街からわたしを連れ出して。お願い、モーリイ。本当によ”

“本当だとも”と、モーリイは、冷静に答えた。

“でもそれはいつなの？”

“だから、いずれにせよ、来年さ”と、モーリイは答えた。“来年になってからでないと、ぼく自身の生活のメドもついていないんだからね”

“分かったわ。それまで待ってみる”リディアは、自分に言い聞かせるように、足下を見つめながら言った。“でもきっとよ。これが口先だけだなんて、そんなことしないでしょね”

“大事な君の為じゃないか”とモーリイは、リディアに目を向けられて、安心させるように答えた。“どうしてぼくがそんなことするわけがある？ 来年になればきっとさ。きっと君を迎えに来る”

“嬉しいわ。モーリイ”と言うリディアの目は、喜びに輝くのだった。“来年になればわたしは、この街から出られるのね。そして、メロランスに行く。本当に素敵だわ。そのときが待ち遠しいぐらい”

“向こうに行けば、一緒にパッとやろうじゃないか”と、モーリイも嬉しそうに語った。“君とならやれるさ。何んでもね。苦しいときだって、一緒に乗り切れるさ。ねえ、ぼくが行って、君が来るんだ。こんなに幸せなことって、またとないことさ...”

“ねえ、モーリイ。自転車の後ろに乗る？”と、リディアは急に思いついたように言った。“この川に沿って、走ってみたいの。いいこと、重いけど、頑張ってみるわ”

“いいのかい？ ぼくが後ろに乗っても？”そう言いながら、モーリイは、おずおずと自転車の後ろに乗った。

一生懸命にこごうとするリディアは、初めは心もとなげだったが、よろよろと蛇行するうちに、ようやくスピードに乗り始めた。スピードに乗ると、リディアは急に勢いがついたようだった。

。

“じゃ、行くわね”

そう言いながら、心配するモーリイをよそに、リディアは、木枯らしの舞う川沿いの道を、葉の落ちたハンノキの並木を横切って、全速力で、笑いながら、声をたてながら、駆け抜けて行くのだった...

二百メートルほど走った頃、リディアはどうとう息を切らせてダウンした。自転車を止め、苦しそうに息をつくのだった。モーリイは、そんな彼女を見て、自転車から降りた。リディアも、自転車を投げ出すと、川岸のへりのところに腰を降ろし、遠く対岸に目をやった。リディアの額には、どっと汗がにじみ出ていた。モーリイも、彼女に気づかうように、その横に腰を降ろした。

。

“たくさん汗をかいたね”と、モーリイは言った。“随分走ったからね”

“汗なんて、なんでもないわ”と、リディアは言った。“ねえ、向こうの森、寂しそうだけど、なんと美しいんでしょう！ わたし、こんな季節が好きよ。だって、心を奮い立たせるんですもの。この前を流れている川だって、その上流は、わたしの村の近くを流れているし、さらに下れば、色んな町や村を通して、いずれは大きな海にもつながっているの。わたし、海って見たことないけど、この川を見つめていると、それが、わたしを呼んでいるのが分かるの。それとおんなじで、この風景そのものが、何かわたしを、未来から呼び寄せているような気がするの。どんな未来かは分からない。でもそれは、何かこう、輝けるようで、夢のある大きな未来よ。――そして、そんな未来を引っ下げて、いつかわたしは、この町に帰って来るわ。そして、そのときに思うの。確か十六のときに、対岸のあの森を見つめながら、あんな大胆な、大きな未来を夢見ていたんだあって。ねえ、そんな風に人生が進めば、本当に素敵じゃない？”

“君って、信じられないようなことを言う娘なんだねえ”と、モーリイは、半ばあきれたような表情をして言った。“確かに人生が、君の言うようなことになれば、申し分はない。でも、人生って、なかなか、そんなに甘いもんじゃないんだよ”

“分かっているわ”と、リディアは答えた。“でも、人生に夢を持つことは大切なことよ。そしてわたしは、この夢を大切にしたいの”

モーリイは、手元にあった小石を川に向かって投げた。続いてもう一つ。それらは、たて続けに、ゆったりと流れる川に向かって、まっすぐ飛び込んで行った。

“ぼくたちの未来か...”と、モーリイは、半分やけっぱちな口調で言った。“なるようになるさ。そして... いつか、そんなことがあったと思い出して、笑うんだ。そんなもんさ。人生なんて...”

“さあ、それじゃ、そろそろ行こう”そう言って、モーリイは立ち上がった。“今回は、ゆっくりできなかったけれど、出来れば年内に、もう一度君に会いたいとは思っている。それに一度は、君の家や部屋を見てみたいしね。もちろん、君の村もだ”

“ねえ、もう帰るの?”と、リディアは驚いた顔をして言った。“まだ来たばかりだというのに”

“仕方ないんだ。無理なスケジュールを押しに来たんだからね”と、モーリイは落ち着いて言った。“どうしても、今晚までにはUターンしなくちゃならないんだ”

“そんなの、あまりにも短か過ぎるわ”と、リディアは、泣きそうな気持ちになりながら言った。

“そう、無理を言うんじゃない”と、モーリイは冷静に言うのだった。“それに、今度来るときは必ず、ゆっくりするつもりだからさ。今回は君が余りせがむもんだから、それでやむなく来たんだ。そこのところを理解してくれよ”

“どうしても行くの?”と、リディアは、恨めしそうに、モーリイを見上げた。

“どうしてもさ”と、モーリイは、そんなリディアを見つめ返した。

するとリディアは、立ち上がるなり、突っ立っているモーリイの胸の中に、思いっきり頭を埋めた。

“モーリイ。きっとよ”と、彼女は力の限り、モーリイを抱き締めながら言った。“きっとわたしを迎えに来てよ。そうでないと、そうでないと、わたしはこの村の中で朽ち果ててしまうから”

“ああきっとだとも”と、モーリイは、そんなリディアの背中を優しくなでながら答えた。“リディア、泣くんじゃない。もう少しの辛抱さ。そのときが来れば、きっと君を、この村から連れ出してやるよ”

リディアは、モーリイの胸の中で涙をふくと、やっと顔を上げた。

“じゃあモーリイ、あんたを見送りに駅まで行くわ...”

二人は再び駅にやって来た。枯葉が街角のいたる所で、木枯らしに舞っていた。リディアはうらめしそうな目で、ちぎれ雲の移動する、寒そうな空を見上げた。リディアの寂しさに比べて、モーリイは、ずっと平静さを保っていた。

“ねえ、今度はいつなの？”とリディアは、モーリイのそで口を引っ張るようにして尋ねた。

“だから、冬になってからさ”と、モーリイは、リディアを見つめながら答えた。“多分、十二月。そのときには必ず君に会いに行くつもりさ”

“嘘じゃないって約束して！”リディアは、辛抱し切れずに強く言った。

“嘘じゃないさ”と、モーリイは、平然と答えた。“実は仕事で、この町へ演奏会に来るのが一つ入りそうなんだ。ぼくにとっちゃ願ったりかなったりの仕事さ。だって君に会えるんだものね。でもまだ正式に決まったわけじゃなく、言うのをためらっていたわけさ。でももし決まれば、もちろん君を演奏会に招待するつもりだ。その晩は思い切り、賑やかなパーティをしようじゃないか。ただガッカリしないでよ。そこではぼくは主役じゃないんだからね。あくまでも脇役で裏方さ。主役は、歌手で、***という男さ。君は知らないだろうけれど、業界ではちょっと名の知れた男なんだ。そいつのコンサートのパートをぼくが受け持つことになりそうなんだ。この町じゃ、それほど大きくはないけど、由緒のある小劇場でさ。バード小劇場って言うんだが、君は知っているかい？”

“バード小劇場？”リディアには思い当たる節があった。

“そうだ！あのとき、夢に見たあの小劇場に違いなかった。”

“それなら知ってるわ！”とリディアは、顔をほころばせながら叫んだ。“その劇場、わたし入ったことがある。もう随分前のことだけでもね”

“本当か。そりゃよかった”と、モーリイは言った。“それなら、場所を教えなくてもすみそうだね”

“ただし、夢の中でね”そう言って、リディアは戯らっぽく笑った。“でも、場所はちゃんと知っているわ”

“なんだ。夢でか”と、モーリイは言った。“でも今度は、正式に君を招待するよ。もちろん無料でね”

“本当？ そうなら嬉しいわ”と、リディアは言った。“実はね、夢で見たとき、後で、あんな劇場で、あんたが演奏するのを想像してみたわ。でも、後で振り返ってみれば、それは正夢だったのね。こんなに嬉しいことってないわ”

“そうか、そんな夢まで見ていたのか”と、モーリイは言った。“じゃ、楽しみにしておいてよ。夢通りの劇場かどうか。それからもし、誘う相手があれば、もう一枚ぐらい余分に君に招待券を渡してもいいよ”

“じゃ、キャシーがいいわ”と、リディアは即座に言った。“キャシーの分と二枚、お願いね”

“分かった。約束するよ”そう言って、モーリイは、リディアの手をしっかりと握った。

“仮にいけなくなったとしても、そのときにも、十二月には必ず君に会いに来るからね。十二月は今と違って、随分と寒いだろうなあ...”

“きっと大丈夫よ”と、リディアは、笑顔になって言った。“わたし達の為ですもの、コンサートが中止になったりなんかしないわ。そうなるように、わたしもここにいて祈っている”

“本当に君には済まないねえ”と、モーリイは、リディアの目をじっと見つめながら言うのだった。“迷惑のかけ通しで。でもいずれきっと、君を幸せにしてみせるよ”

“少しは、わたしの気持、分かってくれた？”と、リディアは言った。“これからまた、一ヶ月以上待たなきゃならないの。そのあいだ、どんなに寂しい思いをしているか、少しは分かってもらえそう？”

“ああ、よく分かっているつもりさ”と、モーリイは答えた。“だからこれは、日はいつになるか分からないけど、君の為のクリスマスプレゼントさ。ぼくの罪ほろぼしの気持も込めてね”

“この憎らしい人”そう言って、リディアは、モーリイの頬に飛びつき、キスをするのだった。

そうして二人がホームに立っているとき、向こうから、頑丈そうなディーゼル機関車が入って来た。

“あれだ！”と、モーリイは、その列車を見て言った。

“わたしたちを引き離す憎い列車”と、リディアは、立ちながら、それとなくつぶやいた。

しかし、その言葉は、モーリイには聞こえなかったようだった。

“なんだって？”と彼は言った。“それじゃぼくは行くからね”

列車がホームに入ると、モーリイは、忙しそうに、リディアの右と左の頬にキスをし、あわただしく、列車に乗って行った。間もなくして彼は、窓から顔を出して、ホームに立っているリディアを見降ろした。

“じゃまた来るからね。それまでの辛抱さ。さようなら... さようならリディア...”

列車が、ガタンと動き、リディアも精一杯、モーリイに手を振った。

“きっとよ。きっと招待してよ。待っているわ、モーリイ...”

列車はみるみるうちに遠ざかって行く。

いつも味わうことだが、この日もまた、山の彼方へ去って行く列車を見送りながら、リディアは、寂しさのようなものを味わった。

家に帰ってから、リディアはまた普通の生活に戻った。今年の冬に、モーリイと再会できるのを楽しみにしながら...

秋は一段と深まって行く。樹木は色づき、やがて葉を落として、枝木となる。その枝木から斜めにさし込む弱い日光を浴びながら、リディアは自転車に乗って、長いマフラーをなびかせ、牧草地を駆けて行く。短い一日の日の光を惜しみながら、リディアは、いつまでもこうして野山を走り回っていた。なんと周りの自然は冷たく、そして美しいのだろう。空は一面、うろこ雲で埋め尽くされている。地面に映る樹木も、そして自分の影も長い。寒く、凍えるようなあの冬までは、もうすぐそこだった。

“リディア！”と、向うで自分を呼ぶ声がする。

西空に浮かぶ太陽と、うらぶれた樹木を背景に、誰かが、広々とした起伏のある牧草地の沿道に立っている。よく見ると、あのなつかしいポーラだった。

“ポーラ。ポーラじゃない”リディアは、近付くと、自転車から降りて、ポーラに歩み寄り、二人はしっかりと抱き合った。再会の喜びを胸に抱き締めながら。

もう一度リディアは距離を置き、ポーラをしっかりと見つめた。

“以前より少し太ったわね”と、リディアはポーラの手を握りながら言った。“でも間違いなくあなたよ。本当に久し振り。こんな所で会うなんて。ねえ、きょうはなんて運のいい日なんでしょ”

ポーラも、嬉しそうにリディアを見つめていた。

“あんた、まだ学校に行っているんですってね”と、ポーラは、ぽつりと言った。

“ええ、相変わらず”と、リディアは答えた。“——でも、なにやかやあって、勉強の方が今一つなの。家の用事もあるし、両立して行くって、なかなか大変だわ”

“あんたのことは、少しは聞いて知っているわ”と、ポーラはなおも言った。“トランペット吹きの男の人と知り合ったそうね。その人とはまだ会っているの？”

“どうしてあんたが！”と、リディアは驚いて言った。しかしすぐリディアは気持を切り換えた。“そうよ。とってもいい人よ”と、リディアは続けた。“今でもまだ交際は続いているわ。そして、そのうちわたしをここから救い出してくれるのよ。あんたには嘘は言えないわ”

“いいわねえ、そんな人がいて”と、ポーラは、うっとりするように言うのだった。“わたしなんか、さっぱりよ”

“あんたはまだ、あの工場で働いているでしょ”リディアは、それとなく尋ねてみた。

“リトイアの紡績工場？”と、ポーラは吐き捨てるように言った。“あんたには話してなかったけど、あそこは半年で辞めたの。それ以来、レストランのウェイトレスや、雑貨店の売り子や、洋品店の店員など、商売を転々よ。わたしって、本当に長続きがしない性格なのね。その点、あんたがまだ学校に行っているなんて、羨ましい気がするわ”

“父さんは余りいい顔をしていないけれどね”と、リディアは言った。“でもこれはわたしの為と思って、無理をお願いしているの。クラスの子って、みんな裕福で、わたしなんかとても及びもつかないわ。それでポーラ、あんたは今どうしているの？”

“よくぞ聞いてくれたわ”と、ポーラは言った。“実は失業中なのよ”

“まあ！”と、リディアは驚いた顔をした。

しかしポーラは、別に悪びれるのでもなく、むしろ楽しそうに笑顔をつくろって答えた。

“あんたには言わなかったけど、わたし、実は最近まで、この町にはいなかったのよ。わたし、リトイアでは長続きしないことが分かったから、思い切ってリランに行くことにしたの。もちろん親には内緒だよ。だって、親が許すはずないもの。それで、去年の夏、思い切ってリランへ飛び出したわ。あそこは、こことは違って、大きな町よ。車もたくさん走っているし、路面電車まで走っているの。最初、知ってる子を頼ったけど、すぐその子とは別れたわ。だから、全然知らない人の中で、ほとんどたったひとりぽっちよ。さっそく求人広告を見て、とにかく仕事にありついたわ。そんなやかやで、本当にめまぐるしい一年だったわ”

“でもどうして仕事をやめてしまったの？”と、リディアは心配気に尋ねた。

“だってね”と、ポーラは肩をすぼめて言った。“結局、わたしに合った仕事なんてなかったからよ。そしてふと、わたしは家に帰りたくなったの。長いこと両親とも会っていないし、家のことだって気がかりだったしね。それで、なつかしがりながら道を歩いていたら、あんたが向うから来るじゃない。こんなに嬉しいことって、本当に胸が詰まりそうよ”

“そうだったの”と、リディアは言った。“じゃあ、あんたにとっては、本当に久し振りのことだったのね”

“見て、わたしのこの服”そう言って、ポーラは、両手を広げて見せた。“田舎の子の服装に見えて？ どう見ても都会的でしょ”

確かにポーラの服装は、どう見ても、リディアのそれに比べて、センスも色あいも洗練されて、都会風に見えるのだった。若干化粧の濃いのが、リディアには気になった。

“そう、とにかくあなたに会えてよかったわ”と、リディアは言った。“それで、これからどうするの？”

“とにかく、まずは家でゆっくりしたいわ”そう言って、ポーラは、わずかでも田舎の空気を吸い洩らすまいとばかり、大きく深呼吸をした。“しばらくは家でゆっくりして、先のことはそれからゆっくり考える。いいわねえ、帰れる田舎があり、家があるってことは...”

“さあ、それじゃ歩きましょう”

二人はゆっくりと歩き始めた。

しばらく歩いたとき、リディアはそれとなく尋ねてみた。

“ねえ、都会の生活って、本当は辛いものなの？”

ポーラは、不思議そうな顔をして、リディアを見つめた。

“あんたは田舎暮らしが長いから分からないだろうけれど”と、ポーラは言った。“都会と田舎とは全然違うのよ。考え方も何もかも。最初はそれに合わせるのに苦労したわ。でも慣れてくれば、それなりにやって行くことができるようになるの。

本当に、人間って不思議ねえ。つくづくそう思ったわ。その気になりゃ、なんだってできる。中には、あんたには言えないような仕事があったのも事実よ。でも、余り深く聞かないでね”

リディアには、その最後の言葉が気にかかったが、ポーラの願い通り、それ以上聞かないことにした。

ともかくポーラは一年振りに故郷に帰って来たのであり、その幸せな気持を壊してあげたくはなかった。

“ねえ、今のあんたを見ていると”と、リディアはそれとなく言った。“あんたはすごく大きくなって、わたしなんか小っぼけな感じがして来るわ。なぜだか知らないけれど、そんな気がして来るの”

“それ、謙遜？”とポーラは言った。“クラス一の秀才のあんたが小っぼけなんて、そんなことはないわよ。ただわたしは少しばかり図々しくなっただけよ。都会じゃ、そうでないとやって行けないものね。こう見えてもわたし、頭は悪いけど、度胸だけは人一倍ある方なのよ”

“あんたって、見るからにたくましいわ”そう言って、リディアは笑った。

しばらくすると、二人は、のどかな田園の、素晴らしい池のそばを通った。

すると、ポーラは、それを見るなり急に叫んだ。

“見て！ 池よ。なつかしいわ。忘れもしない、あんたと、そしてあんたの兄さんのレオンと一緒にスケートをしたあの池よ。まだわたしたち小さかったけど、あんなときもあったのね。本当に、あのときのことが今でも目に浮かびそうよ。ねえ、あのときあんたはまだ滑れなくて、わたしが滑り方を教えてあげたじゃない”

リディアもその日のことは覚えていた。いつの日だったか、ポーラに誘われて、レオンと一緒に氷の池を見学に行った。他にも村の子供たちが何人か来ていて、すでに、広い池の氷の上をぐるりと回ったり、滑らかに美事に滑っていた。リディアは滑った経験がなく、ただ岸辺の草むらに腰を降ろし、彼らの滑る様子を、かたずを呑んで見守る他はなかった。間もなくして、ポーラもスケート靴をつけて滑り始めた。彼女も、他の子に負けず劣らずスケートはうまかった。それを見て、リディアは、同じく滑れずに見ているだけのレオンに向かって言った。

“わたしもあんな風に滑ってみたいわ...”

すると氷上のポーラが手招きをしながら、リディアを呼んだのだ。

“面白いわ。あんたも滑りなさいよ！”

間もなくして、レオンにも勧められて、恐る恐るリディアはポーラのスケート靴を借りて氷上に出た。ポーラは靴のまま、そんなリディアの手を取って、いろいろと滑り方をアドバイスしてくれた。

ところがいざひとり立ちの船出をするなり、リディアはX脚のままバランスを失って、両手を大きく振りまわしながら、大声を出して、尻もちをついてしまった。

ポーラは笑いながら、倒れているリディアの下に駆けて来た。駆けて来るなり、ポーラは第一声をこう言った。

“あんたって、叫び声が大きいのね”

“だって、怖かったんだもの”リディアは、痛そうに打ったお尻をさすりながら、ポーラを見上げて答えた。

そこへ草むらにいたレオンも駆けつけて来ようとしたが、レオンも普通の靴のせいで氷の上でひっくり返ってしまい、そこでみんなは大笑いとなった。

広い氷上の向うにはモミの大きな林があり、なんとも言えない、美しい、素晴らしい冬景色だった。氷の向うの方では、他の子供たちが一団となって、スイスイと滑っている。

“わたしも早くあんな風になりたい”リディアは倒れながら、彼らの様子を見て、そう思った。

“本当ね”と、リディアは、昔をなつかしむように答えた。“あんたに教えてもらった日のことは、今でもよく覚えているわ。初めはダメだったけど、終わりの頃にはなんとか滑れるようになって”

そうだ、そして冬の短い一日が終わって、薄曇りの風の強い夕暮れ、みんなと楽しい一日を振り返りながら、林の彼方に沈み行く美しい夕焼けを眺めつつ、ポーラとレオンとの楽しい会話を弾ませつつ帰って行ったあの日のことが、リディアには今も、ハッキリと脳裏に焼きついていた。それは幼い子供の日の幸せな風物詩の一ページでもあった。

“そうね。でも、あれからあんたは随分腕を上げてうまくなったじゃない”とポーラは言った。

それから、ポーラは、その当時をなつかしみつつ、こう言ったのだった。

“あんな日は、もう二度と来ないわ。あの頃は、何も考えず、本当に幸せだったのにな...”

リディアも、その言葉に胸が打たれて、目頭が熱くなる思いだった。

“でも、あの頃だけが幸せなわけじゃないわよ”と、リディアは反論した。“これからだって、幸せは、いくらでも来るわ”

“そうかねえ...”と、ポーラは、悲観的に言うのだった。“わたしなんか、この年で、まるでおばあさんよ。あんたより先に、色んなことを知ってしまったせいかも知れないわ。――でも、あんたの言う通りかも知れないわね。わたしたちはまだ若いんだし、幸せはまだいくらでもやって来るのかも知れない...”

“そうよ。そう思わなきゃ”とリディアは言った。

ポーラは歩きながら、ふと、さざ波を立てている広い湖面を見つめた。

“ねえ、この池も、また冬になれば凍るわ。そうなれば、また一緒にスケートをしましょうよ”

“でもポーラ、あんたはずっと田舎にいるつもり？”

“そう、当分はね”と、ポーラは答えた。“ともかく、都会に疲れたのよ。しばらく田舎でゆっくりしたいわ。それからまた、都会に働きに出るか、田舎で生活してみるか、いずれかになるでしょうけれど、今は考える気にはなれないわ”

“相当参っているようね”と、リディアは、そんなポーラを見つめながら言った。“そうね、せっかくあんと会えたんだし、また冬になれば、一緒にスケートをしましよ。ただ兄さんが、もうこの田舎にいないのが残念だけど...”

“あら、レオンは、もうあんたの家にはいないの！”と、ポーラは驚いたように言った。

“そうよ。知らなかった？ 兄さんは今年の春、家を出て、あんと同じリランに行ったのよ。今は大工の見習いをやっているわ”

“そうなの！”と、ポーラはなおも驚いて言った。“だったら、わたしと同じところにいたわけなのね。だのにわたしったら。あんたの兄さんって、なかなか優しくて、いい人だったのに...”

“でも、兄さんにとっちゃ、ああするのが一番だったのよ”リディアは、レオンを弁護して言った。“兄さんは兄さんで、やっぱり田舎の生活が我慢できなかったのね”

“でも今は田舎よ”と、ポーラは、うっとり新鮮な空気を吸い込むようにして言った。“ああ早く家に帰り着きたい”

そんな会話をかわしながら、二人は自転車を押しつつ、我が家の方へと帰って行くのだった...

クリスマスの日はまだ目下だった。その頃になると、リディアは急にそわそわし出した。というのも、モーリイから、バード小劇場でのコンサートの招待状を兼ねたクリスマスカードを受け取ったからだ。リディアをあれほど待たせたコンサートが十二月二十四日に開かれることが正式に決まった。リディアは、当初考えていたキャシーが別の用事で行けないのを機会に、現在は家の手伝いをしているポーラと一緒に連れて行くことを考えた。ポーラは喜んで承諾してくれた。

この時期ともなれば、もうサビーノ村はもとより、リトイアの町も、そこへ行くまでの谷あいの道も、山も森も、一面が銀世界だった。

リディアは、こっそりとしまっている机の引き出しの中の一枚のクリスマスカードを見ては、その日が来るのを、指折り数えた。

レオノールは相変わらずで、牛の世話や、乳絞りの仕事をちょっとやれば、もう酒瓶を片手に、仲間を呼んだり、あるいは、仲間の家に行ったりは、一日中、トランプ遊びに興じていた。リディアは、そんなレオノールのことを苦々しく思いながらも、ひたすらその日が来るのを夢見ながら、勉強をしたり、空想をしたり、ちょっとした文章を書いたりして、過ごした。日記はもう既に、この頃から書いていた。リディアの夢は、モーリイと一緒に都会で暮らすこと、そして、モーリイのトランペットと、自分のフルートとの共演をすることだった。いつか、そんな日が来ることを夢に見、そんな思いを、誰にも見られない日記に綴った。そしてクリスマスが近付いたある日、自分の希望が実現される日は、案外そう遠くはないかも知れない、とまでリディアは

日記に綴った。

そしてついに！ 待ちに待ったその日がやって来た。リディアは、もう随分以前から、モーリーのことは内緒で、この日のコンサートのことは父に告げていた。レオノールは、決していい顔はしなかったが、ただのコンサートだと説得されて、しぶしぶ承知した。レオノールはこの日もまた、トランプがあると言って、午後、家を出て行った。外に出て、家畜の世話をした後、リディアは、自分の部屋に飛び込んで、鏡に向かって、いつになくおめかしをした。胸は自然と浮き浮きして来た。

バスに間に合わないといけないので、リディアはいつもより早く家を出た。オーバコートをつけ、頭には赤いショールをして、家を出た。目の前は、道も、山も、一面雪で真白だった。空は晴れて、浮き浮きするほど青かった。ただ、北風だけは強く、その寒さが骨身にしみそうだった。リディアは、白い息を吐きつつ、し～んとした村の中を、雪を踏みしめながら、歩いて行った。

ポーラの家を訪ねると、ポーラが勢いよく玄関から飛び出して来た。白い雪面を駆けて来るポーラは、まるで天使のように、リディアには思われた。白い雪面には、空がよく晴れているせいか、木立の影や、自分たちの影が、くっきりと刻み込まれている...

“案外と早かったわね”と、来るなり、ポーラは言った。

“ええ、バスに乗り遅れるといけないからと思って”と、リディアは答えた。

二人はやがて、村の中央に位置するバスの停留所にまでやって来た。手には手袋をつけ、寒そうにもみ手をし、足踏みをしながら、バスの到着を待ったが、その間に来る人は誰もいなかった。待っているあいだ、リディアはポーラを見やりながら、話しかけた。

“きょうはまた、随分おめかししたみたいね”

“だって、年に一度のクリスマス・イブでしょ”と、ポーラは言った。“それに、きょうはあなたのいい人に会える、というもんだから。そんなアーティストとあんたとが知り合いだなんて、わたし知らなかったわ”

“偶然知り合っただけよ”と、リディアは素っ気なく答えた。“でも、単にコンサートを見るより、その人たちと話しが出来る方が楽しいでしょ”

“そりゃもちろん”と、ポーラは言った。“だからきょうは家の人に、帰りは遅くなるからと言って出て来たわ”

そう言って、二人はにっこりと笑い合った。

“それで、あんたの方はどうなの？”

“わたし？”と、リディアは言った。“お父さんは、コンサートに行くんだな、とただそれだけ。他には何も聞かなかったわ。だから、きょうは思い切り遅くなっても、多分何も言わないわ。だって、このコンサートの費用は一銭だって、父さんからはもらっていないんですもの”

そう言っているうちにも、道の向う側から、古ぼけたバスが一台、走って来た。バスが到着すると、二人はあわてて乗り込んだ。

冬の日ざしは短く、バスが走っているうちにあれほど明るかった空も灰色にくすみ、段々とクリスマス・イブの日は暮れて行った。

リディアはバスに揺られているあいだ、ふと、何年か昔の冬、初めてレオノールに連れられてこの村にやって来た日のことを思い出した。あれからもう、何年が経過したのだろうか。いろんなことがあった村の思い出。そして今自分は、バスに揺られながら、恋人のモーリイに会いに行こうとしているのだった...

学校が冬休みに入り、しばらく来ないうちに、雪景色となったせいか、随分とリトイアの町が変わったような気が、リディアにはした。長い道のりをあえぐように走ってくれたバスがやっと息をつくように止まったのを見計らって、リディアとポーラとは、バスから降りた。そして、まだ開演前にもかかわらず、二人は、バード小劇場に直行した。

モーリイが書いていた楽屋の入口はすぐ分かった。二人は好奇心で目を輝かせながら、楽屋口から中に入った。外ではさほど気にならなかった騒音も、中に入るなりがぜん活気づいた音楽の洪水が耳に飛び込んで来た。トランペットの音に混じって、トロンボーンも、ピアノの音も聞こえる。それらめいめいが勝手に音を鳴らし、決してまとまった一つの音楽とはならなかった。リディアは、ポーラと連れ立って、音のする部屋の入り口に向かって、狭い、長い廊下を伝って行った。楽屋のドアは開かれたままになっていて、そこから、明かりと、音の洪水とが洩れていた。

リディアは、中に、初めて顔を覗かせた。すると、大勢の楽員に混じって、向うでトランペットに興じている一人の音楽家の姿が見えた。それが、久し振りに見るモーリイ、その人だった。リディアとポーラの二人の少女がコートを脱いで入って来ても、気に留める人は誰もいなかった。だが、向うでトランペットを吹いているモーリイは、すぐ気が付いたようだった。

彼は、二人の下へすぐやって来た。

“やありディア、よくやって来てくれたね”と、額に汗を浮かべながら、モーリイは、リディアと固い握手をした。“そしてこの人が、君の友だちかい？”

“ええ、ポーラよ”と、リディアは彼女を紹介した。

“ポーラ・イルムと申します。よろしく”そう言って、ポーラは軽く会釈をした。

“そうかい。よく来てくれました”と、モーリイは、ポーラにも握手をした。“あなたたちの為に特等席を用意しましたからね。きっと楽しいクリスマス・イブになると思いますよ”

それからモーリイはリディアの方に向き直って、小声で言った。

“実は歌手の到着が遅れているんだ。なにせ、この雪だからね。それでみんなイライラしているんだけど、大丈夫、開演には間に合わせてみせるから。ただ打ち合わせが十分でなく幕をあけるのが、少し心配だけど...”

“そう、でもすごい熱気ね”と、リディアは、周りを見回しながら言った。“あんたと会えて、本当に嬉しいわ”

“ぼくだって”と、モーリイは答えた。“一でもリディア、みんなの邪魔になるといけないから、この先の控え室で待っててくれないか。そこには、熱い、うまいコーヒもあるんだ。ぼくが案内するよ”

そう言って彼は、楽屋から二人を別室へと案内した。

二人は、物珍しそうにキョロキョロしながら、控え室にやって来た。

控え室は、さっきのごちゃごちゃした雰囲気とは打って変わったようにさっぱりしていて、静かで、まるでスタジオのような感じの部屋だった。実際、撮影関係の道具も置いてあった。二人は、そこにあった皮張りのソファに、満足深げに深々と腰を降ろした。

“じゃちょっとそのまま待っていてね”そう言ってモーリイは、さっそくコーヒを沸かしにかかった。

リディアは、坐りながら周りを見回したが、調度の配置などから、なんといい部屋だろうと思った。騒音は、ここまでは、ほとんど届いては来なかった。

しばらくして、モーリイは、二人の前のテーブルの上に、コーヒを持って来た。暖かそうな湯気が立っていて、実際リディアが飲むとうまかった。モーリイも、それをすすりながら、リディアたちに話しかけた。

“それでどうする？”とモーリイは言った。“ここのステージが夜九時には終わるんだ。その後、ぼくたちはここの酒場へくり出すんだが、君たちも来るかい？”

“ええ、是非”と、リディアは言った。

“小々遅くなってもかまわないんだね”と、モーリイは言った。“ただ歌手だけは、きょうの夜行列車でとんぼ帰りだがね”

“いいわ。お付き合いするわ”と、リディアは答えた。“ポーラもいいでしょ？”

そう言うと、ポーラも黙ってうなづいた。

そのとき、団員の一人らしい男がやって来て、モーリイを呼んだ。

“オイッ、ボスが呼んでるぜ”

“分かった。すぐ行く”とモーリイは答えた。“じゃ、もう時間がないから、直接劇場へ行っておくれ。終わったらまたここへ来ること。ここで待ち合わせだ。分かったね、リディア”

リディアがうなづくと、モーリイは、彼に連れられるようにして、控え室から出て行った。

リディアは、劇場に入るとき、胸がワクワクした。自分がこれから入ろうとしている劇場は、果たして、夢で見たあの劇場そっくりなのだろうか？

薄いピンクのカーテンにおおわれたオーソドックスな劇場の夢に見た内部は、今もハッキリと覚えていた。だが、ひとたび中に入るや、その夢は見事打ち砕かれた。明るい照明に照らされた売店があり、一見小さな店のようなガラスの飾りケースの向う側に、観客席が並んでいて、そこがどうも小劇場のようであり、夢で見た趣とはかなり違っていた。だが、ここも、それなりにリディアは気に入った。とりわけ、劇場と隣合わせとなった売店に陳列されている様々な珍しい品々が、リディアの目を奪った。高価なガラス製品、レコードや時計、宝石類など、リディアにはとても手の出ないものばかりが売られていた。二人は、ガラスの陳列棚を、生つばを呑んで見つめる他はなかった。

劇場には、大勢の人が詰めかけて来た。毛皮のコートを着た裕福そうな婦人の姿が見られた。でも、リディア達は、モーレイのおかげで、最前列の一番いい席に坐ることができた。

やがて七時。華やかな幕開きとなった。蝶ネクタイをあしらった司会の男がマイクを片手に、まず楽団員の紹介を行った。モーレイが紹介された時、リディアは、力の限りの声援を送った。これこそまさに、夢にまで見た、本物の出来事だった。

歌手は、なんとか間に合ったらしく、遅れて到着したことなどおくびにも出さず、やがて司会に紹介されて現れると、みんなの声援に答えて手を振っていた。

さっそく歌が始まった。しかしリディアは、歌手の歌声よりも、モーレイの奏でるトランペットの響きの方に、より耳を澄ませた。そして、ポーラの手を握ると、目を閉じ、うっとりするようにその音楽に聞き入った。

時折、モーレイの独奏が入ったときなど、リディアは、目を開いて、彼の演奏する姿を見つめた。彼のトランペットの響きは、聴衆たちを黙ってうならせるに十分な力量を持っていた。歌手も、そんな彼の力量を認めて、敬意を表するかののように、マイクを片手に、立ったまま、じっと彼の方を見つめていた。

“あれがモーレイよ”と、リディアは心の中で叫んだ。“素敵な、素晴らしいモーレイ。わたしのモーレイ。もう決して放さないわ”

それは、リディアにとって、まるでこれが現実かと思間違ふような、夢のような一瞬だった。

二時間ほどのステージは、夢のように過ぎてしまった。人々の割れるような拍手と歓声の中、幕は降ろされた。ゾロゾロと人々が帰り支度にかかる頃、しかし、リディアたちにとってこれは終わりではなかった。これからが始まりで、リディアは、もう家に帰れなくてもかまわないとさえ思っていた。だって、こんなにも楽しかったコンサートだったもの。まだ、リディアはずっと夢の中にいたかった。いつまでも、夢の中に浸っていたかった。

外に出ると、二人は手をつなぐようにして、寒空の下、さっそく楽屋裏に向かった。

入りしな、さっそくあの歌手が出て来て、二人と触れ合いそうになったのには驚いた。歌手の方も、驚いたように彼女たちを見つめた。

歌手にサインをねだる少女たちが、どうかぎつけたのか、もうさっそく出口のところに取り巻いていた。その少女たちと勘違いしたのか、歌手は、二人を見て、サインペンは何？と、手の仕種をした。

しかしリディアたちは、すぐ分かったものの、首を横に振った。

“それは残念だったね”と、歌手は一言言った。“最前列にいた娘だろう、君たち。でも、目当ては、どうもあのトランペット吹きのようなね”

そう言ってそそくさと彼は出て行った。外でサインをねだる少女たちを無視して、彼はすぐ待たせてあった車に乗り込んだ。車はすぐ出発した。

ポーラはしかし、歌手の方に気を取られているようだった。

“残念だったわ。サインペンを持ってくればよかったのに”と、ポーラは言った。“今度もういつ会えるか分からないのに...”

“あんた、あの歌手に惹かれたんじゃない？”と、リディアは、皮肉るように言った。

“だって、素敵じゃない”と、ポーラは答えた。“リランでもかなり有名だったのよ。その彼がここに来るなんて。しかも、その彼とスレ違うなんて。ああ、天国にも昇る気持！”

リディアは、そんなポーラの様子を、にっこりしながら見つめていた。

控え室にやって来ると、中は、さっきと違って、楽団員やその関係者たち、ファンなどでごった返していた。そして、もうさっそくシャンペンが封を切られ、手に手にグラスを持った人々が、楽しそうに語り合っていた。その中に、もちろんモーリーの姿も見られた。

リディアは、ポーラの手を取ると、さっそくモーリーのそばへ歩み寄った。モーリーは、他の人と話していたが、彼女たちが来ると振り向いた。

“どうだった？ ぼくたちのコンサートは”と、モーリーは、開口一番に言った。

“素晴らしかったわ”と、リディアは言った。“本当に、楽しい夜だったわ”

“それでどうだった？ 君の夢に見た劇場とは”

“それが全然違ったの”と、リディアは答えた。“でも、ここの劇場も素敵よ。気に入ったわ。その舞台上で、あんたがトランペットを吹いている姿なんて、もう最高よ。きっと夢で見た劇場って、別の所にある、別の劇場なんでしょうね。どこか寂しいところにある...”

“そうかい。何もかも夢通り、というわけには行かないからね”と、モーリーは言った。“あっリディア、それからちょっと”

そう言って、モーリーはリディアだけを、部屋の隅の人目につかない所へ連れて行った。

それから彼女の手を取ると、モーリーは、胸ポケットから小箱を取り出した。

“はい、これ。君に”そう言って、その小箱をモーリーは、リディアに手渡した。“開けて御覧”

リディアが目を輝かせてふたを開けると、中には、真珠の指輪が入っていた。

“これは、君へのクリスマスプレゼントさ。さっき、劇場で見つけたもんだから、買っておいただ。そんなに高価なものじゃないけどね”

“わあー有り難う”と、リディアは、それを見て言った。“こんなの貰うの初めてよ！”

“うまく指にはまるか、さっそくはめてよ”と、モーリイは言った。“もしはまらなきゃ、さっそく換えてもらうから”

リディアは、小箱から指輪を取り出すと、自分の指につけてみた。余りピッタリで、怖いぐらいだった。

“こんなの貰って、本当にいいの、モーリイ”と、リディアは顔を上げて言った。

そしてさっそく、彼を抱き締め、彼の頬にキスをした。しかしモーリイは、彼女よりも上手で、そんな彼女の唇を、自分の唇の方へと持って行くのだった。モーリイは、彼女の唇に、力強くキスをした。しかしリディアは、少し抵抗するそぶりを見せ、やがて彼を、自分から放した。

“ここじゃダメよ”と、リディアは、周りを見回すようにして言った。“みんなに見られるじゃない”

“なあに、かまうものか”と、モーリイは、笑顔を絶やさずに言った。“どうせみんな何にも気に留めてやしないんだもの。さあ、ぼくたちも一緒に酔おう...”

そう言ってリディアの手を引っ張ると、モーリイは、みんなのいるホールへと出た。

そこにはポーラもいて、見知らぬ男と楽しそうに話していた。しかし目ざとく、リディアのはめている真珠の指輪を見ると、ポーラは言った。

“それ、どうしたの？ あの人にもらったの。なかなかいいわねえ...”

“ええ、さっきの劇場で売っていたものよ”と、リディアは楽しそうに答えた。“なかなか素敵でしょ”

“わたして、宝石には目がないのよ”と、ポーラは言った。“見ただけで分かる。なかなかいい真珠よ。あんたって、本当に幸せ者ね...”

そのとき、誰かが、

“おいみんな、出ようぜ！”と叫んだ。

モーリイが言っていた酒場に、きつとくり出すに違いないのだ。

ポーラとリディアの二人の間へ、モーリイが割って入って来た。

“さあ、今から酒場に行くらしいよ。君たちも、もちろん行くだろう...”

“ええ、もちろんよ”と、リディアは声を弾ませて答えた。

やがて、部屋にいたみんなは、めいめい暖かい服装をして、雪に埋まった暗い通りへと出て行った。

彼らのどの鼻から吐く息も、白かった。雪はもうすっかりやんでいて、空は逆に晴れて、三日月のせいか、空に輝いている星々は美しかった。リディアは、通りに入るなり、心も弾んで、思わず星空を仰ぎ見た。冬空を飾るオリオン座が、美事に輝いている。大犬座のシリウスも、牡牛座のアルデバランも、御車座のカペラも、双子座のカストル・ポルックスも、みんなそれぞれ夜空を彩って輝いている。今日の夜空は、なんと美しいんだろう、とリディアは思った。

通りに出たみんながそろそろと歩き始めたので、リディアたちも遅れまいと歩き始めた。

どこか遠くで犬が吠えたてていた。既に酔っ払った男が、壁をこするように、千鳥足で帰って行く。人々の笑う声。まだ、リトイアの町は、賑わいのまっただ中であつた。

先頭が連れて行ってくれたところは、生バンドもあり、ダンスもできる、かなり立派なホールだった。まだ空いていたテーブルに、みんな散らかって腰を降ろした。リディアはポーラと、それからもちろん、モーリイと同じテーブルだった。他に、モーリイと友だちのレンと呼ばれている男も一緒に、その男は、一目会ったポーラに熱を上げているようだった。

ボーイがやって来て、注文を取った。薄切りのハムと、ブランデー、ビールなどをそれぞれ注文した。

“おいモーリイ”と、レンと呼ばれている男は言った。“あのバンドにはトランペット吹きがないみたいだぜ。お前、行って、一緒に演奏してやったら？”

“本当よ、ねえ”と、リディアも、モーリイの腕に手を当てて言った。“お願い。ここでも演奏してみてよ。あんたのトランペットが聞きたいの”

モーリイはしぶっていたが、やがて、他のテーブルの者もねだるに及んで、モーリイは、しぶしぶ立ち上がった。彼が立ち上がると、周りから、盛大な拍手が沸き上がった。

モーリイが、トランペットを片手にバンドの所へ歩み寄ると、バンドは一時演奏を中断し、彼と何か、2、3話し始めた。やがて話しがついたのか、演奏が再開されたときには、モーリイは、もう立派なバンドの一人になっていた。彼の、甘く、力強い響きが、やがてホール中に鳴り響いた。リディアは、そんな彼の演奏を、自分のテーブルにいて振り返りながら、うっとり耳を澄ませて聞いた。

すると間もなく、レンがポーラをダンスに誘い、二人は席を立て中央のホールに向かった。

リディアのテーブルには、リディア一人だけとなってしまったが、リディアはグラスを片手に、彼の演奏や、他の人たちがダンスをする様子を、楽しみながら見つめていた。

しかし彼女にも、やがて見知らぬ人から、ダンスの誘いが掛かって来た。リディアは、演奏しているモーリイに気兼ねしながらも、彼の誘いに応じることにした。二人が、ホールの中央で踊っているとき、リディアがチラッとモーリイに目を向けると、モーリイは怒ったような顔つきで演奏しているのがよく分かった。しかしリディアは笑顔で応じ、見知らぬ男とダンスを続けた。

盛大な拍手の中、モーリイの演奏は終わり、同時に、リディアのダンスも終わって、めいめいが、自分のテーブルに戻って来た。

テーブルに着くなり、開口一番、モーリイは、例の男のことを尋ねた。

“今の男は誰だい？ よくぞぼくが演奏している前で”

“知らない人よ”と、リディアは、ケロリとした表情で言った。“だって、誘われたんだもの、断るわけには行かないわ。それに、他の人と踊っていけないということはないでしょ”

“そりゃそうだけど...”と、モーリイは、リディアに見つめられて、言葉を詰まらせた。“でも、何もぼくが演奏しているときに踊らなくても。まるでぼくは裏方かい？ そんな気がしたよ”

“悪かったわ、モーリイ”と、リディアは素直に謝った。“機嫌を損ねないでね。そんなつもりじゃなかったんだから。さあ、もうこの件は、これでお終いにしましょ”

“じゃ、今度はぼくと踊ってくれるかい？ リディア”とモーリイは言った。

“もちろん。喜んで”そう言って、リディアは、モーリイに手を差し伸べた。

ポーラたちが戻って来るのと引き替えに、今度は、リディアとモーリイとがホールに向かった。

二人は、他の人々が踊っているのに紛れて、しっかりと抱き合った。

“君は、今夜は特に素敵だね”と、モーリイは、小声でリディアにささやいた。

“あんただって”と、リディアは答えた。“今夜のあんたは、今まで見た中で最高よ。でももう、トランペットは吹かなくていいわ。今夜は、あんたとゆっくりとお付き合いよ...”

バンドは、ゆっくりしたテンポの、甘い音楽を流し続けていた。

“今夜は、素敵なクリスマス・イブだったかい？”と、やがてモーリイは言った。

“ええ、とっても”と、リディアは答えた。“ねえ、このままずっといたいわ。いつまでもよ。さっき、外へ出たとき、きれいなお星様が輝いていたわ。ねえ見た？ みんなとっても美しかったわ。これまで見たことがないぐらい...”

“そう言や、星がきれいみたいだったね”とモーリイは答えた。“それがどうかしたのかい？”

“幸せな夜には、星がきれいに見えることが分かったのよ”と、リディアは答えた。“星が永遠であるように、わたしたちの幸せも永遠であるといいわ”

“永遠とまではいかなくとも、これからはずっと続くさ”とモーリイは言った。

“本当？ 嬉しいわ...”

そう言うと、リディアは、モーリイの胸元に、幸せそうに頭を埋めた。

ダンスや、おしゃべりの楽しい時は、そのようにして過ぎて行った。いつのまにかもう夜中は過ぎて、みんな酔いも回り、帰り始める者も出て来た。リディアも、少しホロ酔い気分で、いい気持だった。

“さあリディア、なんならぼくの部屋で泊まろう”と、モーリイは言った。“ぼくたちはあした出発するから、ホテルの部屋を確保してあるんだ”

“あした、帰るの？”と、リディアは酔いながら言った。

“そうさ。不満かい？ でも仕方ないんだ”と、モーリイは言った。“仕事の本拠地がリランにあるんでね。君を連れて行くわけにも行かないし”

“いいから連れてってよ”と、リディアは、半ば酔いながら言うのだった。“いいからわたしをあなたの仕事場まで連れてって！”

“そう無茶なことを言うんじゃない”と、モーリイは言った。“君、きょうは珍しく酔ってるね。でも、酔ってる君もまた可愛らしい...”

“酔ってなんかいないわ”と、リディアは言った。“ただあなたと離れたくないだけ。それだけよ”
モーリイが彼女を抱え上げようとする、リディアは、よろよろと立ち上がった。

“ねえホラこの通り、しゃんとしているわよ”

そう言いながらモーリイの手を借りずに立とうとしたが、するととたんにバランスを失って、再び椅子の上に坐り込むのだった。

“ホラ見ろ”とモーリイは言った。“今夜の君は酔っている。そんな状態で家へ帰れやしないよ。だから今晚は、ぼくのホテルで泊まろう”

“いいわ、連れてって”とリディアは言った。“ホテルでもどこでも、あなたの行くところならどこでも付いて行くわ”

“よし分かった。じゃ、一緒に行こう”モーリイはそう言って、再びリディアを抱え上げた。

“ねえ、ポーラは？ ポーラはどこにいるのよ？”リディアは急に思い出したように言った。

“あの子かい？”とモーリイ。“あの子ならもう出て行ったよ。別の男と一緒にね。あのレンという男さ。分かるかい？”

“ええ分かるわ”と、リディアは言った。“ということは、もう戻って来ないということなのね”

“そういうことだ”と、モーリイは言った。“さあ、それじゃ一緒にここを出よう...”

リディアとモーリイの二人は、雪道をよろけながらも、なんとかホテルまでたどり着いたらしい。身の切るような冬空の下を歩いて、やっとの思いでホテルにたどり着くなり、リディアは思わずベッドの上に倒れ込んでしまった。

“そのまま寝込んじゃダメだよ。ちゃんと服を着替えなきゃ”と、モーリイは言った。

リディアは、もうほとんど眠りそうだった。

“でも、寝間着はあるの？”

“ぼくのパジャマを着るがいい。ぼくの方はいいからさ”

モーリイはそう言って、パジャマをリディアのいるベッドに投げた。

リディアはそれを受け取ると、もぞもぞと動きながら、服を脱いで、パジャマに着替え始めた。

。

モーリイは、そんな彼女の様子を、ランプの薄明かりの中で見つめていたが、やがて、

“ぼくはシャワーを浴びて来る”と言って、シャワー室に飛び込んだ。

しばらくしてモーリイがシャワー室から出て来たとき、リディアは、かなり酔いも覚めて来たようだった。

リディアが身を横たえているその横へ、モーリイが飛び込んで来た。

“リディア、リディア、起きているのかい？”と、モーリイは言った。

“ええ起きているわ”と答えたリディアの声は冷静だった。目はしっかりと開かれ、天井を見つめていた。“ねえ、もう夜中の何時かしら？ 今頃お父さんはどう思ってるかしら。あした帰れば、きつとかんかんよ。だって初めての夜更しなんですもの”

“大丈夫さ。バスがなくなって帰れなくなったと言えればいいじゃないか”とモーリイは言った。

“でも、あんたと泊まったなんて言えないわ”と、リディアは言った。“そんなこと知れば、それこそ殺されてしまうわ”

“怖いお父さんなんだね”と、モーリイ。“じゃこういうことにすればいい。ポーラと一緒に泊まったって。それじゃ君の父さんも、そんなに怒らないだろう”

“いいの。なんとかごまかすから”と、リディアは答えた。“それよりモーリイ。あしたには帰るのね。今度会えるのはいつなの？”

“だからぼくがメロランスに行ってからさ”と、モーリイは答えた。“それまでは多分、もう君とは会えないよ”

“そんなの！”と、リディアは泣きそうな表情になって言った。“じゃ、メロランスに行くのはいつなのよ。言って。はっきり言ってよ！”

“案外早いかも知れないよ”とモーリイは答えた。“来年の二月。そう、多分二月には、なんとかメドがつくさ。そうなりゃ、さっそく君を呼ぶよ。君を呼び寄せて、今度こそ、君と一緒にだ”

“そう、二月なのね”と、リディアは胸をなで降ろすように言った。“じゃ、二月までの辛抱というわけなのね。そのときが来れば、そのときにはもう本当に、あなたと二人きりなのね。まさかこれは、夢なんかじゃないんでしょうね”

“ああ本当だとも”と、モーリイは自信たっぷりに言った。“夢なんかじゃなく、君はもうぼくのものさ。メロランス——ぼくにとっても夢の都さ。そこで君は、ぼくと一緒に暮らすんだ。そして、そこでぼくたちは自由な道を歩いて行く。ね、これで君は納得しただろう。もうしばらくの辛抱さ”

“わたし、今、とっても幸せな気分よ”と、リディアは言った。“そのときまで、これをあんたと思って生きて行く”

そう言ってリディアは、真珠の指輪をはめた手を高々と上に掲げて見つめた。

“あんたのくれた真珠の指輪。ポーラもとっても褒めてくれたわ。わたし、毎日これを胸に抱いて眠るわ。あんたと会える来年の二月が来るまでね。ああモーリイ、わたし、本当に幸せよ。まるで夢のようよ...”

そう言うなりリディアは、モーリーの頭に手を回して、彼を抱き寄せ、しっかりと抱き締めた。モーリーも、そんな彼女の背中に手を回して、彼女をしっかりと抱き締めるのだった...

やがてリディアは急に体がほてっているのを感じ、ベッドから起き上がった。

そして窓の方に歩み寄った。

“アルコールのせいかな、少し体が熱いわ”と、リディアは言った。“少し窓をあけてもかまわない？”

“

“ああかまわないとも”と、ベッドに横たわっているモーリーが答えた。

リディアが、かんぬきをはずして窓をあけると、冷たい空気がさっと室内に入り込んで来た。

リディアは窓をあけ、身を乗り出すようにして、空を見上げた。雲ひとつない、素晴らしい冬の夜空。オリオンは西の空に移動し、今や、獅子座や北斗七星が夜空に輝いていた。シリウスはまだ、オリオンの下の方で、一等明るい光を投げかけていた。天の川が、まるで彼女に手招きでもしているかのように、夜の空の上で揺れていた。

“ねえ、きょうは本当に素晴らしい夜よ”と、リディアはそれを見て言った。“ねえモーリー、あんたもここへ来て見たら？ 本当に、星がきれいいわ”

“もう来ているよ”

その声の近さに驚いて振り向くと、モーリーは、すぐ彼女のそばにまで来て立っていた。

彼は後ろから彼女を抱き、その手はリディアの胸に触れた。リディアはしかし、されるがままに任せた。

“ねえモーリー”とリディアは言った。“あれが冬の星座のオリオンよ。いつ見てもきれいだわ”

“本当だね”と、モーリーも、窓から頭を出して言った。“ぼくは、余り星には詳しくはないけど、でも、オリオン座ぐらいなら分かるよ。ああ、あれが天の川なんだねえ。――でも、星の美しさは、君のようだ。ぼくのリディア。愛しているよ”

“わたしもよ、モーリー”と、リディアは言った。“あの星がいつまでもあるように、わたしたちの愛もずっとあればいいわ...”